
Color blindness

グリコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Color blindness

【Nコード】

N7811B

【作者名】

グリコ

【あらすじ】

色覚異常。少年はそのとき、真実を見る。 【関連】 ファンタ

ジーノ騎士ノ剣士ノ

世界観&プロローグ

【赤】imag:アゼル大陸:勇猛な民の住む大陸。喧嘩っぱやく、古くから有能な剣使いを輩出してきた。食べるものが動物の肉が多く、他の国に比べて体が大きく身長も高がつりとしていた民が多い。歴史は長いが何度も革命を起こしクーデタを起こす為他の国はあまりこの国とは関わりたがらない。あまり治安が良くなり、国王は国力の向上に四苦八苦している。

お抱えの軍隊は猪突猛進な戦い方から『赤い闘牛(Red bull fighting)』と呼ばれ陸の戦いに強い。

【青】imag:アルベルト大陸:知的な民の住む大陸。豊富な自然を持ち本や製紙業が発達している。国で保有する膨大な量の本や歴史資料を小さな頃から子供に読み聞かせる習慣があるため皆学力が高い。温和だが少し冷血な民が多い。昔から魚や山菜などあまり肉を食べない環境のため民の身長は低めで骨格も細め。頭が良い為政治や福祉など国力は高い。他の国から一目おかれている。お抱えの軍隊は巧みな戦術から『青い九官鳥(A blue hill mynah)』と呼ばれる。

【緑】imag:ミリ大陸:エルフが住む巨大な森が存在する大陸。あまりに広大な面積の森のため未だ解明されていない謎の大陸。エルフは秘術を持つため責めてはいけないという教えになっている。古い昔エルフと全世界の民が戦ったらしいが結果はエルフの勝利だった。

【黒】imag:謎の島。人々は『リノ島』と呼ぶ。黒を基調とした集団が住み、ケルディアは『この島は悪魔の巣窟』だと世界中に発信したため、もはや外部とは断絶され孤島になっている。ミリと並んで解明されていない島。

時たま現れる黒い騎士団はその恐ろしさから『黒い狼(A black wolf)』と呼ばれている。その姿を見たら最後・生きて

は帰れないらしい……。

【白】imag:ケルディア大陸。四つの大陸でリーダーの様な存在。基本融和的な政治を取る。白を基調とした国で、町にある街頭やブロックなど全てが白。『白の国』とも言われている。反対に黒を持つ物体を嫌うように教育しているため髪が黒など皆と少しでも違つと迫害される傾向にある。何故白を基調とするかは、前の国王と現国王の間の何からしいが民はまだよく知らない。草原が多く馬を飼つのに適していたため有能な騎士を生む。騎士団は世界中で有名、格好の良さをアピールしているため、全世界から志願者がやつてくる。

白の騎士団はその格好よさと誠実さから『白の羊(A white sheep)』と呼ばれている。

小さい頃、家の近くの森にチュレルの実を採りに行つたとき母親に言われた。

「チュレルの様に真つ黒な服を着た連中には気をつけるのよ」「どうして?」

いつも気丈な顔が、その時ばかりは恐怖の色を湛えていた。頭を覆うように巻いた布を触り、辺りを気にするようにして小さく囁いた。「全身黒の服を着た連中はとても恐ろしいのよ。貴方みたいな子供だつて、いとも簡単に……」

その続きを言うのをためらつたのか、母親は立ち上がった。その腕には麦の穂で結われた浅いカゴが抱えられていて、熟れた証である漆黒のチュレルがぎっしり詰まっている。

「簡単に?　　続きは何なの?」
子供心は、知りたいと思つたら止まらない。オレは無邪気に母親の袖を掴み引つ張つた。

「聞かなくていいのです!とにかく、黒の連中には絶対に近づかな

「いいこと！いいですね？」
そのままオレの手を握った母親は、先程のことなどなかったかのよう
うに小走りに家へと帰った。念を押すように何度も忠告され、『黒
の連中は狼で、その姿を見たら死ぬ』それだけが小さい頃の記憶と
して鮮やかに焼きついたのだった。

【プロローグ】

白の騎士は世界を救い

やがて世界は白に染まる

黒の騎士は世界を滅ぼし

やがて漆黒の闇が包む

両者が共に相対するとき

世界は破滅へ進むだろう

緑の温和さは破壊され

赤の勇猛さは鎮火され

青の知性は卑下され

混沌と邪悪な景色の先に

現れるは染まらぬ存在

その人は全てを世界に捧げ

見守るものは光の中へ．．

~~~~ケルディア王国・『この世の真理』より~~~~

## 世界観&プロローグ(後書き)

これから長くなりますがどうかお付き合いください。一週間に一回更新を目指します。

## 第一章：少年の苦悩

鮮やかな朝の光が部屋に差し込み、オレは目の前の鏡を覗き込んだ。白藍色の自らの瞳を覗き込んで、次に髪の色を見る。黒。どうしてだろう、どうしてオレだけが漆黒の髪を持って生まれてきたのか。母さんは杏色なのに。そして母さんいわく、父さんも杏色なのに。

すると急に部屋のドアが開いた。慌てて鏡から体を離し、入ってきた人物を見る。母さんが満面の笑みを浮かべてオレを抱きしめた。肺が押しつぶされたように苦しくなる。

「遂に試験の日ね、アル！貴方の力なら必ず受かると母さんは信じてるわ！」

頬に湿った唇を押し付けられて、思わず吐きそうになる。

「いい加減にしてくれよ母さん！オレはもう子供じゃないんだ。もう14歳なんだぜ！」

14歳といえば、もう騎士団に入れるぐらいの年だ。無理やり体を離すと、母親は悲しそうな顔をした。やめてくれよ…その顔は反則だ。

「母さんからしたらいつまでたっても貴方は子供なのよ、アル……」

捨てられた子犬のように頂垂れると、机の上に置いてある砂時計が落ちきり、1回転した。そして砂時計に押された事が合図で、24個あるうちの10個めの騎士がガラス玉の中に出てきた。それは



つまり、時刻は10時を回ったということを示す。

「あら、もう10時？さあ早く、朝ごはんを食べたら、直に町の集会所まで行くんですよ、道順は分かるわね？」

跳ねたように顔を上げ、母親は再びオレに干渉し始めた。苛苛としながら、母親をドアまで押していく。

「道順は本当に分かるの？良かったら私が付いて行っても」

「うつるさいな、もう！いいから出てってくれよ！今から正装に着替えるから！」

どこまでも過保護な母親を部屋から摘み出し、そしてようやく一息つく。ベットのの上に用意してある白い正装を見て、浮き足立つのを感じた。

今日は騎士団に入るための試験の日だ。そしてオレは試験に受かる絶対の自信を持っている。愛馬のフェイユモルト（オレはフェイと呼んでいる）は駿馬で、オレ自身もこの日のために死ぬほど訓練してきた。同級生との決闘で負けたことはない。自分に騎士の素質があることは、徐々に気づいていた。騎士団に入れば 最初は下っ端だろうけど、きつと上位に上り詰める。そしたら『白の羊』のメンバーとして世界中で名声が得られるし、何より『黒髪』で生まれてきたオレを、ここまで育て上げてくれた母さんに楽な生活をさせてやりたい。

「……よし！」

今一度自分の思いを再認して、白い制服を着込む。今日のために出るだけ髪は短くした。黒の部分を減らすためだ。心の中に刻み込

んだ思いと共に、14年間過ごした部屋を後にした。

## 第一章 少年の苦悩

家から出てだいぶ経った。目の前には広い砂利道が延々と続いている。唯一近くにある、白のブロック塀で囲まれた家からレモン色の髪をした小太りの少年が飛び出てきた。大慌てで、口には朝食の残りであろうパンが銜えられている。少年はオレに気づくと、急いでパンを口の中に詰め込んだ。そして一気に飲み込むと、片手を上げて合図した。

「やあアル！いよいよ試験だね！」

クラム・ヘイコット。奴の両親は広大な敷地面性を利用して小麦を育てている。つまり、ここらじやかなりの金持ちの息子だ。そのおかげでクラムは中々の駿馬を持ち、オレと並んで馬の扱いが上手いとされている。本当は馬が良いだけなのだが……。そう言うわけで、今年試験を受けるのはこの地域じゃオレとクラムだけなのだ。クラムはカエルの様な口元を微妙に上げて、小走り気味にオレの横についた。馴れ馴れしく肩に手を回してくる。

「なあ、聞けよアル 昨日夕食のときに父さんにお前の事を話し

「たんだ。」黒い髪の奴が試験を受ける”って。そしたらうちの父さんは激怒してたぜ、”由緒正しいケルディアの騎士団に黒い髪が！なんてことだ！”って」

ねつとりと、嫌味たつぷりに耳元で囁くクラムを、別に追い払ったりしなかった。そういうことはもう、慣れっこなのだ。それにこいつはまだましな方で、中にはいきなり掴みかかってくるやつだっている。”黒の連中の仲間”だ、ってね。

「そうか。別にいいさ、親父さんには”気にしないでくれ。髪が黒いだけで黒い服を着るわけじゃない”と弁解しておいてくれるかなクラム？」

「ああいいよ、それであの父さんが納得するとは思えないけどね！はは！」

笑い飛ばすように、豪快に笑うと、途端にクラムは勢いを失った牛の様に黙り込んだ。これだから気分の浮き沈みが激しい奴とはあまり付き合いたくない。

「……」

むっすりとした表情で、クラムは何か考え事をしているようだった。放っておくのが一番だと、話しかけないことにしていたのだが、しかしなんとなく、クラムが物欲しそうな目つきで幾度となくこちらを見るので、仕方がなく聞いた。

「どうしたんだ？」

足の裏に、尖った石の感触を感じながら、尋ねる。

「ああ……君は緊張しないの？試験」

何だ…そんな事か。思わず気が抜けて、歩を進める先にある小石を蹴る。今更そんな事を言う男の顔など、見る気も失せる。

「そりゃ…少しくらいは緊張するさ。でも、もう引くに引けないだろ？」

それを聞いて、隣から空気が抜けるような音がした。クラムが盛大にため息をついたようだ。少し先で転がるのを辞めた石をまた蹴る。

「そうだけど……ほら、試験の案内状には、愛馬も連れてくるなって書いてあっただろ？騎士団の試験なのに、馬なしで何をするんだろうとか、思わないの？」

痛いところを突かれて、思わず小石ばかり追っていた目をクラムに向ける。クラムはかまわないで話を続けた。

「僕の愛馬、知ってるだろ？ほら。栗毛の」

「ああ、名前は何だっけ？」

「ジエシカ」

脂ぎった、小太りの男が乗る馬にしてはとても可憐な名前だったから、思わず吹いた。それを見たクラムは怒りを顕にして、オレの首根っこを掴んだ。

「何だよ！何がおかしいんだ！」

「い、いや　ほ、ほら！思い出し笑いってやつだよ！」

機転を利かせるように、一指し指を立てると、クラムは納得したのが手を離れた。そして「人の話を聞くときに思い出し笑いなんかするかよ」と呟いた。

妙に塩らしいクラムはとても気持ちが悪かったが、そのまま会話を続ける。

「　で？その”ジェシカ”が何だった？」

爽やかな風が吹き抜けて、クラムの家の麦畑の穂を一斉に揺らした。金色の穂は、もうすぐそれが収穫の時期だということを知らせた。

「ジェシカじゃないと、僕馬が怖くって」

「……」

思わず、足を止め何度も瞬きする。そしてその言葉が本当かどうか、もう一度確かめる。

「な、何だった？」

「だから、僕はジェシカ以外の馬が怖いんだよ！」

苛苛と、こちらを睨むクラムを見て、啞然とした。馬が怖いのに何故騎士団に入ろうと思ったのだらう。真性の馬鹿だらうか。つやつやして健康そうな顔は、肥え過ぎたせいで目が小さくなっている。痩せたらクラムはなかなかの顔立ちだと思っただが……。そんな事

を考えながら、また歩を進める。隣のクラムはまだ何かブツブツ言っている。

「…なら何で騎士団に入ろうなんて思ったんだよ？」

少しばかりの、皮肉をこめて言っただけ。クラムは馬鹿なものを見るような目つきで誇らしげに言った。

「何でって君…そりゃ騎士団に入る事はなんとも格好がいいだろ！」

オレは確信した。隣の男は真性の馬鹿だ。重症。冷え切った目で見られているとも知らず、クラムは目を爛々と輝かせながら言った。

「しかも運良く『白の羊』のメンバーに選ばれたりなんかしてみろ！そしたら一生皆から拜まれるんだ！しかも父さんは僕なら大丈夫だと言ってる。あの父さんが言うんだ、違くないだろ？」

時として、親の過保護は子供を不幸にする。その被害者が今隣にいるかと思うと、可哀想でならなかった。「そうだ、そうに違いない！」と自分で自分を納得させるクラムに、痛むこめかみを押さええて助言する。

「クラム、仮にお前が騎士団に入れたとして、”白の羊”になれる可能性は、そんなに高くないと思うぜ」

何か恨めしそうにこちらを睨み、クラムはカエル口をへの字に曲げた。そして少しして、何を悟ったように優越感に浸った眼差しでこちらを見下ろした。

「はは〜ん。さてはアル、君嫉妬してるんだな？僕の才能に」

腰に手をやってポーズまで決めるクラムにオレは言葉を亡くした。いいや、もう今度こそ放っておこう。するとクラムが嬉しそうに指を突き出した。

「あ、あれだよ！集会所！」

指差された先には、白い小さな小屋があった。しかしその前に一台の馬車が止まっていた。台車も二頭の馬も全て真っ白で、日差しを反射しているものだから、思わず目が眩んだ。

「何で、馬車がいるんだ？」

オレ達以外に、馬車を待っている人影はない。それどころか、見渡す限り、どこにも人影はない。まあ一面が麦畑だから、当たり前といえは当たり前なのだが。すると隣のクラムの鼻息が急に荒くなった。

「見て、見るよアル！あの馬車の荷台　白だから見えにくいけど、”子羊使い（A l a m b e r r a n d）”って書いてある！」

そういわれて、目を凝らすと、本当に書いてあった。小さな目でよくそこまで探り当てたと、隣の男を少し見直していると、小屋のドアが勢いよく開き、中から白い制服を着た人が出てきた。その人は颯爽と歩き、馬車へ乗った。俺は瞬時にその人が、馬車の操り主だと分かった。だって、白い服を着ていたから。オレ達は全速力で馬車に駆け寄った。

回り込んで馬車の斜め前に立つと、白い制服に身を包んだ操り主が少し驚いた様子でこちらを見下ろした。女性だった。凜と背筋が伸

びた姿は、とても綺麗だった。

「……」

女性は一言も喋らないので、こちらから話しかける。

「き、騎士団の方ですよね？」

クラムが頬を染めて答えた。恐らく女性に惚れたのだろう。操り主は一回頷いただけで、親指を後ろに示して”乗れ”という仕草をした。

ガタガタと乗り込みながら、オレも内心興奮していた。このような待遇を受けたことは、生まれてこの方体験したことがないからだ。クラムのでかい尻を押し込みながら、二人座る。それを確認した操り主は、静かに鞭を馬に当てた。軽快なリズムで、馬車が走り始めた。隣で今更どうにもならない癖毛を整えるクラムを差し引いて、オレは身を乗り出して前方の女性に尋ねた。

「あ、あの、これからどこへ？」

すると女性は首すら動かさずに淡々と答えた。

「首都」

片言の言葉で返され、渋々席に座りなおす。軽い上下の振動が心地よい。かなり上質な馬車のような。しかし先程クラムが見つけた文字の質問をしようと、また身を乗り出した。隣のクラムが責めるように服を引っ張ってくる。



「あの、この車の後ろに書いてあった”子羊使い”とはどういう意味なんです?」

すると女性は首だけ動かしてこちらを向いた。長い睫毛が瞬いて、ずっと表情を変えないまま口だけ動かす。まるで人形のように思った。

「……”子羊使い”、そのままの意味だよ。騎士団の中でも精鋭部隊の事を”白の羊”と呼ぶことぐらい、少年達も知ってるだろう?」

「ハイ」

「子羊とは少年、つまり君達の事。そして子羊を使うもの　つまり子羊を送迎するものを、”子羊使い(A l a m b e r r a n d ) ” という」

なるほど、と呟いて、オレはまた席に腰を降ろした。ようやく納得行く前髪になったのだろう、クラムがでかい尻を強引に持ち上げて身を乗り出した。

「それにしても、随分上質な馬車ですね!」

質問とほぼ同じ時に、女性は馬の尻を一叩きした。上下の揺れが激しくなり、景色が流れていくのが早くなる。クラムは少し怯えたように屈んだ。どうやら馬が怖いという理由は、その駆ける速度に関連するのだろう。

「フン…恐らく……”白の羊”の事だから、”聖なる子羊に危険な体験はさせてはならないのです”、大方そういう見聞だろ。だから

「ここまでの馬車を出す」

「……そうですか」

クラムが降参したように両手を挙げ、静かに席に座った。どうやら女性を口説こうと思っていたらしいが、諦めたらしい。この女性はどうか、相当棘があるらしい。自分の上司であるはずの”白の羊”を、あまり心地よさそうに語らないからだ。

時期に景色はクラムの家の小麦畑を過ぎ、見渡す限りの草原地帯に入った。村だけで育ったオレは、ここまで来たことなど数える程しかない。記憶の限り母親と共に首都へ野菜を売りに行った時のみだ。それも村の民皆で一度に集まり、村に一台しかないクラムの家の大型車で売りにいく。外の光景を、こんなに雄大に見たのは始めてだ。

「……すっげえなあ……」

「ああ、君は初めてだった。僕は何回もある、十本の指ではとても足りないほどね。父さんはよく小麦を売りに首都へ行くからね。それに家族で遠出したこともある。あれは去年の話だ……」

これから先にも、クラムは延々と喋っていたが、オレの耳にはほとんど入らなかった。空を見上げると、透き通るような水色を、全面にムラなく塗りたくったような、雲ひとつない快晴だった。まるでこれからの道程を祝福してくれているように、鳥達が頭上で輪を作った。

「……と……」

その光景を遮断するように、女性の声が出た。今まで自分からは何

も喋らなかつた”子羊使い”がいきなり喋りかけてきたものだから、思わず女性の後頭部を凝視する。それはクラムも同じで、自慢話を中断した。

「黒い髪の、少年は」

ここでクラムは自分のことではないと知らされ、拗ねたように腕を組みながら景色に目を向けた。

「本当に”子羊”なのか……？」

その言葉は、一瞬意味が分からなかつた。さして慌てることもなく、首を傾げる。

「それはどういう意味です？」

するとこちらを向きもしない女性は少し慌てたように鞭を動かした。

「いいや、戯言だ……少し急ぐ」

何度も鞭を当てられた白馬は嘶いななき、ほぼ駆け足のようになった。上下振動が凄まじくなり、クラムが椅子の縁を必死に掴んだ。

「ひい……！」

「！？」

思わず自らも椅子の縁を掴み、何か様子が違うことに気づいた。涙目で震えるクラムに、極小さな声で耳打ちする。

『……おいクラム。この馬車、本当に首都に向かっているのか？』

『……ちょ、ちょっと待てよ……』

そうしてクラムは必死に体を起こし回りを見回した。すると石にでもあたったのか、馬車が大きく跳ねた。その振動でクラムが弾き飛ばされた。馬車からクラムが消え、思わず声を荒げる。

「クラム！」

「うわあー!!」

小太りの男はそのまま馬車から振り落とされ、道へ落ちた。太っていたのが幸いしたのだらう、そのまま怪我をすることもなく、道の真ん中で何か起こったのかわからないという様子で転がっていた。

「クラム……！あ、あの！馬車を止めてください！」

すでにはるか後方で転がっているクラムを見ながら、女性の肩を掴む。すると女性はさらに鞭をいれ、馬車の速度を上げた。

「……!?」

ここでオレは気がついた。女性は白の服を着ていなかった。いや着ていたのだが、それは黒の服の上に、白の服を着ていた。それを見て、全身から血の気が引いていくのが分かった。

「……あ、貴方は……」

肩を掴んでいた手を、おそろおそろ離す。指が震え始めた。女性は

静かにこちらを向いて、冷やかな微笑を浮かべた。

「気づいたのか少年。…お祭りの通り、私は”子羊使い”ではない…」

ニヤリと、微笑み。女性はことごとく嬉しそうに叫んだ。色は見た目で誤魔化せる。表面は本質ではないのだ。

「私は痛い気な子羊を襲う　　”黒い狼”だよ」

もう一度後ろを振り返るも、クラムはすでに点よりも小さくなっていった。遠い記憶が、一気に蘇ってくる。

”　　黒の連中には気をつけるのよ”

## 第一章：【1】

「……あ」

思わず後ずさり、ふとももに椅子があたって倒れこむように座る。真っ白になっていた思考を揺さぶるように、女性は話を続けた。

「大丈夫だよ少年。私は直に君を殺したりなんかしない……安心してくれ。親や友人に何を吹き込まれているかは知らないが。いやそもそもケルディアの民は皆嘘を真実だと教え込まれている」

「……な、何のことです？」

黒い連中に会えば、直に喉をかつきられて死ぬ。そう母親に言われたのに、女性は前を向いたままで襲ってくる気配など何もなかった。それよりも女性が口にした言葉が、妙に気になる。

「しかし、もし君が逃げるような素振りをしたら」

フォンという風の音がして、喉に剣先が突きつけられていた。思わず喉がひきつる。

「この可愛い子羊の喉を、かつきることになる……」

低い声で言った女性は、青空よりも澄んだ空色の瞳を哀しそうに細めた。一つに結われた金色の髪が、風に揺れて繊細になびいた。オレはもう、ずっと女性と見詰め合っていた気がする。そこら辺の村、いや首都にだって女性ほどの端麗さを持った人を見た事はない。研ぎ澄まされた、それこそ銀色の狼の牙のような鋭利な危うさと、こ

の世の男 いや同性でさえも、女性には魅了されるだろう満月のような美麗な容姿。

「……逃げたり、しませんよ」

首につきつけられた刃先を、しっかりと握り下ろす。オレの行動に驚いたのか、女性は少し身を引いた。

「……どうせもう、俺は誘拐された身なのでしょう？ それに、殺されるのは嫌ですからね」

女性は口元を緩め、剣をオレから離した。そして少し遅くなっていた馬車の速度を速めるため、馬に鞭を入れた。

「物分りのいい少年は、好きだよ」

オレは後ろの背もたれに体を預けるように、椅子にふんぞり返った。ため息もでない、どうしてだろう。何でだろう。よりにもよって、「白の羊」の試験の日に、悪党によって浚われるとは。しかもただの悪党じゃない、この世で最も不吉な象徴とされる”黒い狼”のメンバーに浚われた。ケルディアの政府は彼らのことを”悪魔”だと呼んでいる。政府が言うのだから、間違いないと人は言う。しかしオレは昔から、そう何か別に 気にするほどの問題じゃないと思っただ。周りの人たちは”悪魔”だとか”不吉”だとか”殺人集団”だとか言っていたけれど、事実14年間生きてきて”黒い狼”がケルディアの一般の民を殺したなんて情報は全く入ってこなかったからだ。ケルディアの軍人が殺されたのは聞いた事があるけど。

誘拐されてこんなにも動揺しないのは、その思念がなすものだと思っただ。

「少年は、何故私を罵らない？」

「……え？」

「私は今まで何人も、私の正体に気づいた者を浚ってきた。そういうものは大体 私を罵るのが相場なのだが」

女性特有の華奢な背中を見ながら、オレは妙な気持ちで沸いて来るのを感じた。それは、そう。完璧なる同調感だった。

「貴方こそ、何故オレを罵らない？」

「は？」

「ほら、さっきだって、オレの黒い髪を見て何か言っていましたよね？普通の人はこの黒髪を見たら”黒い狼”だって」

「……」

”黒”。それが唯一であり、必要十分なオレと女性の共通点だった。

「少年とは、何か運命的なものを感じるな」

女性はクツクツと愉快そうに笑った。オレはそれで、もう本当に逃げの気がうせた。どうやら、いよいよ本格的に、目の前の女性が恐ろしい人なんかに見えないのだ。



「オレもです」

「……まあ、別に、だからといって私がする行動は変わらないのだが。私の顔を見た人を母国に帰す訳にはいかないんだよ、告げ口をされると面倒だから。だから私は少年を港経由でリノへ連れて帰る」  
青い空だけはそのままだに、辺りは砂利道に入った。

「リノ……って、もしかしてリノ島ですか…？」

「ああ、それ以外に何がある」

思わず倒れそうになった。リノ島。ケルディアの政府が言うには、「黒い狼”の巣窟である島。そんな場所に、オレはこれから連れて行かれるのか。それはやはり、困る。ここでオレはようやく、頭の隅に母親のことを思い出した。

「やっぱり、家には帰してくれませんか」

「当たり前だ」

女性は、そのような可能性があるわけないとばかりにピシヤリと言った。

「絶対に、貴方のことは言いません」

身を乗り出して、女性の肩を握る。誓約を誓うように。

「信用できないな」

しかし丸い金髪の後頭部は、少し揺れただけで興味がなさそうだった。

「絶対にです！絶対、誰にも言いませんから！オレ、”白の羊”に入りたんです！親孝行したいんだ！！」

うるさいとばかりに肩を捻ってオレの手を離させると、女性はこちらを睨んで唸った。本当に鋭い目つきに睨まれると、それだけで萎縮してしまいそうだ。

「だから何だ！少年の都合など私には関係ない！黙っていた方が身のためだと思うが！」

「いやだ！オレは絶対……」

騎士団に入った俺を、心から喜ぶ母さんの顔がよぎった。

「騎士団に入らなきゃいけないんだ！貴方なんかにつき合ってる暇はないんだ！」

荒く息をして、目の前の女性を睨む。そうだ、そうなんだ。オレはもう、確固たる思いがあるんだ。

「……どうして、そんなに”白の羊”が好きか……？」

氷のような冷たい口調で女性は呟いた。口を引き結び、必死に何かに耐えているようだった。その手には剣が握られている。

「白の羊が好きなのはありません。ただ、オレは母親を楽しにし

てやりたいんです。何の職もない、ただ馬に乗って剣を振り回すのが好きなだけのオレが、活躍できるのは騎士団しかないんだ」

「」

女性はそれを聞いて、少しばかり口の引き結びを緩めた。そのまま向き直り、手綱を握る。剣は収めたようだ。

「……無理だ」

それを聞いて、項垂れる。どうやら、もう、本当に家には帰れないらしい。

馬車は軽快に飛ばし、どんどん日が沈んでいく。家に帰りたいという交渉以外、オレと女性は一言も会話を交わさなかった。それもそうだ、誘拐犯と親しげに話す被害者など、居ないだろう。

「」

どンドン、薄暗くなる景色と共に瞼も重くなってきた。手を翳<sup>かき</sup>して目を閉じる。深く息を吸い、ゆっくりと吐き出すと、肺の中の不純物が全て出て行く気がした。カタカタと揺れる感覚にも慣れてきて、どンドン体は沈み込むように重くなった。夜の暗闇に包まれる前に寝てしまおうと思った。暗い中では、不安が押し寄せてきそうだったから。

「……少年……眠いのか……？」

微かな意識の隅で、誰かの声が聞こえた。考える事をやめた脳は、適当に相槌を打つように差し向ける。

「…はい…」

すると誰かが困ったようにため息をついた。そして静かに上下振動がゆるやかになる。涼やかな、夜独自の冷えた空気が心地よい。

「…………困った奴だ…本当に私が怖くないのか……………」

そう耳元で囁かれた気がする。最後に覚えがあるのは、誰かの優しい手がオレの頭を撫でたこと。

「……………」

目を開けると、頭上の木の枝に止まった二羽の小鳥が鳴いていた。栃葉色の丸っこい体を揺らしながら、楽しそうに掛け合いの歌を歌っている。しかし木の枝は流れていった、ということは馬車は相変わらず走っているわけだ。のろのろと体を起こすと、自分に毛布がかかっているのに気がついた。そして　白い背中が見えた。一瞬、白の羊かと思うが、すぐに脳は記憶を呼び出し、その人は誘拐犯だという事を知らせる。

馬車は、緑の木々が鬱蒼じつそうと茂る森の中を走っていた。右も左も知らない風景は不安を駆り立て、唯一の頼りである（かなり不本意だが）目の前の女性に尋ねる。女性の片手にはランプが持たれていた。

「……あの……」

女性の肩が少し跳ね、すぐに気をとりなおすかのように何本もある手綱を調節した。

「何だ」

「ここはどこなんですか？」

「… バイス（抜け道）街道」

そう聞いて、首を傾げる。そんな街道聞いたことない。それを横目で見ていたのか、女性は口角を不自然に歪めた表情で笑った。白い霧がかかった森の中で、馬車馬の蹄の音だけが響く。

「少年が知らないのも当たり前だ。こここの道は一般には公表されていない、昔忌々しいケルディアが、黒を持つ人々を隔離した地域へと続く道だ」

「… どういう意味です？」

真っ白な馬車馬が、森の中では場違いな程に綺麗だ。この森は何か 神秘的で儼かな空気を帯びている。暖かい気候にも関わらず、地面を栗色の落ち葉が覆い尽くしている。あまりに木々育ちすぎたせいだろうか、空から降り注ぐはずの眩しい光は届かずそれどころか、こげ茶色の幹も枝も、緑の葉も、表面に雫が溜まっている。

「黒、つまり私や、お前のように、かつてケルディアには黒い目・髪・肌を持った人々が少数ながら暮らしていた。前の国王の時は、

皆平和に暮らしてんだ。そう、お前の友人の様な裕福で白い奴らと同じに。しかし……」

女性は言葉を区切り区切り、噛み締めるようにして言った。

「現国王になってから、黒の連中がどう扱われているのか、少年君なら分かるだろう？」

そう問われて、沈黙する。オレはこの世に生れ落ちてから、この黒い髪にいい思い出がない。村にはあまり子供が居なかったから、そこまでの苦しみはなかった。クラムのように、親がオレを嫌っていても話しかけてくれる（少し嫌味な奴だけ）奴だって居た。

だけど、その分母さんがどんな思いでオレを育ててきたのかは、分かってる。差別と、偏見。大人の世界は、子供のそれよりずっと陰湿だということは、知ってる。

「知っています。だからオレは、周りの人を見返そうとして、騎士団に入るつもりだったんだ！なのにあんたが」

その時馬車馬が大きく尻尾を振るっていなないた。

「少年。気持ちは分かるが、それは根本的な解決にはならない。それでは結局、自分を見下してきた相手の傘下に入る事になる」

そう言われてハツとした。それもそうだ。何だか誘拐犯に説得された気分になり、下唇を噛む。やがて森の木々は少なくなり、あまり舗装されていない獣道のような粗い砂利を馬車は進む。そして女性の口笛と共に、馬車馬は歩をゆるめていった。

「……」

そこは、静かな空間だった。完全に停止した馬車から降り、地面に降り立つ。森の中に一つの村があった。馬車が止まったのは村の入り口で、背の高い木から、”黒の住みか（black home）と描かれた木の看板が吊つてある。

「……少年、そういうば私は君の名前を聞いていなかったな」

女性はオレと同じくらいの目の高さだった。凜とした空色の瞳が、こちらを見た。角度によって、女性の目の色は薄い青から、コバルトブルーまで変わった。睫毛がとても長い。

「アル。アル・ライトといいます、14歳です」

「私はエレス・ウィア。年齢は…秘密だ。じゃあ行こうかアル少年」  
何故年齢を言わないのか、それはエレスさんの自由だ。スツと伸びた綺麗な背中を見ながら、オレは急に冷えた外気に震えた。一歩踏み込んで、すると村の中央にある井戸で三人の農夫が話し込んでいた。継ぎ接ぎの汚れた服を着ているが、別にオレと代わりがない気がした。

「…でな…あつ！おい、あれ見るあれ！エレスさんじゃねえか！！」  
30程の健康そうな農夫が始めに叫んだ。それに伴い、傍に居た二人の農夫が心底驚いたような顔で叫んだ。

「…お、おお！おい、見るよ！エレスさんだ！エレスさんだぞー」

大声で叫んだ男の声は村中に響き（といっても極小さな村だが）、家から一気に人が出てきた。それでオレは、目の前のエレスという女がどれだけこの村では有名人かを知った。代わりに白い制服を着たオレを、農民達は穴が開くほど凝視した。

「おい、誰だい？その後ろの少年は」

最初に叫んだ農夫は、クワを肩に担ぎ不思議そうにこちらを見た。思わず会釈すると、驚いたように会釈し返してくれた。

「見たところ髪が黒いぜ、仲間じゃないのかい？」

「わかんねえな、でもエレスさんが連れてくるんだ、間違いねえ」

うんうんと頷く農夫に、何が間違いないのかと思ったが、案内役がどンドン進んでいくので付いていく。周りを取り巻くように、農民達がついてくる。

やがてエレスさんは一軒のボ口屋の前で立ち止まった。いや、オレの家もこんなもんだったか。板を釘で貼り付けただけのような、ボ口屋。強風が吹き付けるだけで倒れそうだ。

「……ノツド叔父さん、居るんだろ？私 エレス・ウエアだ。」  
黒の連中”だよ、開けてくれ」

コンコンと、手の甲で木の戸をノックしながらエレスさんは宿めるなだ様に言った。すると小屋の戸が静かに開き、中から口周りに黒ひげを蓄えたおじさんが出てきた。頭には髪がない、意図的に剃ってあ



るようだ。訝しげに堀の深い目元を細めていたが、じきに夕れ目になるほど満面の笑みを浮かべた。

「ああ、エレス！久しぶりだね…ああ、少し痩せたかい？ちゃんと食べているんだろ？」

腕を伸ばしてエレスさんとノッド叔父さんと呼ばれた男は抱き合った。本当に、愛しい人を抱くようだった。

「もちろんだよ叔父さん。」黒い狼”は”白の羊”と違うからね。叔父さんこそ　　少しやつれたみたい」

「大丈夫さ…それより、後ろのおまえさんは誰だい？」

エレスさんはようやくオレを思い出したみたいに、慌てて紹介した。

「ああ、この子はアル・ライト。私が連れまわしてる少年」

誘拐という二文字を柔らかくしてエレスさんは紹介した。いちいち反抗するのも面倒なので、そのまま軽く頭を下げる。

「おお、なんとも礼儀正しい少年じゃないか。近頃は村の子供でさえ礼儀がなっていない子が多いからな。目を合わせて頭を下げる。これだけのことなんだが…ああ、そんなとこで立ってないで、入りたまえ」

そう小屋の中へ導かれて、入る。どうやらこのノッド叔父さんと言う人は、中々に優しい人と見た。叔父さんと言うぐらいだから、エレスさんの血縁の人かな。小屋の中は案外広かった。床や天井、壁にまでさまざまな生物の皮がぶら下がっていた。部屋の中央にある

丸い木のテーブルへ促されて、切り株をそのまま椅子にしたような四角形の固まりに座る。

「……それで、エレス わざわざこんな偏狭まで来て、何か合ったのか？」

ノッド叔父さんは広い背中をこちらに向けて、何かの飲み物を拵たくわえている様だった。チュレルの実を磨り潰した時の様な、香ばしい匂いが小屋に充満する。

「ああ。別に、本当は用事なんてなかったんだ ただ、様子を見にきただけ。母さんは？」

「エリスは…村の奴らと一緒に森へクルの実を採りに行ってる。帰ってくるのは日が暮れる頃になると思うが…」

運ばれてきた木の器を受け取り中を覗く。するとそこには黒い液体が入っていた。これは一般的な飲み物だ。オレもよく飲んだ。やはり磨り潰していたのはチュレルだったのだ。喉が痺れるほど苦いけど、健康にいいんだ、この飲み物は。

「そう、ならいい、叔父さんだけでも、相談できるから」

横目でエレスさんを見る、少し表情に落胆の色が見える。青い瞳は深い色を持っていた。

「そうか…で、何だ？相談って」

ノッド叔父さんは、全くと言っていいほどエレスさんに似てない。黒い髭に黒い瞳。俺よりもさらに黒が濃い人だ。

「この、アルって子についてなんだけど」

そう言われて、瞬きをする。オレについての相談って……何だ？急に、チュレルの香りが強くなった気がした。

「この子、ほら ティア嬢に、凄く似てない？」

指をくるくると回しながら、エレスさんは思い出すように言った。ノッド叔父さんは俺を見つめた。いや、なんだか濃い顔に見つめられると変な汗が出る。小屋の窓から先程の農夫たちが我先にとばかり押し合いながら小屋の中を覗き込んでいる。

「……そうだな……目元・口元が似てる……かもな。しかし、それがどうした？」

オレはティアという人物がどういう人なのか無性に知りたくなった。そう、無性に。まるで欠けていたピースを求める、子供の様に。

「いいえ……ただふとそう思っただけ。名前も違うし、全くの部外者よね」

何かを断ち切るように大きく息を吐くと、エレスさんは立ち上がった。それを見て、自然に足が動き自分も立ち上がる。まるで犬みただな、と苦笑した。ノッド叔父さんはおろおろと目を泳がせ、小屋の入り口を塞ぐように立った。突き出た腹が、とても邪魔だ。

「なんだよエレス！もう少しゆっくりしていても……」

「いいのよ叔父さん、急がないと。この子の友達を振り落としてし

まったの、もしかしたらケルディアに告げ口されている可能性がある。いやその確立が高い。だから一刻も早くこの村から去って、ケルディアを出ないと」

オレはクラムの顔が浮かんだ。あいつなら帰って直に親にこの女性のことを話すだろう、そして自分が馬車から落ちてどれだけ痛かったか、などを喚き散らして 親父さんは即、ケルディア政府に問い合わせ……まあ、追っ手が来るのは時間の問題か。いよいよオレは肝が冷えるのを感じた。

「そうか……なら仕方あるまい」

ノッド叔父さんは丸太のような太い腕を下げ、もう一度エレスさんを抱きしめた。序でに挨拶代わりとばかりに頬に唇を当てた。

「気をつけるよ」

「分かってる……そっちこそ気をつけて」

意気揚々と小屋から出て行ったエレスさんを見送って、次いで出て行くこととするオレをノッド叔父さんは捕まえた。農夫たちはやれやれとばかりに窓に張り付くのをやめた。小屋の中が静かになる。相変わらず、チュレルの実の匂いがした。

「な、何ですか？」

「……アルとか言ったか、おまえさんは確かに、ティア嬢にそっくりだ。だから、お前さんを見込んで頼みがある」

逃げられないようにがっしりと掴まれた肩に、さらに力が込められ

竦む。

「エレス、あいつは本当に勇気があって、気高くて、私の誇りだ。しかし、あいつの勇敢さは時に無鉄砲となる。だから、お前…そう、中々筋肉のつきも良い。エレスにもしもの事があれば、あいつを助けてやってくれないか？」

「……」

ふざけるなと思った。オレはあの人に誘拐されたんだ。誘拐犯を守る被害者なんて本当に矛盾もいいところだ。しかし…何故か頷いてしまっているオレが居た。

「そうか、物分りの良い少年は好きだよ、じゃあ頼んだぞ」

どこかで同じセリフを聞いたなあと思いつつ、小屋を後にした。

## 第一章：【2】

”黒の住みか”へ続く道は一本道なので、また来た獣道を引き返さなければならぬ。馬車馬の足取りは少し休んだせいか頗る良かつた。

「……さてアル少年。飛ばすよ」

「はい」

ふと、オレは自分の中で何か火種のようなものが出来た気がした。目の前の、操り主がこれから楽しいことに連れて行ってくれそうな気がするのだ。

誘拐犯なのに。可笑しくなって、思わず吹き出す。エレスさんは幽霊でも見る目つきでこちらを振り返った。

「どうした少年…遂に気でも狂ったか？」

「…ふ、いいえ。少し、面白かっただけです」

「ますます気持ち悪いな」

エレスさんは鼻で笑った。それを見て、オレは身を乗り出した。そのまま行儀が悪いのかもしれないが、操り主の席の隣へ座った。

「何してるんだ、狭いじゃないか」

「いいじゃないですか、二人のほうがなんとなく安全でしょう？」

そう言うと、隣の空色の瞳はますます疑うような目つきでこちらを見た。手綱を引き絞り、馬に急ぐよう命じる。もと来た道を戻りきり、一般の砂利道へ戻る。ずっと先まで、今日も空は澄み切っていた。日の光は高くなって、誘拐犯との旅の二日目が始まった。ずっと先まで、薄茶の砂利道が続いている。人影は見えない。

「何が安全だ……ああ、追っ手のことを心配してるのか？」

「ええ。ノッド叔父さんに言われましたよ。貴女に何かあったら力を貸してやってくれ、って」

それを聞いて、エレスさんは斜めに分けている金髪の前髪を整えた。昨日は人形みたいに表情がなかったのに、堅かった蕾がゆっくりと綻ぶように、徐々に表情が出てきた。

「何だ、それは。叔父さんも余計な事を…それに”子羊”の少年に何が出来るとも思えないけど」

口を尖らせて、こちらを嘲るように見る。その目が妙に涼やかで、思わず剥きになった。

「何ですかそれ。言っておきますけど、俺結構馬乗りの技術には自信があるんですよ？」

するとエレスさんは口元を押さえて愉快そうに笑った。それが乾いた背景に似合っていて、思わず見惚れた。

「はは、笑わせるなよ少年。君に たった14年間生きてるだけの”子羊”に馬乗りが出来るなら、我々やそれこそ君の入りたい

”白の羊”の騎士はどうなる?」

「それは　!」

凶星だったので、口を瞑るしかなかった。エレスさんはにやつきなから持っていた手綱をオレに差し出した。

「そら、未来の騎士団員くん。ちょっとばかりこれを操作してみろよ。出来るかな?」

「馬鹿にしないでくださいよ…:こんな簡単です」

四本の手綱を親指と人差し指、中指と薬指にそれぞれ挟む。すると今まで大人しく駆けていた馬車馬が急に興奮し始めた。しかしオレは荒馬には慣れてる。フェイユモルトはかなりのじゃじゃ馬だったから。重くなった手綱を引っ張ってはいけない、そうすると力と力の反発が起き、ますます馬は興奮する。

「…」

微妙な具合にスナップを利かせ、馬の口を自分の指先に感じるようになれば、もうほぼ完璧だ。良い具合の重さを手綱に感じて、どうだとはかりに眉を上げてみせる。

「どうです?」

隣のエレスさんは舌を巻いていた。まだ少し信じられないとばかりにこちらと馬を交互に見る。

「……やるな少年……:そうだ。じゃあ、そのまま操作頼んだから、



私は寝る」

「ええ！？ちよつと待つてくださ」

言いかけて、止める。そうだ、よくよく考えればエレスさんは今まで一睡もしていない。オレが寝ている間もずっと馬車を動かしていたのだろう。隣ではすでにオレの肩に頭をあずけて眠るエレスさんが居た。勝手に人の肩を借りて寝る神経の太さを疑ったが、すぐに考えを改めた。

「……ま、いいか」

フウと息をついて、リズムカルに走る馬車馬を見る。そして馬の耳の間から先を見る。依然として人影その他動くものは見られない。決して油断はしないが、この調子なら少しぐらいは。そう思って、肩に感じる重みは放っておくことにした。逆に少し肌寒いなどか思っていたから、それが心地よかった。

馬車馬は進んだ。どんどん進んだ。ふとこの道でいいのかと思ったが、一直線だから大丈夫だろう。砂埃が舞って、少し目に涙が滲む。指の間が皮で摺れて、痛くなり始めた。握る力を程よい加減に緩める。

「…ん」

「あ、起きました？」

頭が少し動き、エレスさんは寝ぼけ眼のままこちらを見た。そして目を擦りながら大欠伸をした。口元を押さえて欲しい。しかし”黒い狼”なんて、名前だけなのかもしれない。こんな子供のような人

が人を殺すとは 考えにくかった。

「ふぁ……お、だいぶ進んだな少年。もうすぐ検疫所に当たるはずだ。手綱を代われ」

「あ ハイ」

握っていた手綱を渡し、少し安心する。そして横の女性を盗み見た。

「あの……」

痛む指を押さえて、ずっと先に検疫所が見えた。一台馬車が止まっている。普通の馬車だ。白の羊はまだまだ動いてないらしい。

「検疫所を抜けたら、どうするんですか？」

「……検疫所を行ってすぐのところ小さな港町がある。その波止場に仲間の船が来るはずだ。そうだな……時間で言えばちょうど日が昇りきったぐらいか。その船でリノへ一直線、だいたいこんな予定だ」

「そうですね……」

検疫所を抜けることは、恐らくたやすい。なんたって”白の羊”の関係者なのだから。そう思って少し落ち着く。そして今まで流されていた話題へ切り替える。

「エレスさん、そういえば何故貴女は集会所から出てきたんですか？どうして”子羊使い”の馬車に乗っていたのです？いろいろおかしくないですか？」

ああ、とエレスさんは頷いた。点のようだった検疫所がどんどん大きくなる。

「それは 偶然だ。私は定期的に、叔父さんや母さんの様子を見るのも兼ねてケルディアへ潜入するんだ。案外ケルディアの奴らは盲目で、白の色さえ纏っていれば疑う眼差しを一つも持たない。どれだけ誤魔化されているのか、分からないんだろう。反対に黒の色を持つものの意見は全くと言っていいほど聞かない。だから私は、旅の途中で白い馬車や騎士団の奴らを見つけるとそいつらの白を奪うことにしている。変わりに私の黒を纏わせる。その方が都合がいい。そして今回の馬車と制服を奪われたのはお前達を迎えに来るはずだった奴。たまたま私に出会ってしまった。ただ、それだけだ」

「……でも、何回も来るのなら、あらかじめ用意してからにした方が良いと思うんですけど」

エレスさんは少し考えた後、少し微笑んだ。

「ふふん、甘いな少年。白は有効な分、それだけ動きが目立つ。人の目につきやすいんだ。だから使うときはほどほどにしないと。目的を持った使い方”をすると、白は本当に役に立つ。……じゃあ、これらの事から白の性質が分かるか少年？」

いきなり質問を投げられて、少し考えを待たせる。白の性質……そんなこと考えもしなかった。白は”白の羊”に言われるように騎士団のモチーフだ。格好がよく、清潔で、気高い。まさしくケルディアの騎士団にぴったりな色……のはず、なんだけど。ここで少し、何か引掛かる気がした。さらさら流れる砂時計の砂が、少しずつ詰まり始める。

「……よく分かりませんね…でも、使いようによって、何かが起きるって事ですか？」

こちらを向いたエレスさんは、何かを企む悪戯好きな少女の様に八重歯を見せ笑った。

「六割がた正解だ。何かが起きる　つまり、白ほど人の心を操る色はないのさ」

そう言つて、遂に馬車は検疫所の横へ止まった。検疫所の人はい少し緊張した面持ちで対応した。深く被った青いつバ付き帽子が検疫所の役員である証拠。

「これは…騎士団の関係者の方ですか？この先は港町のウェイブしかありませんよ？」

「ハイ。少し用事がありました」

エレスさんはひたすらニコニコしている。オレも釣られて微笑む。なんだろう、このなんとも言えない罪悪感。昔クラムの家の倉庫から小麦をいくつか盗んだとき以来だ…。

「……隣の、貴方は？」

少し検疫員の目が曇った気がした。

「オレは　」

「この子は私の仲間です」

エレスさんが制する様に身を乗り出した。検疫員の顔にくつつきそうなほど、自分の顔を近づける。オレの位置からではどうなってるのか見えない。

「…そ、そうですか。では、少しお待ちください。許可証を発行いたします」

「どうも」

へへ、と商人のように笑うと、エレスさんは肘でオレを小突いた。耳に唇を押し付けて、オレ以外には聞き取れないほどの小声で咳く。

『馬鹿：少年、君試験受けるっていつつもりだったでしょ。試験者は全員、昨日の夜に首都へついているはずなんだよ。何で試験者の君が今こんな場所に居るのか、そう聞かれたらどうするつもりだったんだ。もう喋らなくていいから、黙ってな』

『……すみません…』

「ハイ、どうぞ」

直に発行された許可証を受け取り、エレスさんは検疫員にウイंकした。頬を染めながら、検疫員は慌てふためいた。

「よ、よい旅を！」

「はい」

上機嫌なエレスさんが許可証を振って、馬車はまた進みだした。首

を少しだけ傾けて後ろを振り返る。検疫員に変わった様子はない。人一人がようやく立てるような青い板張りの小屋に立って、次の通行人を待っている。特に慌てる様子もない……。大丈夫か？向き直ると、エレスさんは鼻歌を歌っていた。微かに、海の香りが鼻を掠める。

「少年、港町についたら少しお茶でもするか？」

「え…そんな事をしていいんですか？」

エレスさんは許可証をポケットに突っ込んで、退屈そうに言った。

「当たり前だ、追っ手の気配はない。少しぐらいお茶してもいいだろう。それに船に乗りさえすればあとは何の心配もないんだから」

少し不安になった。追っ手のことじゃない、船は確かに便利なものだ。しかし危険も伴うはずである。家の本棚にあった本のどこかで、”船の航海は危険が伴い、大海原の真ん中で座礁しそのまま死ぬ事も多い”と記述してあった気がする。

「でも船に乗ってからって安心できませんよね？」

少し刺々しい口調になってしまった。思わず前方を見る。結んである金色の髪がたなびいて、視界に入った。

「…案ずるな少年。私達”黒い狼”の技術力をなめないでくれ。もう海の真ん中で迷子になる可能性はほとんどない。しかし……」

ずっと横顔を盗み見ている。長い睫毛は金色で、透けるように震えている。エレスさん顔は全体的に小さい。小顔、とでもいうのか。

その割りに目が大きいから、際立つんだ。

「少年は、何故そんなに知識を持つ？ただの農民の子供ならば、普通そんな知識知らないはずなのだが」

盗み見ていたので、急にこちらを向いたエレスさんとばつち目が合ってしまった。しかしそんな事よりも、聞かれた質問に答えなければ。

「ああ家に割りと本があるんです。それに母さんが、読み書きや基本的な知識を教えてくれたんです」

そこまで言って、また違和感を感じた。そうだ…ただの農民なら、母さんが根っからの農民なら、読み書きなんて出来ないだろう。何故…？しかしそれ以上考えることは止めておいた。何か、踏み込んではいけない気がした。

「そうか……ちなみに、君の母親の名前は？」

「サーシャ・ライトです」

少し、馬車全体が揺れた気がした。いや気のせいみたいだ。

「サーシャ・ライト……全然、知らない」

この世が終わりの様にエレスさんはどんよりと俯いた。その様子が面白くて、少し笑う。

「当たり前でしょう、関わったことないんですから」

「…そう、そくだよね。そんなに世の中狭くない！」

勢いづくように鞭を振るって、馬車は港町へ入った。静かに馬車馬を進めながら、少し様子を探るように町を眺める。白は目立つ。ジロジロと、通行人に見られている。小さい港町だから、そんなに裕福ではないのだろう。布をそのまま来たような服で、小魚を入れたカゴを抱える人。だいたいそんな人ばかりで、活気はあまりない。馬車なんかに乗ってる人は俺達以外に見られない。

「…さて降りるぞ少年」

白い馬を留めて、降りる。港町の中央、真ん中ある小型の噴水を取り巻くように、鼠色の石が敷き詰めてある場所で何人かの子供が楽しげに玉遊びをしている。それを見たエレスさんは微笑ましげに目を細めた。

「子供は無邪気でいいな」

「そうですね」

後ろを振り返ると、白馬が二頭繋がれている。見間違いだろうか、少し寂しげだった。整った尻尾を大きく振って、嘶いている。

「あの馬ともお別れだ。だいぶ世話になった。白馬じゃなければ、黒い狼にほしいくらいだ。ケルディアの騎士団にはもったいない」

「ええ、よくあの長い道を走り続ける心臓を持っていますよね」

「名馬だ、め・い・ば」



やがて小さな店を見つけた。” tale（話）” という店だ。四角  
枠の窓から店内を覗くと、客はほとんど居ない。店の主らしき初老  
の男が一人で白の皿を拭いている。表の看板に” トウーレ（有）”  
と書いてある。それを見たエレスさんは手を叩いて喜んだ。

「見るよ少年！トウーレだって…私あれ大好物なんだ！ここにしよう！ほら、早く！」

思い切り背中を押されながら、店内へ入る。初老の男は少しこちらを見ただけでまた皿を拭き始めた。白髪交じりの男以外に店員はいないようだ。エレスさんはすぐさま「トウーレ一つ！」と叫んだ。男はゆっくりと頷き、皿を拭くのをやめて何か細長い茎のようなものを取り出した。何だあれは……

「それで、少年は？」

聞かれて、オレは別に喉が渴いていなかったが、トウーレはそんなに美味しいのかなと思いついた。すると男はまた頷いて、若緑色の茎を大雑把に切った。思わず目を見張る。茎から大量に汁のようなものが溢れだした。

「…そんなに珍しい？」

視線を目の前に戻すと、エレスさんは窓から見える景色を眺めていた。

「ええ、何ですかあの 茎みたいなのは」

「みたいじゃなくて茎なのよ、あれを煮込んで出した汁と、茎から出る汁を混ぜたのがトウーレ。凄く甘いだよ」

「へえ……」

相槌を打つと、そのままに佇む。店内は流れるように音楽が流れている。耳につくこともなく、かつ眠くなる程でもなく、まどろむ様なゆったりとした音楽。窓からは波止場が見える。多分エレスさんは仲間の船が来ているかどうか見てるのだろう。港だけにさまざまな船が止まっている。

「お待たせいたしました。トゥーレです」

声がして、振り返ると男が二つのカップを持っていた。四角形の白い布を敷いて、その上にトゥーレの入った大き目のカップを置く。

「どうも」

遠い目で外を見ていたエレスさんは、待ってましたとばかりにカップを持ちまず香りを楽しんだ。立ち上る湯気と共に、甘ったるい匂いがした。カップの中に目を落とすと、淡黄色の液体の表面に何か糖分だろうか、クリーム色の粒が浮いている。

「…いい匂い」

誘われるようにカップに口をつけて啜る。舌の上にじわりと爽やかな甘味が広がった。甘いだけでなく、だれない。喉越しはよく、サラサラと流れていく。しつこ過ぎず、あっさり過ぎない。ふと何か粒の様なものを舌に感じた。先程のクリーム色のあれだろうか。噛むと、濃縮した辛さが吹き出た。思わず喉を押さえながら舌を出す。と、エレスさんはさほど気にせずと言った。

「ああ、それすごい辛いから噛まない方がいいよ。本来は味を締めるために入れてるだけみたいだから」

「は…早く言ってくださいよ！」

何とか舌の痺れも収まり、トゥーレも全て飲み切った。エレスさんは素早く会計を済ませ店から出た。磯の香りを含んだ風が吹いて、気持ちよさそうに伸びをする。すると　磯の香りに、何か別の香りがまざっている気がした。辺りを見回す。すると背後から男の声がした。

「エレス・ウイア。”黒い狼”の幹部で、世界有数の情報網を持つ女」

低い、成熟した男だけが放つ低い声だった。思わず背筋が震えて、振り返るとそこには真正銘白い制服を纏った騎士団員が居た。グレーの髪は前髪だけが長く、目元を隠すように伸びていた。薄い唇は苦虫を噛み潰したように歪んでいる。そして腰には、重量感漂った剣が携えてあった。

「……ああ、思い出した！どっかで見たことあると思ったら、君”白の羊”の幹部でしょ！名前は何だったかなー」

楽しそうな声にピシリ、と細糸が張り詰めるように緊張が走る。慌ててオレはエレスさんの肩を引く掴み引き寄せた。

『エ、エレスさん。何呑気にしてるんですか！』

『いいから、いいから、黙ってみてなさい少年は』

別にノッド叔父さんとの約束を守る義理はないのだが、”黒い狼”である（しかも幹部らしい）エレスさんと店でトウーレを飲んでいたとなると、仲間だと思われ一緒に連行されるだろう。それは断じて避けなければ……。 ”白の羊” 幹部の男は腰の剣に手をやって、重々しく口を開いた。

「…随分余裕だなエレス・ウィア……お前は包囲されているのだぞ」  
20人ほどの白の騎士に取り囲まれた。それぞれに剣を持っている。さすがにこれは やばい状態だ。エレスさんは懐から二本のナイフを取り出した。黒い柄に、銀色の刀身。見たところ変わったナイフではないようだ。あえて言うならば、刀身が反っている事位だろうか。

それを見た男は高笑いした。

「はっはっは！それが貴様の武器か？」

「そうだよ、何か文句ある？」

喧嘩を売るような口調に、思わず冷や汗が吹き出る。男は、忌々しそくに剣を引きずり出した。

「…あまり舐めた口を聞かない方がいい……穢れた黒を持つ貴様が、我々騎士団の制服を

着てよいものではない。清潔で、気高い、その白さを！」

オレは自分のことを言われてる訳ではないのに、ムカついた。黒は、そんなに黒は穢れているのだろうか。ふと、気に掛かっていたエレスさんの言葉を思い出す。

”ケルディアの民は嘘を真実だと思い込まされている”

隣のエレスさんが、何かを呟いた。しかし全く聞き取れなかった。そして次の瞬間、俺は地獄を見た。取り囲んでいた白の制服が一斉に地面に倒れ込む。白に混じるは、鮮麗なる赤。

エレスさんの姿を探すと、白さが際立つ箇所があった。グレーの髪と金髪の髪が揺れている。短いナイフと、太い銀の刀身が重なり合い震えている。

「ふふ、舐めた口を聞いているのはそちらじゃないのか？」白の羊”幹部、リゼル・ブランクさん”

「…ほう、私の名を知るか。さすがは”黒い狼”だ。情報を嗅ぎまわる嗅覚だけはすばらしい」

何も出来ずに、足に根っこが生えたようにその場から動けない。すると虫の息だったはずの騎士団員の一人が起き上がった。口の縁から流れる血を押さえながら、じりじりと詰め寄ってくる。その手には、切れ味鋭い剣が握られている。エレスさんはこちらを見ていない。

「…！！」

子供同士の決闘と、実践は違う。体の奥底から沸きあがる恐怖に怖気づき、足がすくむ。

剣が勢いよく振り上げられた。もうだめだ、そう思って目を瞑った瞬間、生暖かい何かが顔に掛かった。恐らく、血だ。同時

に、何かが倒れこむ音。

「…ふう。君、大丈夫かい？」

背後で、透き通った青年の声がした。顔にかかった液体が目に入らないよう、片目だけを開けると、足元に男が倒れこんでいた。そして振り返ると、そこには優しい微笑みを浮かべるエレスさんが居た。…いや、エレスさんじゃない。柔らかにウエーブした金髪はほどよい短さで、角度のたびに濃淡が変わる青い瞳。また、黒い制服を着ている。瓜二つだけれど、全く違う。

「クリフ！」

エレスさんは青年を見てそう叫んだ。青年はしなやかにお辞儀をすると、いきなりオレを担いだ。

「うわ…っ！」

「じつとしていてください」

男に担ぎ上げられるなんて…屈辱だ。クリフと呼ばれた男は素早い動きで俺を抱えたまま波止場へ向かった。同時にエレスさんもりゼル・ブランクに応戦しつつ付いてくる。

波止場に止まった船の中に、白旗に黒い牙が描かれた帆が連なっている、一際目立つ帆船はんせんがあった。強い突風に晒され、なびいている。天を仰ぐように突き出た三本のマストを、見上げずにはいられない。クリフは勢いよく飛んで、船の先端 甲板へ着地した。小さな波が沸き立ち、心細気に船が揺れる。どうするんだ そう思った瞬間、オレは目を見張った。目の前の、クリフは船の最後尾へ素早く

移動し、自らの腕を波間に突き出した。クリフ周辺の波が大きく渦を巻き始める。

「エレス姉さん！早く！」

「分かってる！」

「くっ…逃がすか!!！」

突風が吹き、少しだけ帆船が動いた。その瞬間、クリフの真下の波が爆発するように巨大な水柱を打ち上げ、同時にとても風の力ではない速さで動き出した。全速力で走っていたエレスさんは、躊躇せず波止場を飛んだ。戦いのせいで白い制服が破けたりゼル・ブランクが、波止場から落ちそうになって留まる。見事な放物線を描いて飛んだエレスさんは、精一杯に腕を伸ばしたクリフに捕まり、そのまま倒れこんだ。凄まじい音がして、クリフは後頭部を打ったらしい。

「間一髪！」

嬉しそうに立ち上がったエレスさんは、波止場に残されたりゼル・ブランクを振り返り目の下を指で引っ張り、舌を突き出した。

目を擦りながら二人に近づくと、エレスさんは羽織っていた白の制服を脱ぎ、わざとリゼル・ブランクに見えるように海へ投げ捨てた。潮風に揺らされながら、白の制服はコバルトブルーの海へゆらゆらと着水した。真っ白なそれは、やがて潮の流れで流されていった。遠くでリゼルが顔を真っ赤にして何かを怒鳴っている。

「あーやれやれ……結構危なかったなあークリフ！あんたが遅いか

ら！」

そう怒鳴りつけるエレスさんを、やれやれとばかりに苦笑しながらクリフは見上げていた。本当に顔がそっくりだ。違うのは骨格や輪郭：そして髪型だけか。

「エレス姉さん、そろそろ遠慮というものを覚えてください」

「遠慮なんてしてたらつままないじゃない、あれくらい綱渡りしないと」

オレは少し眩暈を覚えた。どつりで、エレスさんの行動が遅かったわけだ。ギリギリまで、戦いを楽しんでいたのというわけか。人質のオレを放っておいて。エレスさんはああ、と呟いて俺を引き寄せた。

「クリフ！この子はアル・ライト！一言で言えば誘拐しちゃった子！結構可愛い顔してるしょ？」

指先でツンツンと頬をつつかれて、眩暈は激しくなった。クリフは常に微笑を絶やさず、また礼儀正しいお辞儀をした。

「初めましてアル・ライト君。私はエレス・ウエアの実弟であるクリフ・ウエアと申します。」黒い狼”の騎士団員でもあります。以後お見知りを」

”黒い狼の騎士団員”。そう聞いて、恐ろしくなる。エレスさんといい、クリフといい、”黒い狼”の人たちは優しそうに見えて本当に怖い。慌てて、こちらもお辞儀をする。クリフは、笑うと目尻に皺が出来て、犬のようだった。



「あの、一つ聞いていいですか？」

「はい、何でもどうぞ」

とてもニコニコしている。釣られてこちらまで頬が緩みそうだ。

「もしかして エレスさんとクリフさんは双子、ですか？」

そう言うと、二人はお互いに顔を見合わせた。そして笑った。

「そうよ！私のほうが、少し早く生まれたいけどね……だからこんなに顔も似てるの」

エレスさんはクリフの頬を引っ張って、遊んでいるようだ。頬を抓られても微笑を崩さない寛容さは凄いと思う。

「ハイ。姉は女性だから得をする顔立ちなのですが、如何せん男の私では損をするばかりです」

「何言ってるのよあんた！めっちゃめっちゃ女の子にもてるでしょうが」

勢いよくクリフの肩を叩くエレスさん。同じ顔が二つある。揃いも揃って美形だ。俺はようやく眩暈も納まってきたので、静かに深呼吸をした。帆船はゆっくりと、今は風の力だけで動いている。そうだ、先程の水柱について聞かないと。

「あの、さっきの水柱は一体」

ようやく頬を開放されたクリフさんが、相変わらずニコニコ顔で答えてくれた。

「ああ。あれは僕の能力で、少し船に勢いをつけさせるためにやったものです」

呼び名が私から僕に切り替わったのは、親しみを込めたと思っていのだろうか。

「そうなんですか…凄いですね。どういうものなんです?」

デッキに設置してあるイスに座ったエレスさんは、どこかから飲み物を取り出してゆったりと寛ぎ始めた。俺もあれ欲しいな。

「そうですね…簡単に言えば、瞬間的に水圧を極限まで高め、水面下で爆発を起こす、ただそれだけの事です」

そんな能力、聞いたことない。そもそもこの世界に、そんな現実的でない能力を使える民が居たなんて……。目に見えないモノを信用するのは難しい。そんな気持ちが空気に滲み出していたのか、クリフは腕を組んだまま話を続けた。

「俄かには信じがたいモノだと思いますよ、実際に力を使う僕でさえ、自分にこのような能力があると気づいたときには驚きましたから」

「……」

空を見上げると、眩しい光が真上にあった。エレスさんが言った、”日が昇りきるぐらい”ちょうどだ。

「しかし実際出来てしまうのだから、信じるしかない。それに僕には二分の一だけエルフの血が流れていますから、それほど不思議じゃないと、思ったのです」

「エ、エルフ？」

本でしか見知りえない存在。そもそもオレはケルディアから出た事がないのだ。この世界はほかに三つの大陸があるらしいが エルフと聞いて、それらが身近に感じられた。

「ええ、エルフです。僕の場合は、ハーフエルフとも言うのでし  
ようか。ご存知なのですか？」

「少し、本で齧<sup>かじ</sup>った程度ですけど」

「そうですね、賢いのですねあなたは」

そこまで言うと、クリフは目元が影になるように手をかがした。甲板の上は中々に熱い。少し影に入ることにした。 甲

## 第一章：【3】

太陽が七回昇った日、遂に、この世界で一番恐れられているはずの島が見えてきた。”リノ島” 思わず唾を飲み込む。別に空は突き抜けるような透明度だったし、船の上は至って和やかな空気が流れていたのだけれど、やっぱり体は緊張していく。

「エ、エレスさ」

「何？」

オレが話しかけるを待っていたかのように、金髪の美女は微笑んだ。クリフは長い足を組んで、黙々と本を読んでいる。

「リノ島、見えてきたんですけど……」

「え？うそ」

白々しく驚くエレスさんに少しばかりの苛立ちを覚えながら、また目線を進行方向へと向ける。ずっと先に、たくさんの帆船が留まっている場所が見えた。目を細めて、帆船の近くに見える人影を見る。見たところ普通の一般人のようだ。たくさんの荷物を流れ作業で下ろしている。

「……」

隣でエレスさんはリノ島の方をじっと見ていた。強い突風が吹いて、長い金髪がなびいて、一瞬キラキラとその横顔が輝くのが見えた。

「遂に、リノに着いたね」

落下防止の手すりを握って、エレスさんは身を乗り出した。危ない、という前に甲高い音が響き渡った。空気が高い音域で震えながら、辺りに広がる。エレスさんの指笛が聞こえたのか、ずっと遠くに居るはずの先程の人影がこちらに向かって手を振った。冷涼な風が船상을吹き抜ける。

「アルくん」

「はい？」

いつの間にか隣にいたクリフに返事する。帆船はどこまでもゆつたりと、波を掻き分けながら進む。

「リノに着いたら、まずティア嬢が団長に会ってください。もし騎士団員になるようなことがあれば、貴方の処分は主君が決めます」  
ずっとのんびりしていたせいか、急な出来事に対処できない。なかなか呂律の回らない舌を動かす。

「騎士団員になるって、どういう、」

クリフは少し驚いて、またいつもの笑顔で答えた。

「騎士団員、リノでの騎士団は一つしかありませんよ？ほら」黒い

「

「違う！」

思わず、叫んでいた。「冗談ではない。

「…何が、違うの？」

そう言い放ったのはエレスさんだった。焦燥、動揺していく心とは裏腹に、俺の口はスラスラと動いた。

「騎士団は、”白の羊”だけです」

目の前のクリフの表情が曇った。明らかに眉を寄せ不快を表している。いつもは透ける様な青色の瞳が、深海のように暗くなる。どうして口がそう動いたのか、そう思うより前に、乾いた唇は音を紡いだ。

「…どうして貴方達がそんな事を決める?!早く、ケルディアに帰してください!オレになりたいのは、”白の羊”だけです!あなただちのような、殺人鬼集団じゃない……っ」

今まで溜め込んでいた、黒への拒絶反応が一気に吹き出た。ギョツと、固く目を瞑る。喉が引きつる。一步も動けない。暗い脳裏に、白い騎士団の連中が一瞬で切り裂かれた光景が脳裏にフラッシュバックした。

オレは間違っただけなんかに、いない。

すると……静かに、押し殺したような声で誰かが呟いた。

「……………」黒い狼”は、殺人鬼集団なんかじゃない」

本気で怒っているのがヒシヒシと伝わって、手が震え始めた。か  
つてないほどの殺気を感じる。静かに瞼を上げると、憎しみの籠っ  
た目でこちらを睨むクリフが見えた。あまりの怒りで、言葉が出な  
いらしい。閉口しながら、握りつぶされた拳が震えている。

「……もう、いい」

エレスさんは深いため息をついた。着々と進んでいた帆船はやが  
て港へ着いた。水面は相変わらず、静かに揺れていた。

港着くとそこには黒い馬が二頭の黒い馬車がすでに到着していた。  
馬車馬には太い首筋、大きく筋肉の張った尻、いかにも良質な馬の  
風格が漂っていた。無言のままエレスさんに馬車に乗り込むよう指  
示され、乗った。中は三人が乗るには十分な広さで、体が密着し気  
まずいこともなかった。オレはずっと外の風景を眺めていた。二人  
と会わせる顔がないからだ。

『…もう、いい』

整備された道は上下振動が少なく心地よい。どうやらリノ島の町  
外れはケルディアのそれより環境が良いみたいだ。カラカラという  
車輪の回る音を聞きながら、ずっと船上でのやりとりが頭の中をリ  
ピートしていた。

『黒い狼は、殺人鬼集団なんかじゃない』

青々しい緑の葉が目線の高さまで成長している。ずっと緑色ばかりを目で追いながら　　少しだけ隣のエレスさん見る。

困ったような、よくわからない表情だった。眉間に少しだけ皺が寄って、青い瞳は心細げに揺れている。すぐ視線を外したから、読み取れたのは微かな不安だった。悶々とした車内で、今度は斜め向かいに座っているクリフを見た。さして、気にしていないようにも見えたが……腕を組んで、やはり外の景色を傍観している。読み取れない、クリフの感情は、読み取れない。ふと、外の景色があまりに美しいので、こんな考えが頭をよぎった。

……もし、仮に、本当に”黒い狼”が”白の羊”のように格好よい連中だったのなら？

それならば、オレはとても失礼なことをしたのだと思う。しかし、黒と白は　　あまりに違いすぎるのだ。それも、生まれたときから母親や周りの連中が貶していたモノの評価を、一週間やそこらで見直せという方が無理に等しい。

……”黒”と”白”は、どちらが正しいのだろう。よく、分からない。

ずっとそんなことばかり頭の中を巡っていて、気づくと馬車にはオレだけしか乗っていないかった。何やら外が騒がしい。

一足先に外に出たらしいエレスさんが早く降りると言っている。どうやら考えているうちにもう目的地についたらしい。

馬車から出るとそこには　　見たこともないほど、活気づいた街があった。

ずっと先に見える巨大な黒い城を見て暫し呆然とする。足元の、



赤茶色のレンガを見ると、びつちりと敷き詰められ延々とレンガ道が続いている。確りとしたそれには欠けている場所がない。整備された具合が凄いのだろう。次に、頭上にあるアーチ状の巨大な木の看板を見る。

” Welcome! To Reno island (ようこそリノ島へ!) ”

先先に歩いていってしまうエレスさん一行を追いかけるようにして、自らも看板の下を通り、街へ踏み入る。リノ島は故郷と全く違っていた。オレの村では、一戸一戸の家の間隔が比較的離れていて、買出し等は遠出しなくてはならなかったのが、リノでは城の周辺に民が住む街が広がっていてその中にさまざまな店が混在している、だいたいそんな様子だった。島と大陸の違い、そう思って ケルディアより街中が活気付いている事に戸惑いを覚えた。どうして… ” 悪魔の巣窟 ” は随分明るい雰囲気にも包まれている。今まで自分が見聞きした、確固たる ” 常識 ” が、音を立てて崩れていく。新たな知識となるのは、 ” リノはとても明るい ” こと。街の奥に、大きく飛沫を上げる噴水が見えた。

## 第一章：【4】（前書き）

まずここまで読んでくださった方々にお礼を言います。ありがとうございます！  
ございます！

そして、本題ですがこの話から視点が切り替わります。今までは一人称のオレでしたが、三人称になります。混乱を招く可能性があります。また、一応忠告をさせて頂きました。

## 第一章：【4】

城内に一步入るや否や、アルはその荘厳さに思わず立ち尽くした。ずつと奥にある、行き止まりであるう壁まで続く大広間。突き抜けるように高い天井には、細い鉄筋が複雑に入り組み、所々に紅く透き通るように光る宝石が散りばめられている。そして視線を落とすと、壁には等間隔にランプが飾られていて、昼だというのに城内は少し薄暗い。

「すごい…」

城に慣れていないアルは素直に感嘆の言葉を口にした。するとエレスは少し頬を緩めた。どうやら、船の上での一連の出来事はもう気にしていないようだ。なかなか切り替えが、早い。

「でしょ？このブラックホールリング城はケルディアの城と比べても全く引けを取らない。外観、広さ、内部の仕組み、全てにおいて優れてる。例えば…」

エレスはそう褒めちぎると、まだ気がすまないと言った様子で颯爽と歩きはじめた。慌ててアルも後に続く。クリフはそんな二人の様子を、後方から腕を組みながら興味深げに眺めている。

「そう、例えば少年。あの壁を見て」

そう指差したのは、先程アルが行き止まりだと思っていた一番奥の壁。両脇には剣を掲げた白と黒の騎士の像が互いに向き合うようにして設置されていた。細部まで創りこまれたそれを、アルは深深と覗いた。像の背が高いため、近くからでは見上げる形になる。

エレスはそんなアルを横目で見て、説明を始めた。

「この城は一見、この大広間は壁で行き止まりに見える」

「はい、行き止まりだと思いました」

像から目を離し、アルはエレスの方を見やった。細い指先で、壁をつ...となぞりながら、彼女は何かを企む様に口角を上げた。

「ところが。これにはある仕掛けが施されている。...ヒントは少  
しばかり、”敵”に”皮肉”を込めた、プライドの高い”奴ら”に  
は許しがたい”侮辱”。少年、分かるか？」

エレスは時々、このように知恵を試す様な事を言う。これは恐らく、  
アルの器を試しているのだろう。気の強い彼女ならではの行為。

「...そうですね...」

アルは負けじと腕を組み、暫し目の前の壁を見つめた。特別、変わった風には見えない。年季の入ったそれには、少しのクスミしかなかった。強く触ってみても、確りした感触が手の平に残るだけ。となると、他に仕掛けになるようなものは、唯一両脇に設置された騎士の像だけだった。

”黒の騎士”と”白の騎士”が向かい合っている。黒の騎士は勇敢に両前足を挙げ、嘶く馬に跨り、剣を振り翳し、険しい表情だ。しかし、”白の騎士”は馬さえおらず、地面に尻餅をつくような格好で天を仰いでいる。その手にはかろうじて剣が握られている。

アルは”黒の騎士”の像へ近づき、隈なく触<sup>くま</sup>って確かめた。本気で謎解きをするアルを遠くで眺めていたクリフは、ようやく帆船での怒りを静めたようで、深青だった瞳を薄い色に変えて叫んだ。

「騎士の命は剣！」

そこでようやく、アルは”黒の騎士”が持っている剣が、動かせる事に気がついた。柄を握っている固い指を触り、なんとか剣を引きずり出す。

「うわ…っ」

次の瞬間、剣を支えるものがなくなった。アルは剣の重みに驚き、思わず剣先を床に叩きつけてしまった。手首を捻ったのか、少し苦悶の表情を浮かべる。その重みは、それが本物の銅と鋼鉄で出来た鍛えられた剣だということを示していた。アルの失態に、エレスはにやついた。

「なんだ少年、本物の剣を持った事がないのか？」

「」

それは事実だった。アルは簡単な銅で出来た、農村に伝わる剣ならば今まで慣れ親しんでいた。このような、鍛えられた剣は持った事がない。ギョツと細いが力強い剣の柄を握り、アルは銀色に鈍く光る剣の刀身を見据えた。そして、次に白い騎士の方を向く。何かを決意したように、その白藍色の瞳は光っている。

「エレスさん」

「ん？」

「オレ、分かりましたよ」

そう言うと、アルは白い騎士の像に近寄った。手中に収めた剣を、持ち上げる。白の騎士は表情を強張らせ、まるでアルに命乞いをするかのようだった。

「敵」とはケルディア。ケルディアの騎士は”白い”。さらに”皮肉”とは、白い騎士の像に何かをすること。そしてそれは侮辱的な行為……つまり」

アルは掲げた剣を振り下ろした。白の騎士の首が飛ぶ。それは予め、切り落とされることを予感していたかのように、綺麗に切断され床に転がった。

「首を切ること”でしょう。騎士は、敵に首を切り落とされる事ほど、侮辱的な行為はないと、本で見た事があります」

ずっとその様子を見ていたエレスは、暫し無表情で黙っていた。そして、彼女は切り落とされた像の頭部を拾い上げると、再び首無し像に嵌めてやった。確りと、像はまた怯えに満ちた表情に戻った。何も起きないことを不審に思ったアルは、訝しげに辺りを見回した。すると、どこかから若い男の声が聞こえた。

「惜しかったな、少年」

その声に反応するかのようには、微動だにしなかった分厚い壁が、ゆっくりと動き始めた。一部の壁が床に沈みこむようにして陥没していく。どンドン、下がっていく壁の向こうに……アルは誰かが居る

のが見えた。岩が砂利を擦るような音と共に、やがて壁は陥没しきつた。巨大な四角形の穴が開いた。そしてその壁の向こうにいたのは、漆黒の鎧を纏った、端正な顔をした青年だった。柔らかな茶髪の髪に、細長の目、高い鼻。薄い唇は少しの微笑を讃えている。

「…開いた…？」

アルは青年を凝視した。青年の背は高く、アルの頭は彼の肩の位置までしか届かない。

「読みは中々鋭かった。普通の、そうケルディアの奴らなら君の思考で上手く言っていた。でもここは”黒い狼”の城だ。君の思考では、通用しない」

青年が壁を通り抜け、アルの方へ歩いていくまでに、下がっていた壁が再び上昇し始めた。石と石が互いに反発しあいながら、無理にでも隙間を埋めていく。穴の開いていた壁が再び完全な壁に戻るまで、そう時間はかからなかった。

それを見届けた青年は、アルの手から剣を奪い白い騎士の像を見下げた。エレスやクリフは、まるで面白いものを見るような雰囲気ですら二人のやりとりを見ていた。

「”黒い狼”は気高い。命乞いをするものを、殺したりはしないんだよ。変わりに」

ヒュッと、剣は真横に一直線を描いた。アルには、剣の影すら見えなかっただろう。白い騎士が持っていた剣が真っ二つに割れた。剣先が、力なく床に落ちる。すると先程閉じた壁が、再び開き始めた。アルはそれを見て、目を丸くした。

「こうして 奴らの剣を、へし折ってやる」

冷たい響きの口調で、青年はそう言い放った。用事は済んだとばかりに、持っていた剣を素早くアルに手渡し、青年はアルをじっと見据えた。茶色の長い前髪の間から覗く、細い目は深緑に染まっている。

「……どう……してですか？殺してしまった方が、敵にとっては痛手になるのに……剣を切ったって、何の意味もない」

突然の出来事に困惑し、そんな事を口走るアルに、青年は肺の中の空気を全て出すかのような、深いため息をついた。後方で様子を見ていたエレスも、やれやれとばかりにこめかみを押さえる。

「……やはり、ケルディアの奴に俺達思想なんて理解できる訳ない……どうして、こんな奴を連れてきたんだよ、エレス！」

失望したように、青年はエレスの方を睨んだ。金髪の美女はいきなり振られた話に、少し閉口しながら答えた。

「仕方ないじゃないユウヤ。たまたま出会ってしまったんだからそれに、この子なかなか馬に乗れるのよ。鍛えればきつとモノになる」

ユウヤと呼ばれた青年は、虫唾が走るとばかりに口元を引き締めた。背の高いユウヤから見下ろされ、さらにその細い目でキツク睨まれると、アルは蛇に睨まれた力エルのように縮こまる他なかった。目もあわせず、顔を伏せるアルを見て、ユウヤは失笑した。



「……まあ、いい。どうせティア嬢はこんな奴騎士団に入らせなはずだ。俺に睨まれた程度で、怯えるような”根性なし”はな！」

その言葉に、アルの肩がピクリと跳ねた。

「……オレは」

剣を持つ手に、力が籠る。城から出ようと入り口に向かって歩き始めていたユウヤは、小さく呟いたアルの言葉が聞こえなかったようだ。エレスが、アルの変化に気づく。

「オレは根性なしなんかじゃない！」

わっと、アルは一気に走り出した。本物の剣の重みには、慣れてしまったようだ。恐るべき俊足で、ユウヤに追いついたアル。それに気がついたユウヤは、流れるような無駄のない動作で、自らも腰から細剣を引き抜いた。

突き抜けるように広い空間全体に、鋼鉄同士が激しく衝突する音が響き渡った。アルは歯を食い縛りながら、自身よりもずっと背の高いユウヤを仰いだ。風船に針を近づけた時のような、危うい緊張感が辺りに漂う。

「アル！」

思わず止めようとするエレスの腕を、隣のクリフが掴み首を横に振った。ユウヤは愉快そうに笑った。

「……案ずるなよエレス。俺はこんなガキを殺したりしない、自分より弱いものと分かって闘うのは、”黒い狼”の精神に反するから

な！」

大きめの声でそう叫ぶユウヤに、アルはこめかみが引き攣るのを感じた。しかし さすがに、成熟しきった成人男性の腕力とまだ14歳の少年の腕力では、差が有りすぎる。重なり合い震えている刀身は、徐々にずれ始めた。

「…今なら、まだ許してやるから、謝れよ、アル？」

身長差を利用して、わざとユウヤは屈みアルの耳元に囁いた。同時に、全体重を剣と共にアルに押し掛けた。いくら踏ん張っても、歴戦も猛者であるユウヤの斬撃を素人同然のアルが持ち応えられる時間は長くない。アルはくぐもった声で、しかし確りと答えた。

「 謝るのは、あんたの方だろ？それに……取り消せよ…オレは ” 根性なし ” なんじゃない！」

油断していたユウヤは、突如強まった力に少しだけ驚いた。次の瞬間、大広間の静寂を破るように高い摩擦音がして、何かが回転しながら床の上を滑っていった。

「……！」

肩で荒い息をつきながら、アルは驚愕した。剣の刀身の上半分が、なくなっていた。辺りを見回すと、床で剣先が回転している。なんという事だろう、あまりに強いユウヤの腕力は、鍛えられた剣さえもへし折ってしまった。遠めで見えていたエレスが、ヒュ〜と口笛を吹いた。

「……剣先がなくなったら、何も出来ないな？」

無表情で、軽く鼻で笑ったユウヤに、アルは腹が煮えくり返りそうだった。剣をへし折られることが、こんなにも屈辱的な行為だとは思わなかった。今なら”黒い狼”が何故命よりも剣を折ることにこだわることか理解できる気がした。そう、それは相手の誇りを傷つけるため。精神的に、追い詰めるため。

「……………くそッ！」

自らの実力のなさに腹が立ち、地団駄を踏みたかった。恥辱に打ち震えるアルを見下ろしながら、ユウヤは自らの剣を鞘に収めた。

「そう悔しがるな。お前が俺に勝てる訳がないんだ。初めっからな」

無残に転がった剣先を見ながら、殺気に満ちた眼差しでアルはユウヤを睨んだ。あまりに、多大な屈辱。いとも簡単に挑発に乗り、そして負けた。ギリ、と奥歯を噛み締める以外に、出来る事は何もないのだ、そう、何も。遠くで鬨いを見ていたエレスが、重苦しい雰囲気収集をつけようと口を開いた。

「ユウヤ、素人相手に何ムキになってるの」

それを聞いたユウヤは、興味がないとばかりにぶっきらぼうに答えた。

「ムキになどなっていない。少し力を入れただけだ」

広間から出て行くために、数歩歩んだ後ユウヤは何かを思い出したかのように再びエレスに振り返った。

「そうだ、エレス。折れた剣の代わりを早急に鍛冶屋に頼んでおけ」

「分かってる、私に命令するな！」

そう憤怒するエレスに軽く口角を上げ、ユウヤはその場を後にした。

「アル……」

遠くで、何かに懇願するかのように小さな声でエレスは言った。まだ14歳の少年が、あれほどの苦汁を舐めさせられたのだ。恐らく、その精神的苦痛は尋常ではない。上部をへし折られた剣を持ち、ひたすら押し黙るアルへ恐る恐る歩み寄る。

「アル……大丈夫……？」

密やかに、慰めるようにその肩へ手を乗せる。アルは無反応だった。まるで魂を抜き取られた人形のような。恐らく彼は、今の今まで負けた事がなかったのだろう。誇り高いエレスは、もし自らの人生初の敗北が、あのように鮮やかなものだとしたら、とても耐えられないと思った。

しかし　ユウヤが言ったように、この決闘の勝敗は初めから付いていたのだ。実力の差は歴然だった。ユウヤが何者かを知ったら、アルも納得するかもしれない。それにこれで、“黒い狼”の実力を分かって貰えたという利点もある。

……少年に傷心はつきもの、か。

勝手にそう解釈をつけると、エレスは力の籠っていないアルの手を取り諭す様に言った。

「……アル、悪いが、先に進もう。ティア嬢は暇な方ではない」

## 第二章：騎士団

コンコン、と扉を叩く音がした。貴族の城ではないので、部屋はそこまで豪華絢爛ではない。必要最低限度の煌びやかさを纏って、大人が二人は余裕で寝転べる程の幅を持つ純白のベッドが一つ、存在感を放っている。床にはフワフワとした柔らかな毛……世界で最も毛並みの美しいと言われる黒狼”ブラック・シャドウ”の毛がたっぷり敷き詰められている。所々に置かれる家具もまた、質素でありながら鶯色の重厚さを漂わせるものばかりだ。

「どうぞ」

しかし　その部屋の主は、居るだけで華やかな空気を連れてくる。

クリストファー・ティアベル、彼女の容姿を見たものは、途端に目を細める。エメラルドとアクアマリン、二つの宝石がそのままの輝きを失わず両目に埋め込まれたような、透き通るオッドアイ。鼻筋はすつと通り、薄っすらと紅色に色づく形の良い唇。計算されつくしたかのように、全てのパーツがそれぞれ最良の形と場所を保っている……。

彼女に似つかわしい言葉は、あて艶やか。

そんな、少女が”黒い狼”を統括する者。

「…失礼いたします」

開いた扉の向こうには、エレスに連れられたアルの姿が見えた。そ

の後ろを護衛するように、微笑を浮かべたクリフが立っている。エレスは部屋に入る事を抵抗するアルを無理やりに押し込みながら言った。

「…ティア様、この者が私がケルディアより連れて参った者です。少々…体力が有り余っている様子ですが、心配いりません」

まるでティアの事を見たくなどないとばかりに、エレスの細い腕の中で暴れるアルの頬を、クリフががちりと掴んだ。そうして、首の骨が鳴るほどにきつい角度で振り向かせる。ティアベルはテラスから外を眺めているので、アルからはそのほっそりとした背中しか見えない。しかしティアベルが、華奢な少女だと思っていなかったアルは思わず絶句した。抵抗していた腕から、フツと力が抜ける。

「…ケルディア…：…そう、エレス。詳細を教えてください」

ゆっくりと振り返ったティアベルの顔を見て、アルは呼吸をするのを忘れた。見た事のないほどの、可憐な、少女。それも 自分とさほど年齢の差がなさそうだ。栗色のサラサラとした繊細な髪が、流れ込んだ風で揺れる。中性的な美人であるエレスとは、少々タイプが違う。アルの様子を見たティアベルは、物腰柔らかかに微笑んだ。

「はい…：…名はアル・ライトといい、年は14。七日ほど前に、”黒の住みか”へ立ち寄る途中で遭遇しました。どうやら”白の羊”への入団希望者だったようで…：未だかなり連中を崇拜しています。それに本来ならばこの少年ともう一人、その友人が居たのですが、不慮に馬車から振り落としてしまい、仕方がなくこの者だけをリノへ連れて帰ったのです」

長い説明を一気に言うと、エレスは自らの斜め分けの前髪をそつと

掻き分けた。どうやら、目障りだったらしい。

「…なるほどね。ありがとう」

ティアベルは穏やかな口調で礼を告げると、何も言えずに口を半開きにして自らを見つめるアルを眺めた。品定め、とでも言うのだろうか。今までにごまんと騎士候補を見てきたティアベルは、体の輪郭、顔つき、筋肉の付き具合などで多少の資質は見抜けるようになっていた。アルとて例外ではなく、そのオッドアイでじっと見据える。

白藍色の瞳に、凜々しい顔立ち。幼さの中に強さと、意思の強さを感じさせるオーラは…何か違和感を感じる。頭の隅で、警笛が鳴っている。忘れてはならないものを、思い出させるような激しい、違和感。

「…この少年の処置はどう致しましょう？」

ティアベルの様子が、いつもと少し違う事を感じ取ったクリフが、少しけん制するように言った。

クリフの声で、ハタと気がついたティアベルは思案をめぐらせた。今の、おかしな体験は何だったのだろうかと思っただが、すぐにそんな思いは捨てた。気のせいだろう。

「そうね……」

暫し、間を取った後、ティアベルは決心したように頷いた。

「アル・ライトには、”黒い狼”に入団してもらいます」



アルはその宣告を聞いて、益々頂垂れた。まさか、自分が”黒い狼”に入ることになるとは……。シヨックが多すぎて、しばらく何も考えられそうにない……。同じ騎士団でも、”白の羊”ならどれだけ嬉しかっただろう。がつくりと頂垂れるアルの後ろで、エレスはその形の良い眉を潜めていた。彼女はアルが”黒い狼”にいきなり入団する事に疑問を感じていたのだ。確かに、アルはユウヤと一定時間組み合ったように、年不相応なまでの馬術、剣術、体術を持つが、あれしきりの挑発に乗るようでは……。あまりに目下の少年は精神力が心もとない。主人の命令は絶対だが、知らず探りを入れていた。

「ティア様」

「何？」

「仮にこの者が”黒い狼”に入団するとして、一体誰の下で従士になるのでしょうか？」

興味心身でアルを観察していたティアは、気が済んだのか、顔を上げエレスを見上げた。

「アル・ライトには…ユウヤ・セルフイスの下で従士してもらいます。ただ、私としたら、優秀な人材には一刻も早く実戦慣れをしてもらいたい。時期やってくる戦いのためです」

「ユウヤ」

エレスは、何か信じられないといった様子でその言葉を口にした。そして目を伏せ、もう一度確かめるようにして呟いた。

「ユウヤ・セルフィス……ですか。しかし、あの男は何かと 都合の良くないことも……しでかす可能性があります」

しどろもどろに言葉を紡ぐエレスを見ながら、ティアベルはフフと笑った。エレスはムツとして、しかし自分の主人でもあることを差し引いて、尋ねた。

「何か、おかしいでしょうか？」

「……いいえ、エレス、大丈夫よ。彼は仮にも”黒い狼”の副団長。そんなに器の小さな男じゃない」

ユウヤと聞いて、アルは益々動揺していた。先程決闘した、深緑の瞳を持つ茶髪の騎士……あの男は、”黒い狼”の副団長だったのか。道理で、異常なまでに強かったわけだ。これからあの男の下で働く事実を知り、打ちのめされたように思考が真っ白になる。

じつくり、エレスとティアベルは視線を交わしようやく納得したのか、エレスは深く息をついた。

「そうですね。いらぬお節介でした」

踵を返そうとばかりに扉から廊下に出た。クリフも放心状態のアルを引きずりながら笑顔で廊下へ出る。名残を惜しむように、ティアベルに一礼する。

「それでは、失礼致しました」

「いいえ、有望な騎士団員を連れて帰ってきてくれた事に感謝するわ。ありがとう」

アルは目の前の物腰静かな少女はやはり恐ろしいと思った。なんと  
いうか、微動だにしない精神の強さというものを感じるのだ。思わ  
ず、怖気付いてしまうほどのオーラ。

「そんな…とても。親愛なる、ティアベル様」

クリフもエレスも、決まった儀式の様にティアベルの手を取りその  
甲に唇を落とした。アルはまだ騎士団員ではないから、しなくて良  
いと言われた。

日の高い、熱い日。アル・ライトは”黒い狼”の一員となった。

## 第二章：【1】

騎士団員が住む宿舎は質素だ。アルはまずそう思った。大きく入り口が開き、頑強な塀さええない。灰色にくすんだ建物は、とても金をかけて整備しているとは思えない。街はあんなに綺麗だったのに……。

「穢きたない、ですね」

正直に感想を漏らしたアルに、エレスは苦笑した。

「ずいぶん、率直に者を言うな。リノ島の金の使い道は、他の国とは違う」

入り口には少しばかり蜘蛛の巣がかかっている。背の高いエレスはそれにいち早く気がつき、払おうとした。しかし、ああと何かに納得したような声で動作を止める。

「……そうか、まだ叙任式を済ませていないから、少年は”黒い狼”ではない……。叙任式まで、私の部屋で寝泊りしろ」

それを聞いて、アルはピクリと肩を震わせた。少しばかりの、緊張が張り詰める。

「そんな事、出来ません」

「は？何で」

建物に入ろうとしていたエレスは、入り口に腕をつけて怪訝そうに

振り返った。

「だって、騎士団員はそのような なんとというか、不適切な生活は出来ないはずです。本に「本に書いてあったとか、か？」

呆れたように、アルの言葉を遮ると、エレスは冷めた目で宙を見た。

「いったい、いつの時代の本を読んだ少年は。今の騎士団はそんな堅苦しいものではない。やはりケルディアの連中に洗脳されているのか」

洗脳という単語に、アルはカツと頭に血が昇るのを感じた。価値観の違いというものは、簡単には同調できない。

「……ケルディアでは、そう教えられています。それに 宿舎に行くよりも前に、しなければならぬことがあるはずですよ」

それを聞いて、エレスは目をぱちくりさせた。何かやらなければならぬような事はあったらどうか……隣で微笑んでいる自分に瓜二つな双子の弟に目をやっても、知らないとはかりに首を横に振る。満を持して、エレスはやけに辺りを見回すアルに語りかけた。

「少年。何だ、それは？」

「エレスさん、まさかとは思いますが……この島に教会はないのですか？」

「教会？」

「神に祈りをささげる場所ですよ」

エレスは黙り込んだ。深青の瞳が細められ、ツイとアルから顔をそらす。まるで”何か”を拒絶するかのよう、それは頑な姿勢だった。

「…神など、いない」

「」

「いるもんか！」

吐き捨てるように、らしくもない怒声を上げると、エレスはツカツカと宿舎の中へ入って行ってしまった。それをただ見過ごすしかなかったアルは、何か助けを求めるようにクリフを見た。クリフは、頭上にある強い光に目を細めていた。透明な、水晶玉の様に輝く青空は鳥がゆったりと飛んでいる。リノには、和やかな空気が流れていると、アルは何故か実感していた。

ようやくアルと視線を合わせたクリフは、陽だまりのような微笑を崩さないまま、力強く言った。それはまるで 100%、抜かりのない、確証があるかのような言い方だった。

「僕も、神など居ないと思っています」

ユウヤに打ちのめされた事と、自らがあの”黒い狼”の一員になる事で、ただでさえ落ち込んでいたアルに、反論する気力はなかった。グツと、込み上げる理不尽さを飲み込む。

「神など、居ませんよ。絶対に」

背を向け、自らも宿舍の中に入ろうと入り口を見据えるクリフに、アルは精一杯叫んだ。弱っていた少年には、声を出す事が唯一の抵抗手段だったのだ。

「神はいらっしゃいます」

ユウヤは振り返りもせず、その場に佇んだ。チュンチュンという、可愛らしい小鳥の鳴き声が、嫌に響く。広い宿舍前の広場には、二人以外にも人影がある。所々に設置された、木製の長椅子に腰掛剣の手入れをする者、ひたすら本を読みふける者、楽しげに雑談を交わす者。

「神様は、きつとオレや貴方を導いてくださる！」

砂利の感触を皮靴の裏に感じ、アルはしっかりと薄茶の大地を踏んだ。腹の底から、声を出してしまったので、周りに居た数名がハツとしたようにアルを見ていた。その表情は、全面強張っている。自らが、なんら悪い事を言っているつもりはないアルは、何故自分に視線が突き刺さっているのか理解できなかつた。

クリフの金髪が、太陽光と反射して輝いている。静かな、光の粒子が集まり、一瞬だけ輝く。広い背中が、微かに震えている気がした。

ゆっくりと、こちらを振り返ったクリフの青い目には、何故か透明な液体が溜まっていた。それを見てアルは一瞬、息が詰まった。

「……ならば」

それは、掠れたような低い声だった。ジンとした低音で響いた声は、アルの鼓膜を叩いた。

「ならば　どうして神は、僕の父親を助けなかった？」

ビクン、とアルの指が引き攣るように跳ねた。じつとりと、生ぬるい汗がこめかみから顎に伝わって、零れた。

「どうして、神は父を見殺しにした!!」

……しん、と辺りが静まり返った。金槌かなづちで頭を殴られたように、アルはひたすら目を見開き、白藍色の瞳を揺らしていた。瑞々しい若草が風で擦れ、宿舎前の広場は神妙な雰囲気になっていた。誰一人として、口を開こうとしない。その代わりに、二人を食い入るように見つめていた。

「……ああ、違う、今のは　違う」

フツと目線を落として、クリフは自嘲するように笑った。

「まったく……アルくんと話していると、どうも感情的になってしまいます」

「……」



「先程の言葉は、忘れてくださって結構です」

灰色の宿舎の扉の影で、先程憤怒して居なくなったはずのエレスが壁にもたれてかかっていた。内外ともかなり気温は高いのだが、肌寒いのだろうか、腕を抱えている。何か嫌なことでも思い出したのであるとか、苦しげに眉を寄せている。

拳を握り締め、アルは暫く何かを言おうとしてはそれを飲み干す。その行為を繰り返していたが、ようやく無難な言葉を見つけたのだろうか、口を開いた。

「……オレは……」

ク、と歯を食い縛り、アルは何か忌々しいものを鎮める様に言った。

「神様は……いらっしゃると……思います……」

「まだ言うのか!」

穏やかな目つきに戻りつつあったクリフが、再び怒りに打ち震え始める。激怒するクリフの目を見て、何故かアルは遠い昔の記憶を呼び戻されていた。ずっと、ずっと昔の……過去。

『アル、今日から貴方も毎日祈るのです』

そう言うと、アルの母親、サーシャ・ライトは光に照らされ浮かび上がる神に姿に目を細めた。まだ年端も行かない幼子だったアルも、毎朝の祈りの時間にはここに連れてこられていた。村人のほぼ全員が、教会の最奥にある礼拝所に向かって、胸の前で両腕を交差させて頭を垂れている。ちょうど南向きに設置された巨大な擦り硝子は、光が差し込むと赤・青・緑の三色で描かれた絵が浮かび上がる仕組みになっていた。

光が差し込み、浮き上がった絵にアルは、瞬間的に目を細めた。全ての、ありとあらゆる邪悪な気持ちを消しさるような　柔らかな笑みを浮かべる知らない人がそこに居た。

(…あれが…神様…?)

神を見て、幼いアルが抱いた感情は一つだった。

どうして、周りの大人は”ただの人の絵”にひざまずくのか。

母親に聞いても、まあと何かを恐れた様な表情をするばかりで、一向に真相を教えてくれない。代わりに、言う事を聞かない小さな頭を絵の前でもた擡げさせる事など、大人の力では造作そつさもないことだった。

(…嫌では、ないのか……。自分の…頭を下げるなんて…！)

「何を…考えているのです？」

恐らく腹が煮えくり返っているクリフにかなり低い声でそう問われて、アルはハツとした。今まで神を信じながらも、どこかもやもやとしたものが胸に渦巻いていた。その理由を、14歳になって

ようやく手にしたアルの思考は、もうそれ以外考えられなくなっていた。

暫しぼうつとしていたアルの表情がまた元に戻ったのを確認すると、クリフは空を見上げながらゆっくり深呼吸をした。そして感情を押し殺すようにしてアルに問うた。

「……もう一度、聞きます。神の有無は、”黒い狼”の精神性に大きく関わります。これは重要な問題なのです。神は、居ると思いませんか？」

アルはこの一週間にあったさまざまな記憶が交錯したのだろう、頭を抱えた。そしてその場に膝をつき、苦悶の表情を浮かべた。それもそうだろう…今まで自分が信じていた大勢ものが、リノ島へ来て崩れ去ったのだから。悪魔に取り付かれたように、その額にはびっしりと冷や汗の玉が浮いている。

「オレは…オレは…」

「アル」

凜々しい声に、毛を逆立てた猫のように神経質になっていたアルはハツとした。声の方を向くと、エレスが宿舎の入り口である扉にもたれ掛りながらアルをじっと見ていた。

「だいじょうぶ…少年が、自分で決めるんだ」

「……っ」

やんわりと抱きとめるようなエレスの声に、安堵したアルはプツリ

と糸が切れたかのように、その場に倒れこんでしまった。

## 第二章：【2】

騎士団の宿舎は上に行くほど階級が高くなっていて、最上階である三階は幹部が団長クラスの者しか居住不可だ。窓から眺める景色は、それ相応の位の者が見納めるに相応しい。その建物の三階の一番奥に、エレス・ウィアの部屋はあった。

必要最低限の家具と色合いしか揃っていないその部屋で、クリフは釈然としない様子でエレスを見た。

「…全く、アルくんはもう少し食事の量を増やした方がいいですね。見掛け倒しの筋肉では全く意味がありません」

「全くだ、これは下手したら私よりも軽いかもしれない……」

そうため息をつく二人の眼下のベッドには、力なくぐったりとしているアル・ライトが横たえられていた。自分より痩せている少年に理不尽さを感じていたエレスだったが、アルの意識が未だに戻らない事が徐々に不安になっていた。羊毛で作った布団の上に手を置くと、薄い布を通して感じるアルの体温にホッとす。

「それでは僕は騎士団の方へ戻ります。姉さんはどうするのですか？」

姉とは対照的に、アルに情をかける素振りすら見せないクリフはそそくさと部屋のドアの方に歩みながらそう言った。

「ああ、私は　少し、書類を仕上げる」

これからアルは騎士団員になる、仲間の面倒を見るのは幹部の務めだと、エレスはそう自分を言い聞かせた。それを聞いたクリフはドアノブにかけた手を止め、一旦エレスを振り返った。そして彼女が優しい眼差しでアルを眺めているのを確認して笑みを深くした。

「…そうですか、では僕はこれで」

「ん」

クリフが出て行くと、部屋は途端に静かになった。苦しそうなアルの寝息に、エレスは椅子を引き寄せベッドの傍に座った。

「……」

氷と水を湛えた容器にタオルをつけながら、エレスは魔うまされるアルを見た。常につんつんと元気に跳ねている短い黒髪が、冷や汗と枕のせいで垂れて額に頬に張り付いている。悪く言えば粗雑、よく言えば男性的な眉から スツと通った鼻筋、切れ長の涼やかな一重の目は閉ざされている。瞳が開いたときに見える、一点の曇りもない白藍色の瞳に見つめられると、胸の鼓動が早くなるというのは、エレスさえも気がついていない事だ。

「……なんで、あれぐらいで倒れるんだよ、」

ポツリと漏らしたエレスの言葉に、何故かアルが苦しそうに薄い唇を噛み締めた。額に浮いた汗の玉がつうとこめかみを流れた。

「……」

エレスは思った。そんなに…そんなに ケルディアから連れ去ら

れた事は辛かっただろうか。

次に、一瞬でもそんな事を考えた自分を呪った。当たり前だ、もし自分が子供の時に誘拐されたら……そこまで考えて、また濡れタオルを絞る力を緩めた。

自分はこの少年よりもずっと子供の時でさえ、もっともつとひどい目に合っている。そう、目の前で父親を殺されるという惨劇でさえも、乗り越えてきたのだ。だからきつと、きつとアルも乗り越えてくれる。

そう信じて、エレスは濡れそぼったタオルを幼い少年の額に乗せた。

開け放たれた窓から、心地の良い風が流れ込み丸い木製テーブルの上に広げられていた数枚の羊紙皮がカサカサと音を立てた。そして、その音でアルは目が覚めた。

「……………」

ふと腹の横の辺りに重みを感じ、首だけを持ち上げるとそこには自分の体を枕にして寝るエレスが居た。思わず息を呑み、しかし彼女を起こさないようにそつと体をずらしながら上半身を起こす。ポ

トリ、とふわふわの羊毛の布の上にタオルが落ちた。それが自分の額に乗っていたものだ。アルが気づく頃には、彼の心臓は最高潮に脈打っていた。

(ど、どうしてエレスさんが……)

絹糸の様に滑らかな金髪が、華奢な背中に無造作に散らばっている。安らかに小さな寝息を立て眠る姿は、美人というよりも愛らしい。いつもはきつちりと斜めに流されている前髪が無造作になり、後ろで一つに結んでいた髪は解かれ腰まで伸びている。普段ならきつい角度で上がっている眉は心なしか下がり気味で、金色の長い睫毛は陶器のように真っ白な頬に影を落としている。半開きになった形の良い唇を見て、さらに視線をずらすと、白いカッターシャツが第二ボタンまであけられていて、浮き出た鎖骨の下に、少しだけ谷間が覗いている。

「……………」

若いアルの体は、口内に溜まっていた唾を飲み込んだ。眠れる美女を目の前にして、やましい事を考えない男は居ないだろう。しかし、アルはエレスの寝顔が余りにも無邪気だったのと、未だ頭の中がぼうつとするのを理由に、彼女に何かをする事は断念した。代わりに青い空がよく見える窓を見て、白濁した思考を働かせる。

(…ああ、倒れたのか、オレ)



少しして、うたたね転寝をしていたエレスは目を開けた。そして自らの肩に服がかかっているのに気がつき、ゆっくりと頭を起こした。窓際に座っているアルを見て、微笑む。恐らくアルが服をかけてくれたのだろうと推測したエレスはしめしめとばかりに、物音一つ立てず椅子から立つとそのまま窓際のアルの方まで近づいていった。空の方を見ているアルは、背後にエレスが迫っている事など一切気がつかない。

「わっ！！」

「うわあ！」

がたんと、驚いたアルの体がバランスを崩し 窓際にかかっていた右足がずるりと宙に落ちた。しまった、と思いエレスは一瞬でアルの胴体に手を伸ばした。

「っ  
っ」

間一髪、アルは宿舍の3階から落下することから免れた。窓枠を必死に掴み、上半身が窓から突き出たような格好になったアルを支えるため、無我夢中に彼の胸板に頬を押し付けていたエレスは、ハツとした。あまりの恥ずかしさに脳が沸騰しそうになり目を固く瞑る。しかし、今回した腕を放すとアルは間違いなく落下する。仕方がなくそのままなんとか足の踏ん張りを利かせアルを部屋の内部へ引っぱり込む。

「…はあ…はあ…びっくりした…」

腰が抜けたのかへたり込むアルを見て、エレスはこんな事をしなければ良かったと思った。目の前の少年の優しさに何を考えていた

のか。自分ともあるうものが、”じゃれる”等と。戒めるように、  
乱れた自分の髪を手ぐしでなんとかまともになると、エレスはくる  
りとアルに背を向けた。

「エレスさん、」

「……」

何か暖かいものを感じる呼びかけに、エレスは自然に振り返った。  
するとアルはこれまで見た事のない優しい笑みを浮かべていた。

「オレを、看護してくれただんでしょう？」

「……！」

耳まで真っ赤になったエレスは、不意打ちだ、と呟いた。それを聞  
いたアルはきよんとし、次に自分も恥ずかしくなったのか俯いた。  
暫しの沈黙の後、先に口を開いたのはエレスだった。

「服を、かけてくれたのは少年か？」

勢いよく顔を上げたアルはエレスと確り目が合い、再び恥ずかしそ  
うに伏せ目加減で言った。

「え、あ ……まあ、そう…ですけど」

「そうか、ありがとう。嬉しかった」

それだけ告げると、エレスはそっぽを向き、次に何か思い出したか  
のようにアルに尋ねた。

「少年、気分はどうだ？」

倒れたのだから、それもそうだろう。アルは少し見栄を張った。本当はまだ少し、頭がクラクラしていたにも関わらずグツと力瘤ちからこぶを作っ  
て見せる。

「大丈夫です。もう全快ですよ」

それを聞いたエレスは目を細め、「そう」と呟いた。信じているからこそ、あえて何も口出ししないのだ。

「少年、叙任式は3日後だ。リノの街は治安もいいし、皆陽気な人たちばかりだ。適当に街を観察するのもいいだろう。それが少年は見習い騎士になるのだから、騎士団の連中と親睦を深めてみていい、宿舎に住んでいる連中の部屋は一番下の入り口に居る係りに聞けば分かる」

どうやらアルの空元気はエレスに見破られていたらしい。

「あの」

「……神の有無は、叙任式の時に再びティア嬢に問われるはずだ。そのときに、な」

聞きたい事は、皆エレスが先回りして言うてしまう。その頭の回転の差にアルは少し寂しくなった。何か安心できる場所にと自然に足は向かい、ベッドに移動し腰掛ると、アルは重い口調で言葉を紡いだ。

「……分かりました」

何を落ち込んでいるのか、エレスはそう思ったが、恐らく倒れた理由と関連するのだろうと察しをつけドアノブに手をかけた。

「じゃあ、しつかり休んでね」

ぱたん、と静かにドアが閉まると、アルは途端に不安になった。”寂しい”とか、”怖い”とかいう感情が津波のように押し寄せてくる。

肌寒さを感じたアルは全開だった窓をきっちり閉め再びシーツの中に潜り込んだ。何か頼りになるものが欲しくて、なるべく壁側にくっついておく。我ながら女々しいと思うが、仕方ないのだ、知らない人ばかりの土地に一人残されて、心の平静は保てなくなっていた。ふと、アルはいい匂いがすることに気がついた。そうだ、今自分が寝ているベットは”あの”エレスが寝ていたベッドなのだ。先程の転寝をしているエレスの顔が思い出せれ、自然と頬が緩む。少しだけ、不安が弱まった気がした。

(……とりあえず、寝るか。明日の事は明日考えればいい)

3日は猶予がある、そう思うとアルは深い眠りへ落ちていった……。

第二章：【3】（前書き）

出来れば最後にあとがきを読んでいただけで幸いです（\*^^\*）

## 第二章：【3】

アルが再び目を覚ます頃には、夜を過ぎ朝もやが出始めていた。もそもそと布団から抜け出て窓の硝子に手の平をつけて空を見上げる。昨日は眩しいほどに照っていた太陽はすっかり灰色の雲の合間に隠れてしまっている。不穏な空気を感じて、アルは身震いした。ふとテーブルの上に目を落とすと、メッセージ付きの黒い制服がきちんとたたまれ置かれていた。

『アルへ。3日後の叙任式にはこの服を着て出てもらう。厳格な式だ、それまでに神の存在の有無、自分の意思を確認しておくといい。くれぐれもティア嬢の前で倒れたりするんじゃないぞ！』

ここでアルは制服の横に小さな子袋が携えてあるのに気がついた。木綿で出来た布をチュレルの茎で縛ったものだ。コレは何なのか、そう思い続けてメッセージを読む。

『それと、リノの街を散策するのにも金が要るだろう。子袋には50ルーツ入っている。未来の仲間への私からの饒別だ、遠慮なく受け取ってくれ。貸しは、少年が強くなる事で受け取るとする』

思わずアルはにやけ顔になった。きつく布を縛っていたチュレルの茎を解くと、中にはキラキラと銀の光沢を放つ丸い硬貨が入っていた。

『私はしばらく騎士団の方に居る。騎士団の本部の場所は……街の人に聞けば恐らく分かるだろう。It is good luck that to a noble child wolf (気高い子狼に幸あれ) / エレス』

そこでメッセージは終わっていた。アルは小さな紙を二つ折にテールに置くと黒い狼の制服を見据えた。真つ黒だ、本当に”白の羊”とは対照的な。どこまでも深く暗い闇だった。触ってみると案外手触りが良い、アルは着ていた白い制服を脱ぐ事に抵抗を覚えた。なんだかんだと言ってもアルはは未だケルディアの人間なのだ。そう簡単に、受け入れるはずがない。

(こんなに良くして貰って、自分はまだ何が嫌なのだろう)

自分は誘拐された、今まではその一点張りだったが、それはアルからしたらさほど重要な事ではなかった。仮にケルディアで騎士団の試験を受けていたとしても、いきなり王国直属の精鋭部隊である”白の羊”などには入団出来ないだろう。それにアルの母親も”黒い狼”の事を毛嫌している。アルは女手一つで自身を育て上げた母親に対する愛情は人一倍強い。だからアルは、母親に心配をかけたいため彼女がダメだと言うものは全てダメだと見なしてきた。

しかし、アルの中には最近、自我というものが芽生え始めていた。他の誰でもない、自分は自分なのだという強い思い。

アルは今一番欲しいのものは名誉と喝采だった。長年虐げられてきた彼は人一番他人を見返したいという気持ちが強かった。そのためなら、どこの騎士団だっていいではないか。そこで活躍さえすれば……！

そんな中でアルはふとエレスの言葉を思い出していた。

『ケルディアの民は、嘘を真実だと思い込まされている』

「……嘘を…真実…？」

アルは思った。自分は今、何が真実で何が虚実なのか分からないからこんなにも悩んでいるのだ。”黒い狼”と”白の羊”、どちらが真実なのかがはっきりすれば、全て解決するではないか。

アルは何かを決意したように目の前の黒い制服を見た。

(……これを着るのは、もう少し後になりそうだ)

子袋をズボンのポケットに突っ込むと、アルは勢いよく部屋から走り出ていった。

小高い丘の上で、二人の騎士が互いに牽制しあっていた。一人が乗るのは漆黒の馬だ。その目は血走り、がっちりとした胸前の筋肉、逞しい首、強靱そうな四肢はその馬が歴戦の名馬であることを伺わせる。それに跨るのもまた、相当の馬乗りでしか有り得ない。黒い鎧を纏った騎士は、頭部にも鎧を被っているので目元しか外気に触れない。隙間から見える燃える様な紅いの瞳は、細められていた。それに対峙するのは、雄雄しい茶色の大地 栗毛の馬だった。額には白い流星が走り、伸びやかな四白の馬体は駿馬の証である。恐らく、草原の上では風のように走るだろう。その乗り手は同じく目元しか開いていない鎧を纏っている。しかしその鎧は、眩しいまでの



白さだった。薄茶色のレンズは涼やかに相手を見据えている。

「……何のようだ」

黒い騎士は、まるで壊れそうな橋を渡るのかとでも言う慎重さで尋ねた。騎士の相棒である黒い馬は、白の騎士が敵であることを知っているかのように激しく左前足で前掻きをした。

「……宣戦布告を致しに参りました」

少しほくそえんでいるのだろうか、白の騎士は余裕綽綽とばかりに言った。それを聞いた黒の騎士は少しも動揺せずに相手を見据えた。

「また、どうしてこのような時期に。ケルディアも相当戦争好きのようだな」

「”悪魔”は、”騎士”が倒すべき宿命の相手。悪魔を倒すのに時期など関係ありません」

淡々と告げる白の騎士に、黒い騎士は初めて声を荒げた。

「何を馬鹿なことを……つ悪魔は貴様らの方だろう!」

黒馬が同調するように嘶いた。今にでも駆け出しそうな勢いだ。

「はて……何のことやら……やはり”悪魔”の言う事は意味が分かりませんな」

すると白の騎士の背後から数十人の歩兵が現れた。それぞれに鋭い槍を構えている。

「もう一度宣告します。次に月が満ちる頃、我々は貴方方の島を責めます。わざわざ告げるのは”白の羊”の誇りを汚さぬため。主人の優しさに感謝するべきですよ」

嘲るように笑うと、白の騎士は黒い騎士に背を向けた。恐らく黒い騎士は見逃してやるという意味だろう。しかし黒い騎士は心底おかしそうに言った。

「貴様らの主人に、人間の心など残っていない」

それを聞いた白の騎士は馬の歩みを止めた。その手は手綱をこれでもかというほど握り締めている。

「なんだと…?」

「貴様らの主人こそ、人の姿をした悪魔だ」

白の騎士の周りにとりついていた歩兵達が色めきたった。

「主人を貶すとは…っ！許さざる大罰だ！見逃してやろうというリゼルさまの慈悲の心を、お前は踏みにじった！」

黒馬は自身に向けられた何十もの槍に、攻撃本能を掻きたてられたように激しく前掻きをする。屈指の馬乗りでなければこの馬の闘争本能を押さえる事は難しいだろう。剣を翳し自分に向かってくる白の騎士や歩兵を、黒い騎士は臆することなく、それどころか愉快そうに見据えた。



## 第二章：【3】（後書き）

読んでくださっている方々に少し報告があります。

嬉しい事にColor blindnessの合計読者数が1000人を超えました。恥ずかしながら私、小説家になろう！で書いてきて、ここまでの読者数が1000人を超えた事がありませんでした：笑”

やはりランキング登録の威力が凄いですが、それにしても連載物で一日の読者数が安定しているのは、毎日覗いてくださっている常連さんが居るということでしょうか？

そうでしたら、とても嬉しい事です！それに一度投稿して何度も後で手直しするので、せっかくの読者様にも迷惑かけてしまっています：すいませんm（＿）m

では長くなりましたが、まだまだColor blindnessは続きます。こっご期待を！

## 第二章：【4】

ようやく街まで下ってきたアルは、まず街の人に騎士団の本部位置を教えてもらおう事にした。目ぼしい人を探していると、ちょうど人のよさそうな雰囲気の二人組みの男女が噴水の脇の長椅子に座っていた。

「すみません…騎士団の本部が、どこにあるかご存知ですか？」

それを聞いた男女は、少し視線を見合わせた後、にこやかな笑顔でアルに答えた。

「騎士団の本部は、確か街を北口から出てすぐの所にありますよ」

男の方が女の肩に手を回している様子から、アルは二人が恋仲であると気がついた。邪魔をしたにも関わらず爽やかなので、アルはリノの街人は本当に人が良いのだなと思った。

「あ、ハイ。ありがとうございます」

一礼をすると、アルはその場から逃げるようにすぐに走り去った。

「まいったな……」

アルは北口に向かって走りながら、すぐにも雨が降ってきてそう

な灰色の空を見上げた。今雨が降ると濡れてしまう。倒れた事も  
あり、体調不良になるのはなるべく避けたかった。

ひたすら露店の連なる道を通り抜けながら、赤茶色の煉瓦を蹴り  
進む。リノの街には、いたるところで笑顔が溢れている。大人も、  
子供も、皆笑い声をあげている。ケルディアとは大違いだ。そう思  
いながら、アルはようやく北口までたどり着いた。リノの街から一  
歩出ると、そこは緑滴る森が現れた。しかし道しるべなのだろう、  
四角形の木の板が何枚も重なった案内板があった。

「騎士団の本部…はこつちか！」

走り出そうと、アルが足に力を込めた瞬間、荒い馬の鼻息と金属同  
士が擦れる音が聞こえた。

「!?!」

アルが振り向くと、そこには黒く大きな怪物が目をぎらつかせ今に  
もアルに圧しかかりそうになっていた。腰が抜けその場に尻餅をつ  
きそうな勢いであったが、アルはそれがただの巨大な黒馬であるこ  
とによりやく気がついた。

「…と、危ない危ない…もう少しで少年をひき殺すところだ  
った」

「あ…貴方は…」

馬の背には漆黒の鎧を纏った騎士が乗っていた。頭部さえも鎧が覆  
っているため、騎士の表情は読み取れない。しかし片手で暴れる馬  
を制御する姿から見て、アルはすぐに騎士が相当の乗り手だという  
事が分かった。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫です……」

ぐいぐいと、ハミ（馬の口に銜えさせる金属の事）を噛み締める馬は前足を振り上げながら早く前に行かせると喚いているようだった。馬の口には泡のような涎が溜まっている。

「そうか、私は急いでいる。すまないが、道を開けてくれるかな？」

アルは自分が道の真ん中を歩いていた事に気がつき、慌てて脇に反れた。それを見た騎士はほぼ立ち上がりながら前に進む黒馬を御しながらアルに礼を告げた。

「ありがとう。じゃあ、失礼するよ」

騎士が少し手綱をゆるめてやると、黒馬は猛り狂ったかのように道を走っていった。

「……凄い……」

アルはただただその後姿を見ていた。あれほどの荒くれ馬、自分では到底制御できないだろう。”黒い狼”には、あんなに凄い馬乗りも居るのか……。

ますます、”黒い狼”に対する信頼を抱いたアルは、先程の騎士を追いかけるようにして走っていった。

騎士団本部で情報を整理していたエレスはふと外が騒がしい事に気がついた。彼女は本部の二階に居るので、窓の傍に立ち外の様子を伺う。するとエレスはすぐに諸悪の根源を見つけた。

「すぐに幹部を私の部屋に集める！」

騎士団本部を取り囲むようにはりめぐらされた塀の唯一の出入り口である城門が開き、高身長 of 黒い騎士が闊歩しながら本部に向かつて歩いてきていた。頭部の鎧を鬱陶しそうに外すと、その下には燃える様な真紅の長髪が現れた。

「緊急だ。一刻の猶予もない、早くするんだ」

細いが、しっかりと切れ長の目を細めながら、黒い騎士はすぐに本部に入った。

それを見届けたエレスはすぐに部屋を出て、同じ階にある”黒い狼”団長の部屋に向かった。そこにはすでにクリフ、ユウヤが立っていた。質素な茶色系の色で纏められた回廊に、美形青年が二人も揃いも揃って立っている光景は、それはそれは煌びやかである。

「姉さん、これは何事でしょうかね？」

腕組みをしているクリフの顔にはいつものように笑っていた。犬の様な笑みを浮かべながら、まだかまだかと諸悪の根源の姿を探す。



「知らない…全く、団長はようやく放浪の旅から帰ってきたかと思えばこれだもんなあ…」

エレスもようやく回廊に立つと、今しがたまで訓練を積んでいたの  
であろうユウヤが、騎士姿のまままで億劫そうに呟いた。

「全くだ。いくら実力があつたって、あの放浪癖はどうにかしないと」

「放浪癖が何だつて？」

いきなり現れた張本人に、三人は一気に体を強張らせた。紅い肩までの髪を揺らしながら、団長と呼ばれた男は三人を睨みつつ自室の部屋の鍵を開けた。その後ろにしていた何人かの付き人に下げれと合図をし、無駄話をしていた三人に入れと合図をする。

パタンと、ドアが閉まる頃にはすでに四人はソファに座っていた。

「急にどうしたんですか、ベルナ団長。またアルベルト大陸からの土産ものですか？」

エレスがため息をつくように聞くと、ベルナ団長と呼ばれた紅の髪と瞳を持つ男は大義そうに言った。

「……エレス、今から話すことはそんなくだらん話ではない。確かにアルベルトの土産もあるが、それよりもっと、恐ろしい土産だ」

顔の前で指を組み、ベルナは切れ長の目をさらに細めて続けた。

「先日、ケルディアを旅していたときのことだ」

大股を広げて、面倒くさそうに聞いていたユウヤだったが、ケルディアと聞いてその表情は真剣そのものになった。猫毛のためふわふわの茶髪は、前髪だけが長く深緑の瞳に入りそうな程伸びきっている。

「 ” 白の羊” の使者に会った」

その場の空気が一気に重くなる。エレスもユウヤも、クリフでさえも、瞬きもせずベルナの顔を穴が開くほど見つめている。

「 次の満月の夜、 ” 白の羊” がリノの島を攻める。奴らはそう言っていた」

「 「

ユウヤは息を呑み、目を見開いた。何の音も、開いた唇から出る事はなく、彼の代わりにエレスが微かに震える声でベルナに言った。

「 昨夜が満月の夜だったという事は……次の満月の夜は、ほぼ1ヶ月後ということですか」

「 そう言うことになるな」

言葉を発する手段を失っていたユウヤは、ようやく膝の上で握り締めていた拳を机に叩きつける事で言葉を発した。

「 何を……っ！！何を考えているんだ奴らは！！馬鹿にも程があるっ！！！！」

端正な顔を真っ赤にして、ユウヤは眉をきつく寄せさらに唸った。

「あと一ヶ月で何が出来るというのです！我々の戦力は未だ不足しています……何も対処しないのならば、”黒い狼”が殲滅せんめつされるのは目に見えている！」

「落ち着けユウヤ。誰が何も対処をしないと云った。リノ島の島民は一人も殺されはしない」

ベルナは落ち着き払った様子で口元に拳を当てた。それを聞いたユウヤは大人げもなく、ますます声を荒げた。

「ふざけるな、どこにそのような保証がある！！」

もはや団長相手ですえも敬語でなくなっている副団長の荒れ具合を、幹部であるエレスやクリフはただただ見つめるしかなかった。否、彼ら自身も、突然のことに動揺しているのかもしれない。落ち着いているのは、実質ベルナただ一人だろう。

「ユウヤ、少し黙るんだ。おい！エレス」

ベルナはうざつたいとばかりにエレスに目配せし、荒れ狂うユウヤを押さえ込むように指示した。それを受け取ったエレスは隣で喚くユウヤを押さえ込み、クリフに預けると自らも尋ねた。

「しかし団長、ユウヤの言う事も一理あります。後一ヶ月で、どうするのです？」

それを聞いたベルナは黙り込んだ。その様子に、エレスとクリフ、

ユウヤは愕然とした。まさか、まさか策はないのだろうか。一定時間、沈黙は保たれた。その間に、ようやく頭の中を冷却したユウヤは野獣のように血気盛んな眼差しで考えに耽っていた。

同時に、エレスはソファの背にもたれ掛りながら、少し怯えている自分に気がついた。

(…何をこんなときに……)

急に、一カ月後に戦争が迫っていると聞かされたのだ。死への恐怖が沸いて当然だろう。しかしエレスは恐怖をコントロールすることに慣れていった。何度も体験してきたのだ、それに彼女の精神力は尋常ではなかった。必死に、頭の中の情報をかき集める。

「ティア嬢には、もうお話したのですか？」

それを聞いたベルナは心ここにあらずの状態で適当に答えた。

「ああ、もちろんだよ。一番にご報告した」

エレスはさらに続けた。

「じゃあ、ティア嬢の決断が全てを決める。私達はここでひたすら、命令を待つ事しかできない」

「…そうですね」

納得したように頷くと、クリフは組んでいた腕を解き立ち上がった。その表情には笑顔が戻っていた。それを見た他のベルナとエレスは啞然とした。ユウヤは苛立つようにクリフに怒鳴った。

「クリフ！お前こんなときに笑うなんて 何考えてやがる……！」

それを聞いたクリフは不思議そうな顔をして言った。

「おや、私はもうとつくの昔に覚悟ができていますよ。父を彼らに殺されたときから、戦争などいくらでも出来ます」

それを聞いたユウヤは押し黙り、ベルナは野太い笑い声を上げた。

「はっは！それはそうだ。確かに、クリフの言うとおり、私たちは主人の命令を待つのみ、果報は寝て待ってっ奴だ」

エレスは焦燥する胸の鼓動を押さえながら、心底自分の主人が良い作戦を練ってくれることを祈っていた。

## 第二章：【5】

ようやく騎士団本部に着いたアルは、様々な木々の中でも最も高い強度を誇るウリンが城門に使われている事に気がつき引き締めた。今から自分が入ろうとしている場所は、”あの”黒い狼の本部なのだ。

気合を入れながら歩を進めるも、ふと門が上に吊り上げられたままになっている事を不審に思ったアルはまた両足を地面にくっつけた。

「……」

何か、何か嫌な気配がする。しかし今更　歩みを止める訳にはいかないのだ。エレスに真実が何かを聞くまでは。

そう覚悟を決め、アルは堂々と門下を通り抜け何部へ進入していった。すると中で数人の騎士がひそひそと何かを耳打ちしていたが、アルを見た途端その剣幕は険しくなった。腰に携えた自慢の剣を今にも引き抜きそうなほど腕に力を込めながら、アルを囲うように丸い陣形を取った。”黒い狼”の騎士、それも数人に取り囲まれ、まるで丸腰のアルは一気に肝が冷えるのを感じた。

「あ、あの　ちが」

「貴様、”白の羊”の者か！？どうやってリノへ侵入してきた！」

「白昼にも関わらず堂々と……！」

「ですから！違います！オレは」

「アル？何やってんの、こんなところで」

すっかりしどろもどろになっていたアルに救いの手を差し伸べたのは、エレスの素っ頓狂な声だった。涙目になりながらも、アルは一時停止している騎士たちの輪から脱出しエレスに駆け寄った。彼女の隣には思い出すのも忌々しいユウヤと、相変わらずの優しい笑みを浮かべるクリフ、と　後一人アルには見覚えの無い騎士が居た。目の覚めるような紅いの長髪に、男らしいがっちりとした輪郭、きりつとした眉、その紅い髪より清んだサンセット色の瞳。

「あれ、君は」

男はアルを見るなり繁々と顎に指を当てた。自分が見つめられている事など露知らず、アルは命からがら、未だに早く鼓動する心臓を落ち着かせるのに躍りになっていた。

「……………ひょっとして、先程の少年じゃないか！」

目を見開き、何か珍しい小動物を見るような目つきで、男はアルに向かつて叫んだ。そう言われて、男に全く見覚えが無いアルは困惑するばかりだった。

「何ですか？もしかやベルナ団長、アルと知り合いですか？」

エレスはまさかという物草でベルナとアルを見比べた。まるで接点がない二人が、いつの間に出会っていたのだろう。ベルナは自分よりも一回りほど小さな、まだまだ未熟なアルを見て、一抹の不安を覚えた。本部に来るということは、時期に始まるケルディアとの戦争にも、この少年を駆り出すことになるだろう……………白い制服を着て

いることから、恐らくケルディアより連れてきた少年だ。自分の母国と戦うには　　まだまだ、時期尚早だと思われる。

「いや、ほとんど話していないがな、アル、とか言ったか？君ほら、道で、危うく馬とぶつかりそうになっただろう？」

「あ、」

ようやく思い出したアルは、あのと時の騎士が目の前にいるベルナという男だと気がついた。あの素晴らしい馬術の持ち主である騎士と、直に会えるとは　　。密かに胸のうちで、自分の理想だと決め付けていた騎士にあえて、アルは一気に気分が高揚していくのが分かった。慌てて手の平をズボンに擦りつけ、そのまま握手を求め

「あ、あの、お初にお目にかかります……オレ、アル・ライトと言います。凄かったです。あれほどの暴れ馬に乗れる人は、今まで見た事ありませんでした」

「暴れ馬って…アンルリイのことか？はは、そうか。嬉しいよ、私はベルナ・オルゲン。黒い狼の団長だ。よろしく」

太陽の様に熱く輝く笑顔と、ギュッと、固くつかまれた手のひらに、アルは烈しく心臓が脈打つのを感じた。凄い、凄い。こんな立派な人が”黒い狼”の団長。アルは自分の中で、”黒い狼”への忠誠心がぐんぐんと育っていくのを感じた。

「アル。わざわざ走って本部に来てくれたとすれば、非常に悪いのだが　　我々はまた今からブラックホールリング城に戻る。もし君が私達の誰かに用事があるとしたら、済まないが、話は城に戻ってからにしてくれ」



「分かりました」

夢見心地であるアルは、自然にそう答えていた。それゆれ自らがどうしてもエレスに聞きたかった事は延期されてしまった。エレスはアルの様子に首をかしげながらも下級騎士達が用意した5頭の馬を見やった。その中には、愛馬である栗毛の牝馬、フォロウも居た。

「え、五頭って　アルも一緒に帰るのですか？」

「ん？何か問題でもあるかな？」

体が大きいにも関わらず、ベルナは身軽に愛馬・アンルリイに跨った。エレスも手綱を握り締め颯爽とフォロウに乗馬すると、ユウヤもクリフもそれぞれに愛馬に乗っているのを確認し、最後にアルも悠然と鹿毛の馬に乗っているのを確認した。

「アルはまだ騎士ではありませんよ。従士にもなっていません。そのような輩に、騎士団の馬に徒歩で十分かと」

反論しようとするアルを横目で見ながら、エレスは早速興奮し始めたアンルリイににやついているベルナを睨んだ。

「そうなのか？まあいいじゃないか、彼だけ徒歩というのも、可哀想だろう？それに後に騎士になるのならば、これも訓練のうちだ」

自らを庇うような言葉を放ったベルナに、アルは益々尊敬の眼差しを輝かせた。

「しかし」

「さあ行くぞ！」

まだ食い下がろうとするエレスを半ば無視するようにして、ベルナは駆け出しはじめた。黒馬の性格を熟知したかのように、あまり馬にストレスを溜めないやり方だ、アルはそう思い自分もじわりと馬の腹を圧迫した。

森の中を五頭の馬が疾走している、先頭はもちろんベルナの馬だ。一系乱れぬ隊列で、馬達は走り続けた。最後尾に付いていたアルの馬に、ユウヤはほくそえみながら併走した。

「おい！」

轟々しい土を巻き上げる蹄の音に負けない音量で、ユウヤはアルに向かって叫んだ。アルは自分が負けた初めての相手であるユウヤは、どうも好意的に思えなかつたので無視をする。それを見たユウヤはムツとした表情でそのまま呼びかけた。

「おい！俺に負けたからって無視すんなよ」

「何を……っ！」

「お、ムキになった。お前誰の従士になるんだよ？」

いきなり胸糞悪い事を聞かれたものだから、うっとアルは息を詰まらせた。しばらく答えるか否かを考え、しかしどっち道ばれることなのだと鷹をくくって答えた。

「貴方です」

アルから放たれた言葉を上手く受け取る事が出来ず、ユウヤは思わず手綱から左手を離し自らを指差して聞き返した。

「俺？」

「……………そうです」

間抜け面のユウヤを横目で見て、アルはつくづく、尊敬するベルナの元で従士をしたかったと思った。どうしてこのような性格の悪そうな男の下で鍛錬を積まなければならないのか。確かに技術面は優れているとは思いが、どうも、何か生理的に受け付けない。

「そうか……………お前が…俺の従士……………」

そう呟いたユウヤの声は、妙に暗かった。アルは、ユウヤだって、自分のような生意気な従士、いらないだろうと思った。どんどん開けていく森の木々を見ながら、いざとなれば、ティアベルとかいう少女に言っつて、従士の組み合わせを変えてもらえばいい、そんなことまで考え始めていた。嫌な奴とは付き合わない……………それがアルのスタンスだった。

「……………ふふ」

不意に聞こえた、堪えきれず漏れ出すようなユウヤの笑い声に、アルはぎょっとした。

「ふははは！さすが、ティア嬢も分かっつてらっしやる！絶妙な人事だぜ……………いいぜ、お前が俺の従士。叙任式はいつだ？」

一気にまくし立てられ、反射的にアルの口は動いていた。

「二日後です」

「そうか。後二日でお前が俺の従士になるのか」

何度もそのことを確認するように繰り返すと、ユウヤは口角を上げて何かを企んでいる表情でアルを見据えた。一心に自分を見据える、今までアルが会ったことのない様な強い眼差しがそこにはあった。熱い教育心と、悪巧みに満ちた眼差し。

「楽しみだ、お前をこき使えるなんてな」

「！」

一瞬でもユウヤに心を開きそうになっていた自分にアルは嫌悪した。こき使うだと、やはりユウヤは性が悪い男だ。

……しかし、自分が思っているよりは、この男は良い人なのかもしれない。一言で言えば、兄貴分、とでも言うのだろうか。そう思い、この男に付いていけば何かと楽かもしれない、という打算的な気持ちも浮かんできた。

（仲間も欲しいいな……）

次の瞬間、緑の量が少なくなり一気に視界が開いた。遠くにリノの街の入り口が見えた。隊列は減速しはじめる。

「……おい」

「……」

呼ばれてアルは横を睨んだ。

「ぶすつとしゃがって……挨拶もなしか？」

口をつぐんで、思わず視線をそらす。

何秒かして、アルは雑然とした気持ちを胸から追い出すように深いため息をつき、再びユウヤを見た。国や大陸など関係なく、挨拶をすることは”常識”だ。

「これから、よろしくお願いします」

「お？何だ、やれば出来るじゃねえか。未来の従士、こちらこそよろしくな」

そういい、ユウヤは絶妙な手綱裁きで愛馬の馬体をアルの方に近づけた。二頭の馬がぶつかる寸前まで馬体を合わせると、あひみ 鐙と鐙がぶつかり、金属的な音がする。手綱から話した手を、ユウヤはすつとアルに向かって出した。それを見て、アルも素直に手を握ろうとするが、待てと制された。

「”黒い狼”の合言葉を、知ってるか？」

「??？」

「知るわけねえよな。じゃあ、教える」

そう言うとユウヤは手綱を持つ手を切り替え、腰の剣を引き抜いた。そして走る馬の上にも関わらず、やすやすと剣を空に掲げながらこっぴど叫んだ。

「誇り高き黒の魂、恥じる事なき名誉の死、たぎる血脈は途絶えることなく！」

急に叫んだユウヤを、一馬身程先を行っていたエレスが振り返った。

「何いきなり合言葉を叫んでるんだ？」

訳が分からないとばかりに、エレスはゆるゆると剣を鞘に戻すユウヤを見た。

「いや、ちょっとこのガキに教えてやろうと思ってな」

それを聞いたアルはカチンときたのか、思い切り眉間に皺を寄せた。

「オレはガキじゃない！」

「あーはいはい、悪かったよ」

「それにオレはまだ ” 黒い狼 ” の団員じゃないんですから！そんなもの教えられても使いませんよ！」

「何だあ？人が折角教えてやったのに……」

後ろで騒ぐ二人を見ながら、エレスはまた視線を前に戻した。

(…なんだ…随分仲良くなったんだな…二人とも)

それにしても仲直りするのが早すぎやしないか、とエレスは首を捻った。

### 第三章：戦争

扉がノックされ、同時に部屋の内部に居た少女が返事をした。

「はい」

「ベルナです。入ってもよろしいでしょうか？」

「かまいません。どうぞ」

「は」

ベルナ・ユウヤ・エレス・クリフ・アルの五人はそうつと部屋の中へ入り、四人は自らの主人に跪いた。アルはまだ騎士ではないのだが、跪いたほうがいい気がして自分も同じ姿勢になる。

「……作戦は、まとまりになったでしょうか」

ベルナが、慎重に探るように聞いた。しかしティアベルは一向に口を開こうとはせず、ひたすらテラスより灰色の空を仰いでいた。

「……」

アルは重々しい空気に息が詰まりそうだった。何のことなのか、さっぱり分からない。作戦とは、何なのだろうか。斜め前に居るエレスが、自分の方を横目で見た気がした。ティアベルはようやくこちらを向いて、しかし微塵の不安も感じさせない雰囲気と言葉を紡いだ。



「…強大な”白の羊”に対抗できるほど、今の”黒い狼”は強くありません。個々の能力も、絶対的な数も、一つも足りていません」

”白の羊”。久方ぶりにその響きを聞いたアルは、肺に溜まっていた汚い空気を少しだけ吐いた。そして　自分の中で、少し変化が起きているのにも気がついた。

前は、”白の羊”と”黒い狼”を対に出されると、どうしても黒を嫌悪してしまっていたのだが、今はそれほどでもない……というか、むしろ黒の方が親しみを感じる事もある。街も、人も、全てが白より黒の方が良いという事実を、自らの目で確かめたのだから。

「お言葉を返すようですが」

ベルナが少し強い語感で言うものだから、その場の全員の顔が強張る。

「…確かに数では負けます。能力も、足りてない部分はあるでしょう。しかし、主人に対する忠誠心では何一つ負けていないつもりです。にも関わらず、主人がそのような弱気では、私どもの士気も下がるといふものです」

夕陽が燃えているようなサンセット色の両の目が、鋭くティアベルを捉えた。大の男に睨まれたにも関わらず、少女は依然として表情一つ変えない。

「……続きが、あります。主人の先を行かないように」

怒ってはいない、しかし並の相手なら思わず縮こまってしまいそうな威圧感で、ティアベルはベルナを見下ろした。

「……申し訳ありません」

ベルナは、心底反省したように答えた。アルは尊敬するベルナの謝る姿を見て、ティアベルという少女がますます遠い存在だと本能的に察知した。どうやっても、触れるどころか、話しかける事さえ叶わない。

それが 騎士と主人の関係。そう感じて、アルは足が震えるのを感じた。

可憐な少女に、出会った瞬間に心を奪われそうになっていたが、それを寸でのところで思い留まる。そして、ようやくベルナやティアベルが戦争について会話しているのに勘付いた。心臓が、かつて無いほどバクバクと脈打つ。目を見開いて、アルの思考は真っ白になっ  
ていった。

「分かれば、いいのです。続きを言います。…私達が、”白の羊”  
に対抗し得る力が無いのは今に限ってです。一ヶ月もあれば……もし、様々な国と提携を結ぶ事が出来れば、この戦争には勝てます」

そこまで言って、部屋の空気はこれでもかというほど重くなった。鉛が一心に、跪く五人にのしかかっているかのようだ。しとすと、降り始めた雨が部屋の内部をより一層暗くさせる。

「……我々に、他の国が協力すると？」

ベルナが、遂にその言葉を言った。誰一人として、顔を上げる者は居ない。アルはあまりの衝撃にひたすら床を見つめていた。

「……ええ」

ティアベルは初めてその宝石のような瞳を揺らした。それを見たベルナはますます唇を噛み締めた。

「……無理です」

燃えるように紅い長髪は、湿気のせいで心なしか艶がなくなっている。

「我々は、どの国にも信用されていません。ケルディアが嘘の情報を流し続けているせいで、本来関係のないはずのアゼルやアルベルトの奴らも、我々に関わらないように腹を決めています」

ティアベルはぐっと、心の平静を保つかのように拳を握った。小さい島国が、巨大な大陸国に勝てるのは他の国の協力なしには考えられない。その可能性が0になったのならば、もはや万策尽くしたようなものだ。

「しかし」

一点の希望を灯すように、ベルナは力強く唸った。端正なその顔は、いつになく自信に満ちていた。

「アゼル大陸の南西に位置する山間の村に、”粗雑な馬鹿共（Crude fools）”と呼ばれている連中が居ます」

それを聞いたティアベルはあからさまに眉間に皺を寄せた。エレスも全く同じ反応を見せる。

「聞いた事はありません。」アゼル大陸一の厄介者” たびたび正当な理由もなしにアゼル正式軍隊” 赤い闘牛” の本部に乗り込み、その度に軍隊と衝突を起こす馬鹿な連中」

それを聞いて、ベルナはにやりと笑った。

「私はアゼルの出身ですから、彼らの存在を誰よりも知っています。彼らは国内では” 愛すべき馬鹿” と言われています。国家の権力に抵抗したがる、血気盛んな若者の集団だと」

それを聞いて、ティアベルは啞然とした。まさに” 粗雑な馬鹿共” という名がふさわしい集団だ。

「彼らは、国の事には一切興味がありません。あるのは” 体制の権力” に歯向かうことのみ。彼らに事情を話せば……必ずや協力してくれるはずです」

ティアベルは何度も、目の前の団長を確認した。正気で言っているのだろうか。その様な連中が何の役に立つのか。しかし彼女は否定の言葉を口には出来なかった。それしか策が残されていないのだ。それに、行動しなければ刻々と時間は過ぎていつてしまう。それにベルナは最も頼りがいのある男だ。覚悟を決めると、ティアベルは早速騎士4人に命じた。

「ただちにベルナ団長を含む幹部2人、従士3人、計5人の使いをアゼル大陸へ送ります。一刻でさえ無駄にしてはなりません」

確りとしたその言葉に、絶望しかけていたその場の3人が再び顔を上げた。アルは未だ床を見つめたままだった……。

### 第三章：【1】

急に立ち上がったエレスは、ティアベルのほうを見据えて言った。いつの間にか雨はやみ、灰色の雲の隙間から穏やかな光が部屋の内部に差し込んでいた。

「ティア様。アゼルへの派遣部隊には私を、是非」

それを聞いたユウヤは負けじと立ち上り吼えるように言った。

「リノ島の行く末を決める大事な旅です。エレスより、俺を！」

そんな騎士たちを見て、ティアベルは口に手をやってくすくすと控えめに笑った。ベルナも嬉しそうに目を細めている。アルは何がなんだか分からないといった様子で何も言えずに跪いている。最後にクリフが立ち上がり、俄然大きな声で叫んだ。

「いいえ　ティア様。この二人より、僕の方がお役に立てるはずです！きつと！」

初めてクリフが叫ぶ姿を目撃したアルは、口を半開きにして四人の凜とした背中を見つめるばかりだった。

ティアベルは熱心な騎士たちをなだめるように、ふわりとした笑みで言った。

「…ありがとうございます。皆さん。リノのために動きたいという意志が強く伝わりました。だいじょうぶ、誰に任せようとも、しっかりやってくれるでしょう」

その場にいる、幹部の三人がごくりと唾を飲むのがアルには分かった。

彼には三人の気持ちが理解しがたかった。どうしてわざわざ危険を責任を伴う旅に行きたがるのか。もし失敗すれば、”粗雑な馬鹿共”に襲われて殺され 万一生かされても、断られたのならばリノ島の未来が閉ざされるというのに。一カ月後にやってくる血なまぐさい戦争を、ただ待つ事しか出来なくなるというのに……それも、自分の、せいで。

「ただ、旅の団員は私が決めます。これはとても重大な人事なので、私の気持ちを混入させることは出来ません。いくらあなたの方が私に積極的になろうとも 判断が揺らぐことはありません。今夜は大人しく、それぞれの部屋に戻るように」

「そんな」

エレスが訴えるように短く呟いたが、ティアベルは微笑むだけだった。アルは、全身の毛が逆立つのを感じた。今の今まで、自分は命やら責任やら、そのような事から逃げる事が当たり前だと思っていた。しかし目の前の 自分より少し年上の少女は、そのような重圧を今夜全て背負う事になるのだ。自分だったら ……考えるだけで、歯がガチガチと鳴る。得体の知れない恐怖に、少女は打ち勝つ事が出来るのだろうか。

しかし、もしこのような可憐な少女に出来るのならば。アルはひっそりと立ち上がった。それに反応し少し振り返ったエレスは、アルの目が何かの決意に燃えていることに気がつき驚いた。心なしか、顔つきも”少年”から徐々に”男”に近づいている気がする。

今 アルの中で、一人の少女を助けたいという柔らかな気持ちと、そんな事が出来るはずが無いという堅い気持ちとが、天秤にかけられていた。ぐらぐらと、少しでも刺激があればどちらかに傾いてしまふそれは、綱渡りをしているかのような危うさがあった。

「分かりました。ティアベル様の勘が素晴らしいのは皆承知の上です。では、お考えに邪魔をしないよう、我々はこれで失礼させていただきます」

がっしりとした体付きのベルナがお辞儀をすると、まるで分厚い盾がお辞儀をしているかのようにだった。

「くっそお……ティアベル様！ぜったい、ぜったい俺を行かせてくださいよ！」

頑固にまだ叫び続けるユウヤをがっしり抱えると、ベルナはその他三人を押しながらティアベルの部屋から出て行った。

どこまでも自分を信じてくれた真っ直ぐな騎士たちに、ティアベルは微笑みが止まらなかつた。しかし同時に、その赤い心臓はとてつもない威圧感を感じていた。何度も脈打ち、主に危機を知らせる。正直な反応を見せる自身に苦笑しながら、ティアベルは胸の真ん中をきゅっとなぐらった。

「……落ち着いて」

自分に言い聞かせるように、安堵の言葉を呪文の様に繰り返す。

「大丈夫。きつと上手く、やれる」

ふと、首にかけておいた金属製のロケットを服の合間から取り出し、静かに開く。そこには無邪気にポニーに抱きつく小さい頃のティアベルと、それを幸せそうに眺める男の姿があった。白黒のため鮮明ではないが、男は艶やかな黒髪で、はつきりとした二重、高い鼻筋、きりつとした眉、そして体には立派な黒い鎧を纏っている。恐らく30代であろう、いかにも育ちの良い上品な顔立ちをしていた。

「…………お父様……」

楕円形の小さなロケットを、ティアベルは両の手で包み込んだ。祈るように頭を頂垂れると、小さく吐息の様な声で呟く。

「…………どうか…私に力をください……」

騎士たちの前では、立派な主人をやったのけるティアベルであったが、その中身はまだ若干16歳の、ただの少女であった。

自分の言葉が、リノに住む全ての島民・騎士たち命運を決める権限を持っていることが、彼女は恐ろしくて仕方が無かった。

ただ、故・ケルディア国王の娘であったことが……唯一生き残ったとされるクリストファー族の末裔だったこと、それだけが。彼女を死よりも辛い、生きながらにして人様の命を背負うという巨大な恐怖の渦の中心に引き込んでいた。



### 第三章：【1】（後書き）

【この話からあとがきを書くことにしました。たいしたことは書いてないので、見たい方のみドウゾ笑”】

ティアベルはとても強い少女です。恐らくアルなんか目ではないほどに…笑”

次回から物語が動いていきますが、ティアベルは本当に辛い過去を乗り越えて今ここに存在します。その葛藤を少しでも描きたくてこの話を付け加えました。

可愛いけど暗い過去がある少女は大好きです（え）

そしてその少女を主人公が支えるのも大好きです（あ）

主人公らしくないよわっちいアルですが、これからの成長を見守っていただけたら幸いです。では長くなりましたがこの辺で（\*^^\*）

### 第三章：【2】

城から一同が出る頃には、空は赤く染まり雨は止んでいた。宿舎への道をなぞるように生えている樹木の葉の表面に溜まった水滴のうち、一滴が真下に落下した。赤茶色の煉瓦道の凹凸部位に水溜りが出来ている。

アルはずっと俯いていた。後一カ月後に自分の母国との戦争が迫っている。知らないほうが良い事を知ってしまったのだ。

「……………」

頭がくらくらし始めたが、先程からエレスが心配そうに自分の方を見ているのに気づいていたので、なるべく平静を装う。

「アル」

急に、前方を歩いていたらベルナが振り返った。紅い長髪は山の向こうに沈んでいく夕陽と同化し、顔の左半分が影で真っ暗になっている。しかし残りの右半分でも、その紅い瞳は魔力を盛ったかのようにアルを射抜いた。

「……………なぜ、か。分かるか？」

「……………」

残りの幹部にはそのまま行くようベルナは指示し、ユウヤ・クリフ・エレスは一足先に宿舎へ入っていった。この時間帯になると町のヒトも騎士も全員寢床に帰るので、宿舎の前の広場は誰も居なかった。

ベルナが何について話しているのか理解できないアルは、ただ目を伏せるだけだった。いや、今の彼には何を言っても頭には入らないだろう。それほどまでに……アルは落ち込んでいた。

「なぜ、ティア嬢があの場合に君も留まらせ、”あの話”を聞かせたのか、分かるか？」

返事をしないアルに苛苛する風でもなく、ベルナは丁寧に尋ねた。それを聞いたアルは、ようやく顔を上げ、接着剤が付いたかのように重い口を開いた。

「……分かりません……オレは……」

一面に生えた若草色の芝生が、通り風で波打つ。木の枝に止まっていた小鳥がそれにあわせて飛び立ち、茜色に染まった空に消えていった。

「オレは、あんな話聞きたくなかったです」

それを聞いたベルナは鍛えられた鋼のような腕をがっしりと組み、背丈の低いアルを見下げた。その紅い瞳は軽蔑よりも怒りよりも、興味を示している。

「何故だ？どちらにせよ、知ることになる話だったんだよ。ならば早い方が、心の準備が出来るだろう？」

「ベルナ団長は」

まだまだ角ばっていない、未発達なその肩が、微かに震えているの

にベルナはようやく気がついた。アルは切れ長の瞳に涙を浮かべ、尊敬しているはずのベルナを凄まじい形相で睨んだ。

「オレが、”黒い狼”の団員になることを前提に話していらっしやる」

それを聞いたベルナは、少しだけこめかみが痛むのを感じた。そして何も分かっていない目の前の少年に、悲しくなった。

「……アル。答えを言おう。君はティア嬢に選ばれた、恐らくアゼルへの旅の団員にもなるだろう。でなければ、あの場から直に追い出していたはずだ」

それを聞いたアルは、今度こそ耐えられないと顔を伏せた。しかしベルナは、さらにアルの心を追い詰めるように続けた。

「君は知らない。あまりに真実を知らなすぎる……人は誰でも、自分の信じるものが崩れるときに恐怖の念を抱く。今の君の感情は、至極当然なことだ」

震えが大きくなったアルの肩に、その大きな手を乗せると、ベルナは強引にアルを揺さぶり起こした。アルはその白藍色の清んだ瞳に涙の色を浮かべていた。顔は恐怖に歪んでいる。恐らく、これからやってくる衝撃の事実を、本能的に察知しているのだろう。

「……これから言う事を、しっかり聞くんだ。全て、真実なんだよ」

「嘘だ！！貴方は、そういつてオレを騙そうとしているんだ！」黒い狼”の奴らなんか、信用できるものか！」

自分でも驚くほどの声で、アルは必死で否定した。しかしベルナは表情一つ変えず、ひたすら紅い瞳でアルを見据えた。

「嘘じゃない。ちゃんと聞くんだ……ケルディアの国民であった君には信じがたい話だろうが　14年程前、前ケルディア国王・クリストファー・ラウル王様は、現・国王ルドルフ・シュバイツァーに暗殺された」

「……っ」

アルは目を見開き、その瞬間目尻に溜まっていた透明な液体が頬を伝い零れ落ちた。驚きすぎて、声さえも発せられないのだろう。

「国王のみならず、その血脈を告ぐ者、親族、国王に関係する全ての者が殺されたんだ」

うそだ、とアルは呟いたつもりであったが、それは音になることはなかった。人の気配がしない宿舎前の広場には、幾重にも濃縮された様な、険悪な空気が漂っている。

「黒を持つ人種も、意味の無い殺戮の被害となった。何故か分かるか？クリストファー王が黒髪で、かつ黒を好んだからだ」

徐々に、アルはつかまれた二の腕が悲鳴を上げ始めるのを感じた。ベルナが凄まじい握力で彼の二の腕を掴んでいたからだ。

「君も黒を持つ者だ。全く無関係な訳ではない、”君の親族”だって、被害を受けているはずだ」

それを聞いて、アルは脳裏に村の人からひどい言葉を投げかけられ

ていた母の姿を思い出していた。アルに思い当たる節があるのを見たベルナは、ここぞとばかりにまくしたてた。

「さらに卑劣な事実が公衆の面前に晒されることを恐れたルドルフは、前国王は国民から預かった金を無駄遣いしていて、それがばれる事を恐れ国外に逃亡、一族も逃亡という、前国王の誇りを傷つける上に真つ赤な嘘の事実を国内外に発信した。奴は騙された国民を手玉に取り、この事実を知る者は側近だろうか、一切の遠慮をせず共謀犯だと極刑にした。こうして14年前のクーデタは、誰一人として疑うことなく記憶から忘れ去られた」

最後まで言い終えると、ベルナは心底悔しそうに奥歯を噛み閉めた。眉をぎゅっと寄せ、紅い瞳は自分が告げた事を恨むように怒りの色に満ちていた。

「君は、今までそんな”白の羊”に入りたいと思っていたんだ」

アルは放心状態で、痛む胃を押さえつけた。キリキリと、今まで自分の言動全てを責めるように体中が痛んだ。ベルナが嘘を言っているはずがなかった、アルはその事を理解した。

エレスにクリフに、”黒い狼”は殺人集団だと。

目を固く瞑って、その度に涙は溢れ出した。ベルナはアルの睫毛についた水滴を見ながら、彼の柔らかな黒髪の上に手をポンと乗つけた。

「”黒い狼”は、そのクーデタから命辛々生き延びたクリストファー家の末裔であるティア嬢と、黒の人々で組織された騎士団だ。もちろん、ティア嬢からその話を聞いて”黒い狼”に入団した者も

いる。私やエレス達のようにな」

それを聞いて、アルの喉からくぐもったような声が発せられた。エレスが言っていた言葉の真意を聞かされ、その言葉の重みが分かる。

「オレ……」

ベルナの分厚い手の平で髪をかきまぜられながら、アルは涙を手の甲で強引に拭いた。そしてどうしても出てくる涙を嫌悪するように眉をきつく寄せ、極力声が震えない様に区切りながら言った。

「オレ、そんな事しらずに、エレスさん、とか。クリフとかに、いろんな事言いました……！それに、何で皆がティアベルという少女の事を敬うのか……黒の狼と白の羊が何故こんなにも敵対しているのか、黒い狼に悪い人なんか居ないのに どうしても、拒絶してしまったり、分からない事だらけで、」

頷きながら、ベルナは穏やかに微笑んだ。その目はまるで、子供を見守る父のようなぬくもりがあった。

「……ああ。私だって、始めはそうだったさ」

それを聞いて、アルは流れ出る涙をもう拭わずにベルナを見上げた。

「ベルナ、団長も、ですか？」

「ああ。当たり前だろ？12歳やそこらの一般の少女の話を、立派な成人男性の私が信じられると思うか？」

ベルナが悪戯っぽく返すと、アルは一瞬息を詰まらせ躊躇する仕草

を見せたが、次の時には驚嘆の声を上げた。

「じゃあ、どうやって信じたのですか？どう考えても、ケルデアンの方が信じられる……」

ベルナは手を離しそのまま腕組みをすると、神妙な面持ちで押し黙った。それを見て、アルはまた自分が何かへまをしでかしたのかと心配になった。

「12歳の少女が話す事にしては 悲しすぎたんだ」

ベルナは細長の目を光らせながら、何故かアルを威嚇するように言った。まるでこの話題にはこれ以上触れるなどでも言うような威圧感だ。それを感じたアルが思わず息を呑んだのを、ベルナは噴出した。何が何だか分からないといった様子できよんとしているアルに、腹を抱えながら、ベルナは握り拳でアルの肩を押しした。

「あまり気にするな、そのときが来れば、ティア嬢からお話になるだろう。お、ほら。もう夕陽も落ちる…… 宿舎に入って夕食を食べるぞ」

よろめきながら、アルは宿舎の入り口に向かって歩き出したベルナの広い背中を見た。とても力強く、頼りがいもある。

……いつの日か、自分もあのように素晴らしい男になれるのだろうか。

すると不意にベルナが振り返った。

「そうだ、後もう一つ。君、すぐ泣くのはやめた方がいいよ。今の



年だからかろつじで許されるけど、  
を何よりも嫌うからね。じゃあ「  
” 黒い狼 ” は敵の面前で泣く事

羞恥で顔が真っ赤になったアルは、思わず俯いた。

第三章：【2】（後書き）

……そろそろ感想が欲しいかも、です…笑”

### 第三章：【3】

アルは薄暗い部屋で息を潜めていた。当の昔にエレスは寝てしまい、未だ従士ですらないアルはベッドで寝る身分でないと言われ仕方がなく床に何枚か毛布を敷いて寝ている。不意に窓の方を見やると、四角枠の向こうは紺碧の空が広がり、弓形の月がおぼろげに光っている。その細い体にはうっすらともやがかり、見上げてるアルを穏やかに見下ろしていた。

「…………ふう」

毛布にくるまりながら、アルは怯えていた。ベルナが言うには、自分はアゼル大陸の”粗雑な馬鹿共”の元へ派遣される。しかし、またどうして未熟な自分を？

いくら考えても、結論は出ない。確かではないが、団長が言うのだからそうなのだろう。ここ一週間で様々な事があり過ぎて、脳が体がついていけない…………。

目元を手で隠し、ため息をつこうとするとベッドからエレスの寝息が聞こえた。ごそごそと何度も寝返りをうっている。アルが耳を敬そはただてていると、どうやらエレスは魔まされてるようだった。

「…………ふん」

火が見える。逃げ惑う人々に、興奮する馬の嘶き。

黒い影がゆらめき、柱の影にうずくまって震える二人の子供の背後に迫る。男の子と女の子はつばらな瞳に多量の涙を溜め、ひたすら恐怖に打ち震えている。

「……さあ、そこに居るんだろう？出ておいで」

ひびく 蟬蛙の様に濁ったどす黒い声で、男はその手にナイフを握り言った。

『…こわいよ…こわい…クリフ…！』

『しずかに』

煌くブロンド髪が特徴的な、人形のように美しい少女が体を縮こませながら言った。その少女をしっかりと抱きとめ、同じく凜々しく端正な顔立ちなブロンド髪の子供が、必死に少女の口を押さえている。

ゆらゆらと燃え盛る炎に浮かび上がる、今にも消えそうな程小さい二つの影と、悪魔のような卑劣さを映す巨大な影。すっかり荒らされた部屋の中央には二人の男女が倒れている。恐らくそれらは、この家の主人とその妻だろう。石釜や、鍛えられた剣がずらりと並ぶ風景からここは鍛冶屋なのだろう。

「クク……ぞくぞくするぜ…子供を殺すのはよ…」

血の付いたナイフを舌なめずりしながら、素早く柱の後ろに回り込んだ男は、驚愕した。一秒前までその場に居たはずの子供の姿が、消えていたのだ。

「どこだ!？」

すっかり油断していた男は、背後に剣を握った小さな子供が居る事に気がつかなかった。轟々と燃え盛る炎の音は、男の断末魔でさえもかき消してしまった……。

剣から滴り落ちる赤い液体を見ながら、子供の顔は見る見る間に真っ青になっていった。その後ろには、布で目隠しをされ震えている幼女が居た。何がおきたのか分からないのか、必死で子供名前を叫んでいる。

「…クリフ!クリフ……ッどうしたの……!!」

「ちがう……」

カタカタと、刃に血がこびりついた剣を見ながら、子供　クリフはぶつぶつと否定し続けた。小さな体は傷だらけだったが、何よりも傷ついているのはその”清らかな心”だった。

「ちがう……ちがう……!僕がやったんじゃない!!」

勢いよく剣を床に落とすと、クリフは頭をむしり掻くように抱えた。水晶な様に輝いていた瞳孔は開き、唇からヒュウヒュウと乾いた呼吸音が出ている。

「クリフ……?」

目隠しされているエレスは首を傾げるばかりで、クリフが発狂寸前である事には気がついていない。そこでようやく、目を覆う布をずり下げ、クリフの様子がおかしい事に気がついた。そして、近くに



「!?!」

急に思考の糸が途切れたように、エレスは目を覚ました。嫌な汗が背中や額にびっしりと浮き出ている。息も心なしか荒い。

「大丈夫ですか？すごく魔まされていましたよ」

心配そうに発せられた声の方を向くと、そこにはぼんやりとした輪郭と共に、アルの顔が現れた。それを見てようやく肩の力を抜いたエレスは、気だるそうに上半身を起こし、汗をぬぐった。

「……なんでもない　少し、嫌な夢を見ただけ」

そんなはずがない、心の中でアルはそう思った。あの魔まされようは尋常ではなかった。何度も寝返りを打ち、悲鳴とも取れる声で呻いていた。しかし……。

目の前のエレスを見ながら、相当疲れているのだろう、ぼんやりとした眼差しでピクリとも動かない。真夜中であるのに加え、本人がこのような状態では、話すよりも寝てもらったほうがお互いいいだろう。頷くと、アルはエレスの華奢な肩に自分の手を載せ囁くように言った。

「……ひとりで、眠れますか？」

それを聞くと、エレスの肩がピクリと跳ねた。そして、先程の放心状態などなかったかのようにきつくアルを睨みつけた。

「私を馬鹿にしているのか?!」

思いも寄らない返答が返ってきたことにびっくりしたアルは、苦笑いを浮かべながら慌ててその手を下ろした。エレスが過剰なまでに怒るので、困惑してしまふ。

「い、いえ……」

「そうか　なら、私のことなど気にしないで寝ろ……私はもう、誰にも」

そこで一旦言葉を区切ったエレスは、苦しそうにアルを見据えた。月明かりでしか視界が確保されない中で、アルはエレスの瞳が不安そうに揺れるのをはつきりと見た。意味深で、どこか哀愁漂うその瞳に、思わずドキリとする。

「……心配などかけさせはしない」

もう心配かけさせてるよな…とアルは思ったが、そのまま無言で毛布の中に滑り込んだ。それを見届けたエレスは、荒々しく横たわった。再び静かになる部屋には、先程までとは明らかに違う緊張感があつた。

アルは今まで見た事のない、エレスの哀しみの一部を垣間見た気がして、その晩はぐっすりとは眠りに付く事が出来なかった。



### 第三章：【3】（後書き）

エレスの過去：です。最初の方を覚えてくださってる方が居れば分かるかと思いますが、盗賊に襲われて死んだのは父親のみで、母親は”黒の住処”で細々と生きています。

### 第三章：【4】（前書き）

この話は作者が遊びました、エレスとアルが遊んでいるのを見たい  
方のみどうぞ笑” 物語は全く進みません・

### 第三章：【4】

窓から差し込む、やさしい朝の光に体が反応する。アルはろくに眠れなかったので、軽く妙な気分のまま体を起こした。エレスは未だに寝ている。

「……………」

昨日のあれは、夢じゃない。エレスは悪夢を見ていた……………それも、相当な。

寝癖のついた髪を手で適当に直しながら、家から持参したカバンを開く。そういえば、叙任式は明日のはずだ。

それなのに今日からアゼルへ旅立つって……………。頭を抱えて、再び様々な情報がアルの心を掻き乱す。

10日ほど前までの、少なくとも平和だった自分の人生に、急に割り込んできた”黒い狼”。

そして心から入団したかった”白の羊”の主人であるケルディア国王ルドルフ・シュバイツァーが行った残虐な行為の真相。ケルディアの国民のほずである自分すらも知らなかった、14年前のクーデタ。

ティアベルという少女が、前国王の末裔であるという現実。

アルは物事を順序立てて考えようと試みた。彼は基本的には自分の目で見たもの以外信じようとしない。

14歳のアルは、1〜2歳の頃の記憶が全くない。しかしアルはその事をさほど気にしなかった。子供の頃の記憶を忘れるなど……良くなる事だと思っていた。母親に聞いても、あまり相手にされなかった。

(……………?)

ここでアルは何か胸につつかえるのを感じた。彼の心の中に、一番重要な記憶を封印していた真つ暗な扉が、浮かび上がる。それは夥しい数の鎖で押さえつけられている。ぎいぎいと鈍い音を立てながら、誰かがその封印を解くのを望んでいる。

「……………アル…?」

ようやく目を覚ましたエレスは、目を擦りながら、床の毛布の中にアルが居ないのに気づいた。

「くそっ」

封印を解くには、決定的な証拠が足りない。アルは拳をぎゅっと固めた。気を取り直すように、バッグの中から黒い制服を取り出し、それを着ようと立ち上がった瞬間、背後にエレスが居るのに気がつく。

「うわぁ あぁぁー！」

「何よ、そんなに驚かなくてもいいじゃない！」

身の毛がよだつほど驚いたアルは呼吸を整えながら引き攣った笑いを浮かべた。そう言つと、エレスは頬を膨らませてアルの持つていた制服を奪い取った。

「……………これ、着るのにはまだ早いんじゃない？ 叙任式は明日でしょ？」

そう言われて、アルは最もだと思った。しかしベルナが言うには、自分は今日発表されるはずのアゼルへの派遣団に入る。それならば、一人真つ白な制服を着るのは忍びないものだ。それにアルの心はずでに、”白の羊”からは離れていた。むしろ、”黒い狼”が良い人たちの集まりで、間違っているのはケルディアの方だといろんな人に知らせたかった。黒を持つ自分を、初めて本当の仲間だと認めてくれた人たち……………。

「で、でも、一応！」

制服を奪い返し、アルはそれを後ろ手に隠した。

「……………ふう〜ん」

エレスはそんなアルの様子を見て、柔らかく目を細めた。ようやく目の前の少年が、自分達の仲間になりたいと自分から言ったのだ。これで、もうアルは”仲間”だ。

「あ、あの」

「ん？」

「き、着替えるんで……………」

しかし、エレスはどうもアルは頼りがいがないと思った。男にも関わらず、女の前で堂々と着替える素振りはなく、逆に縮こまり気まじく、視線を泳がせている。

「……着替えれば、いい」

「は？」

何故自分はこんなに女々しい少年から目が離せないのだろうか、エレスはつくづく不思議に思ったが、それはある気持ちで解決する事が出来た。そう、エレスはアルに”母性本能をくすぐられている”のだ。おどおどするアルを見て、エレスは悪戯心が沸くのを感じた。

「なんなら、私が脱がせてあげようか？」

「えっ!!」

アルの顔が恥ずかしさで耳まで真っ赤になったのを見てエレスはますます悪乗りした。アルに近づき、制服を剥ぎ取りはじめる。

「”黒い狼”の制服は着方が少し複雑だから……その方が早いし！」

「い、いいです……やめてください」

慌てふためくも、素早いエレスの動きについていけないアルはたじろぐばかりで、簡単に上半身の服がめくられてしまう。

「う、うわ!!」

思わず悲鳴を上げそうになったアルを助けるかのように、部屋のドアが勢いよく開いた。それを察知したエレスは我に戻ったかのようにピタリと行動を停止した。おそろおそろ、ドアのほうを向くと、そこには驚愕の光景に口をあんぐりと開け立ち尽くすユウヤが居た。

### 第三章：【4】（後書き）

中々誰が誰を好きかを表せないですが、一応設定ではユウヤはエレスが好きなことになってます。いつか二人を絡ませる予定ですが：



### 第三章：【5】

ブラックホーリング城の大広間に集められた騎士団員達は、どこかそわそわしている。ティアベルやベルナ、他の幹部達でさえ下級騎士には一切の事情を教えていないはずなのだが、やはり噂というものはどこかから漏れ、波紋も様に広がるのだろう。

百人ほどの黒の騎士が一同に集う姿はどこか仰々しいが、同時にそれが非常事態ということを示していた。

その中に 一切違和感のないアルが居た。黒い制服を着ているため、完全に彼らに同調している。しかしその顔は険しく、ひたすら騎士の波の向こうに立っているティアベルを見据えていた。城に入つてすぐの広間は縦に長いが、今居る場所は逆に横に広い。さらに壁には等間隔で腰窓があり、朝日が広間全体に差し込んでいる。見上げると、平たい天井に黒い狼とそれを操るヒト、さらに黒い馬達の軍隊が丸い縁取りで描かれていた。滑らかな象牙色の彫刻の様に、肌理細やかな絵柄は一流の絵師を呼んで描かせた事を示している。茶色や深緑、決して鮮やかではないのだが、物腰柔らかで静寂な雰囲気だ。

「今日ここに集まってもらったのは、当然ですが理由があります」  
ティアベルが、話し始めた。アルはぐつと首を伸ばし、頭半分ほど自分よりも大きい周りの騎士達と視界を同じにした。ティアベルの顔には疲労の色が見えた。同時に、彼女の周りを護衛する団長と副団長、その他の幹部はお互いに牽制している様だった。行く事が決まっているベルナは淡々としていたが、もう一人、幹部は誰が行く

のか。

「もう、残された猶予は一ヶ月もないのですが……白の羊との、全面戦争が迫っています」

一瞬にして、回りの騎士達がどよめきたつ。その中でアル一人が動じていなかった。事前にその事柄を聞いていたというのもあるが、それ以上に彼の中で”白の羊”を憎み”黒い狼”に忠誠を誓うという区切りが出来てから、迷いはなくなり目の前の事柄だけに集中できるようになっていた。

「静かにするんだ!!」

ベルナが苛立つように吼えた。鶴の一声の様に、すぐさま誰一人として喋るものは居なくなる。

「時間がないと、ティアベル様がおっしゃられたのを聞いていなかったのか？今は事柄に心を乱される時ではない、現実を見据えろ！後一ヶ月で、全員の団結力を強固なものにする」

皆がその視線をティアベルに集める。突き刺さるような視線を感じた彼女は、少し息を整えて言った。

「いくら個々の能力を高めても、絶対的な数が足りなければ勝てません ……そのため、アゼル大陸への使者を送ります。派遣団のメンバーは昨夜のうちに私が決めておきました」

広間に集まっている騎士の全員が”黒い狼”に生涯の忠誠を誓ったものだ。さらに彼らは”死”をあまり恐れていない。彼らが恐れるのは唯一一つ……”名誉ある行動”が出来無い事のみだ。

「まず、団長。ベルナ・オルゲン。そして……副団長、ユウヤ・セルフィス」

ざわりと、疑惑と不安の声広がる。それもそうだろう、一定期間黒い狼のNO1とNO2が、リノの島から居なくなる事になるのだから。エレスとクリフも信じがたいといった様子でティアベルを凝視した。

「さらに、騎士バーニー・カルロス。騎士ヘンリー・ヒュー」

呼ばれた二人の騎士が急ぎ足で集団から一歩出た。主人の前であるから、頭部の鎧は外している。一人は、ベルナに負けず劣らずの巨大な身体を持つ顎鬚あごひげの男だ。堀が深く鼻が高い為目元は影になっ  
てしまっている。その髪は頭皮のてっぺん以外剃りこまれファイヤ  
レッドのモヒカンになっている。恐らく彼もまた、アゼル大陸出身  
なのかもしれない。

そしてもう一人は、アルとさほど年が変わらないであろう少年だ  
った。まだまだ発展途上の身体は若々しさに満ち溢れ、貴族出身と  
言われたら信じてしまうほどの美人だ。長い睫毛は切れ長の目を魅  
惑的にさせ、口角が自然に上がっているあひる口も顔の端整さを増  
している。

羨ましいのだろうか、ほとんど全員、黒の騎士たちが二人の男を食  
い入るように見た。そしてティアベルの口から放たれる 最後の  
一人を固唾を呑んで見守る。

「従士、アル・ライト」

一瞬、大広間の時間が止まった。我が我がと思っていた騎士の全員  
が、聞いた事のない名前に耳を疑う。エレスやユウヤも同じ事で、

今にも抗議しそうに不服そうな顔つきでティアベルを見ている。ベルナのみが、顔つきを変えなかった。

「……以上です。アゼルへの派遣団員は、至急旅立つ準備を整えてください。出発は明日の日が落ちてからです」

「ティア様!!」

たまらないとばかりにエレスが叫んだ。しかしティアベルは彼女の方をチラリと見ただけで、すぐにその場から去ってしまった。残された騎士たちは互いに眉を潜めひそひそと話を交わしたが、誰もティアベルの人事に納得する者はいないようだった。

『アル・ライトって…誰だよ…』

『あれだよ、いつか宿舎の前で倒れた奴じゃないか・』

『……大事な旅にそんな軟弱な奴を入れるなんて』

『~~~~~』

聞こえてくる雑音に、アルは苛立った。自分だって、好きで選ばれた訳じゃない!

アルの様子に気がついたベルナは闊歩しながら黒い集団に近づいていった。団長の行動に、選ばれなかった騎士たちは恐れおののき一瞬にして道を開けた。それに気がついていない中ほどの騎士達は未だ密談を交わしている。

『それにオルゲン団長とセルフィス副団長が同時に居なくなるなん

て……もし敵が奇襲してきたらどうするんだ…』

『そうだよ、”白の羊”は俺たちだけでどうにかなる敵じゃない』

「だからどうした」

急に降ってきた威厳のある声に、騎士は驚き押し黙った。それを見たベルナは、憎しみを込めた目つきで弱音を吐いていた騎士たちを睨みつけた。

「私とユウヤが居ないだけで、”黒い狼”は揺れるのか。私は”黒い狼”をそのような烏合の衆に育てた覚えはない!!」

ベルナの声は、ざわついていた黒の騎士全員を叱り付けるようだったが、目の前で怒鳴られた二人の下級騎士達のうち一人が、柄の悪い目つきで、隣のアルを横睨みながら反論した。

「ですが、団長。私どもの意見も聞いてください。このような素人同然の輩に、リノの島の命運を決める旅をさせる等、出来るわけがありません。少なくとも、私でさえこの輩には勝てます!」

それを聞いたベルナは、得意げに片眉を上げて見せた。

「ほう…そこまで言うか。ならば、アルにお前より実力が在ると分かれば納得するんだな?」

遠まわしだが、男はベルナが決闘を暗示している事に気がついた。彼としても、アルを打ちのめし自分が派遣団に入れることは何よりも名誉になるだろう。しかも相手は素人同然の少年で、自分が負ける可能性など毛頭考えられなかった。

「はい」

小生意気な少年をいたぶる事が出来る、そう確信した男はにやりながら即答した。ベルナはアルを見て、同意を求めた。

アルは自分がかつてないほど高ぶっているのを感じた。まるで自分の中に、脈々と名騎士の血が受け継がれているかのようだ。尊敬するベルナの前で、無様な戦いは見せられない。何度も息を吸い、呼吸を整えると、ゆっくりと頷いた。

アルが決闘を承諾したのを見た周りの騎士達は一挙に興奮のボルテージが上がり拳を突き出すようにして騒ぎ始める。

「テラー！頑張れよ！」

「ガキに負けんなあ！」

テラーと呼ばれた目つきの悪い男は自分に対する応援に背筋を打ち震えさせていた。頬は赤くなりうずうずしはじめる。名誉に対する黒い狼の騎士達の欲深さは相当だ。

「よし　これより、テラー・ウィルソンとアル・ライトの決闘を行う！場所はストロング・ヒルだ！馬はこちらで用意する」

喝采が起き、静寂に満ちた広間は突如興奮の坩堝と化した。そんな騎士達の様子を、エレスは苦々しそうに眺めていた。



### 第三章：【5】（後書き）

なかなか展開が進みませんが、誇りの高い”黒い狼”の連中を納得させるには実力行使でしかありえませんが、アルとテラーの闘いが次回のお話です。



### 第三章：【6】（前書き）

少々流血シーンがありますので、苦手な方は見ないようにお願いします。

### 第三章：【6】

ストロング・ヒル。強風が吹き荒れるこの緑の丘は代々黒い狼の騎士たちの決闘場所だ。

そして今も決闘が行われようとしている。アルとテラーは両方馬に跨り、凄まじい闘志を剥き出しにしている。まだ自分の剣を授かっていないアルのために、両者同じ剣と同じ盾を使用する。

さらに二人のどちらかが逃げ出せないように、周りの観客達はぐるりと周りを囲んでいた。娯楽を禁じられた騎士たちの唯一の娯楽は、このような決闘だった。何人もの騎士たちがどちらが勝つか賭けをしている。審判役のベルナは片手を振り上げ叫んだ。

「これより、決闘を開始する！観客は一切の干渉を禁じ、勝敗は相手を馬上から叩き落した方が勝ちとする。では、両者前へ」

ゆっくりと馬を歩ませ、アルとテラーは対峙した。そしておもむろに剣を掲げ、先を触れ合わせると一礼をする。ねっとりとした視線を絡ませあい、再び距離を取る。その微妙な空白のうちに頭部に鎧を被り、二人の男は構えた。

「テラー！そんな少年に負けたら、末代までの恥だぞ！」

興奮した一人が野次を飛ばし、それに呼応するかのように全員が拳を突き出し喚き始める。テラーは雑念を切るかのように剣を斜め下に振り下げた。

「うるさい！言われなくとも分かっている！」

アルはそんなテーラーの様子を鎧の隙間よりじつと伺っていた。自分の息遣いが妙に響き、ドクドクンと心臓が脈打つ音しか聞こえなくなっていく。神経を集中させ、目の前の敵のみに焦点をあわせる。右手に持った盾は重いので腕だけでなく首からベルトで吊っている。すう……とアルは手綱を握り締め、自分の馬の首を撫でた。初めて乗る馬をどれだけ上手に乗りこなせるか、それも勝敗を分ける要因になりそうだ。馬の耳が、アルから放たれる青い炎のような闘志に反応し後ろに伏せられた。

どちらが先に仕掛けるのか　その場の全員を固唾を呑んで見守る中、我慢の限界を超えたテーラーが一気に掛け声を挙げ馬が走り始めた。それを見たアルも力強く馬の腹を踵で蹴り突進した。

互いに土塊を巻き上げ、瞬きをする暇もない速さで衝突した。剣から火花が散り、馬が嘶く。寸分の隙も見せず、テーラーは剣を振り上げアル目掛けて垂直に落とした。素早く盾でそれを回避したアルは、すれ違う様になった馬を振り向かせテーラーの馬がこちらを向かないうちに剣で突く。しかし軍衣を貫通したかのように見えた剣先はテーラーの纏った鉄衣に阻まれ、逆に身を乗り出したせいで馬上のバランスが崩れる。それを見たテーラーはすかさずアルを落とそうと自らの馬を窮屈に回転させ一步を踏み出す勢いでよれたアルの盾めがけ剣を突き出す。砂埃が舞い、美しい日差しが二人の男を照らし出す。

「ぐっ！」

盾の中央より少し外れたが、テーラーの的確な突きにアルは鎧の上あぶみに立ち上がるようにして踏ん張った。常人なら鎧に力を入れれば入れるほどバランスは崩れるのだが、アルの馬術の素質は素晴らしく

逆に足場を固めることになる。なぎ払うように剣を受け流し、テラーの首元に剣先を向かわせる。思わぬ反撃にぎよっとしたテラーは慌てふためいた。観客達は瞬きをする暇もなく一進一退の攻防に食い入っている。

次の時には、テラーが喉の代わりに犠牲にした右腕に剣が突き刺さっていた。確りとしたその感触に、アルは身震いしながらも勢いよく剣を引き抜いた。血液が皮膚を伝いテラーの右手の甲に流れ出す。それを見た観客からは怒号がはじけ飛んだ。

「何やってんだあ！」

「情けないぞテラー！それでも黒い狼の一人か！」

アルの戦いでその才能を認めたくない黒の騎士たちはテラーの不甲斐なさを責める。それを聞いたテラーは激痛が走る右腕を見ながら屈辱に打ち震えた。

「……絶対、殺す」

誇りを傷つけられた手負いの狼は牙をむき出す。テラーは素人同然の少年に本気の殺意を見せ、それを感じ取ったアルはぐいっと手綱を引き絞った。誇り高き精神は何も、テラーだけの特権ではない、アルもまた、同じ誇り高き若狼だった。互いに唸り、体をぶつからせる。

「はっ！！」

血飛沫を飛ばしながら闘う二人の男を見ながら、半ば遊び半分で眺めていた騎士たちは皆目の前の死闘に目を見張っていた。自分達が

侮っていたアルという少年は、なかなか強い。テラーが未熟な騎士だといえども、アルは未だに騎士どころか従士にもなっていない。つまり、目の前の少年は素質だけでテラーと互角に渡り合っているのだ。ベルナでさえ、アルの放つ凄まじい闘志と才能に興奮していた。

とんでもない、原石を見つけたものだ。

やがて日が昇り 闘いは終盤に纏れかかった。

「はあ…つはあ…つ」

肩で息をしながら、テラーは目の前の少年に恐怖を覚え始めていた。体は痛み、汗は噴出し、眼下の馬は消耗し口角からだらしく舌を出している。それに比べ、アルは自身の馬と一心同体になり未だテラーを引きずり落とそうと躍起になり迫ってくる。底なしの闘争本能 ……。自分の命を奪おうと突進してくるアルの剣に、遂にテラーは悲鳴を挙げた。

「やめろお!!」

それを聞いたアルは瞬時に馬を止めた。その剣先は、テラーが息をする度上下する喉仏を貫くまで後僅かという位置で止まった。

「や、やめろ……」

テラーは彼の”死”よりも辛い”名誉が失われる”ことを選んだ。彼はアルの底知れない才能に、初めはおぞましいほどの憎悪と少しの畏敬の念を抱いた。しかし闘いをするに連れ増す熱気に、ひれ伏すしかなかった。しかし命乞いをされたにも関わらず、アルは

再び剣を傾けて言った。

「誇りを捨てるような騎士は、オレの手で抹殺します」

そして剣を力の限り横一線に振った。

「つー!!」

ドサリと、テラーは落馬した。一部の騎士が思わず悲鳴をあげる。しかしよく見ると、テラーは剣で切りつけられた訳ではなく、切れ味の悪い平たい部分で頭部を強打された事による脳震盪で気絶していた。そう、アルはテラーを生かしたのだ。

テラーは気絶しながら、アルと一対一で闘ったもののみに分かる、相手の闘志をも呑み込み燃やし尽くすような青い竜の火群ほむらに追い詰められていた。悲鳴を挙げながら、苦しそうに喘ぐも、拷問のような精神攻撃は止む事がない。

「勝負、ついた。テラー・ウィルソンが落馬したため、この決闘アル・ライトの勝利とする！」

その瞬間、言葉を失っていた観客があつと歓声を上げた。アルを認める賛辞の言葉を次々に叫び、ストロング・ヒルは一瞬にして”  
勇氣ある若狼”を称える場所にと変貌していた。

ゆっくりと下馬をするアルに、ベルナは声をかけた。

「アル」

ベルナの呼びかけに、アルが遠慮がちに顔を上げた。

「素晴らしい決闘だった。これでもう誰もお前を見下すものはいま  
い」

「……はい」

アルの元気がないのに気がついたベルナは不審そうに眉を潜めた。

「どうした？」

ベルナの凜々しい顔が近づき　アルは思わず唾を呑み込んだ。  
このままでは、自分の顔がかつてないほどに赤くなっていることが  
ばれてしまう。初めて公式の決闘で勝った、その事が本当は泣きそ  
うなほど嬉しい。綺麗なこの丘の真ん中で、腹の底から雄たけびを  
上げたいほどだ。しかし尊敬するベルナに、有頂天な自分の様子を  
見せたくないのだ。逃げるようにして無言で馬を引く。そんなアル  
の様子を見て、ベルナはなるほど、と納得していた。

（恐らく　アルは今夜嬉しくて眠れないはずだ。自分がかつてそ  
うだったように…）

団長として、素直に団員を祝福してやりたがったが、明日は重要な  
叙任式が迫っている。その準備を城に戻ってしなければならぬ。  
その場で、立派な騎士にするのは、何もアルだけではないのだ。そ  
れに彼がティア嬢より授かるはずの物が、何より祝辞となるう。

そう気持ちを切り替えると、ベルナは騎士たちに何度も剣を触れ合  
わされているアルに苦笑しつつ、ストロングヒルを後にした。

### 第三章：【6】（後書き）

次回のために補足しておきますと、叙任式とは

【見習いの期間を終えた少年達が騎士になる式】です。

叙任式に望める年齢は騎士団によってまちまちなのですが、一番早いのはアゼルの軍隊で15歳から叙任式に出る事が出来ます。

ケルディアは17歳で、アルベルトは20歳からです。この差は民の発育が関係しています。アゼルは15歳程度でも大人の体格をしているので、そうなった様です。

黒い狼では、本来少年の年齢は17歳になっていなければ叙任式を受けるとはできません。しかし戦争直前という事から緊急で14〜16の見習いでも叙任式を受けることができます。



### 第三章：【7】

騎士団の宿舎前の広場全体に降り注ぐ眩しいまでの朝の日差しは、まるで今日行われる叙任式に向けて見習いの騎士たちを励ますように輝いていた。

「アル、ちゃんと黒い狼の一員になれると思う？」

エレスは頬杖をつきながらクリフに尋ねた。アゼルへの派遣団の出發は今日の夕頃のため、「粗雑な馬鹿共」への書類をまとめるのも大詰めだ。エレスの目の前には丸まった羊紙皮がいくつも転がっている。

「だいじょうぶでしょう。叙任式といえど、そう難しいことではありません」

クリフは出窓の外を眺めていた。眼下では騎士たちが目的に向かって槍を突き出す訓練をつんでいた。主に武術を指導するユウヤが声を張り上げている。

せわしなく動かしていた手を止め、ため息交じりにエレスはクリフを見た。

「でも、あの一撃は効くわよ。私まだ覚えてる」

それを聞いて、クリフは控えめながらも噴出した。

「はは、そうですね。僕も、叙任式のことを思い出しただけで首の辺りが疼きます」

羽ペンの先からインクが滲み、慌ててエレスは羊紙皮を覗きこんだ。別にたいした支障はない事を確認すると、再び羽ペンをインク壺につけ書き始める。

「でも、まあ　アルもだいぶ成長したからね」

穏やかな空気が流れ、クリフは微笑んだ。

そのとき肝心の見習い騎士たちは　すでにブラック・ホーリング城の大広間で厳粛な雰囲気に含まれていた。

「……」

その中で、今日同じく叙任式を受ける同年代の少年達と共に、アルは緊張していた。赤い絨毯が敷かれた広間にはティABELとベルナ、そして叙任式に係する者しかいない。呼吸の音でさえも響く程の静寂の中、遂に叙任式が始まった。まずトランプットが高らかに鳴り響き、告ぐに黒い正装で身を包むベルナが合図の言葉を告げる。

「これより叙任式を始める。まず一同、前へ」

呼ばれて、アルは身震いしながら歩を進めた。黒い漆黒のドレスに映えるティABELの白い肌と可憐な顔立ちを一瞥しながら　その少女は自分の主君であることを心に刻みこむ。

これから騎士になる数人の少年が真横に並んだのを見届けると、ティABELはすつと全員の顔を眺め、そしてゆっくりと告示し始めた。

「……まず。もとより他の国の国民であつたあなた方が、我が黒い狼の叙任式を受ける覚悟を決めてくれたことに、心よりの感謝を告げます」

それを聞いて、アルは脳裏に白い羊のことが一瞬浮かんだが、すぐにその幻影は消え去つた。彼の心はすでに、黒い狼に向いているのだ。再び、確りとした決意の元にその力強い眼差しをティアベルへと向ける。

「他の国の叙任式では、本来ならば神に祈りを捧げます。しかし黒い狼の精神では、神などいない、と誓う事になっています」

アルはこの課題をすでに克服していて、何も動じることはなかった。あくまで気高く、誇り高く、胸を張る。

「アル・ライト」

不意に自分の名を呼ばれ、アルは少し驚いた。

「貴方は、神はいると思えますか？」

いつかエレスとクリフに聞かれた質問。あの時は、倒れてしまったアルだが、今はもうそのような気配は微塵もない。価値観の違いは、事実を知る事で乗り越える事ができたのだ。

「いないと思えます」

それを聞いたティアベルは穏やかに目を細め、前へ出るように合図した。アルは一步一步、絨毯を踏みしめるかのように主君の元へ近づく。彼の姿は黒い制服の上に鎧を纏い、剣と馬さえあればもう立

派な騎士だ。

ティアベルは傍のテーブルの上にかかっていた白い絹布を滑らかに取り、その下で出番を待ちわびていたモノを手に取った。

「これから貴方に授ける剣の名前は、デュランダルといいます」

思わず、アルは息を呑んだ。普通の剣の長さではない、明らかにロングソードの領域だ。さらに銀色に輝く刀身は、頑強そうにピンと張り詰め、柄と刀剣を繋ぐ部分には血のように赤い宝石が埋め込まれている。その柄は漆黒だ。

「この剣に込められた意味は、”決して折れない不滅の剣”です」

自分の剣が持てるだけでも嬉しいのに、名剣を授けてくれたティアベルに爛々と目を輝かせながら、アルはティアベルの前に跪いた。そしてティアベルは手に持った剣で慎重にアルの肩を一、二回たたき、その後剣をアルに授けた。

「……さあ」

細長いが本物の重量で、存在感を放つ名剣を両の手の平でそっと受け取り、アルはあまりの感動に言葉を紡げないでいた。このような名剣を自分が授かるということは、多大なる責任と期待を背負うことになる。しかし、それに負けずとも劣らない名誉と強さを手に入れることにもなる。

「素晴らしい武器は時として人を選びます。名剣に吞まれない様な、立派な騎士になりなさい」

静かな漣のような声に、アルは胸を強く打たれた。絶対に、この主

君を裏切ってはならない。そう思うと同時に、激しい熱情が心身を支配していく。

「……はい、命をかけても、貴方をお守りいたします」

それを聞き届けたティアベルは静かに頷き、ベルナに合図をした。体の芯から揺さぶられるような重厚なトランペットの低音を聞きながら、アルはベルナの膝元に頭を擡げた。騎士としての、この初々しい気持ちをいつまでも身に刻み込むように、主催騎士から首元へ強烈な一撃を入れるのだ。

ベルナはおもむろに手の平を固め、アルのうなじ目掛けて凄まじい手刀を入れた。

「あー!!」

目元がスパークし、激痛に奥歯を噛み締める。叩いたベルナでさえよるめくほどの一撃を首に受け、アルは一瞬息が止まった。噴出す汗をぬぐうことは失礼にあたると思い、そのまま腰に力を入れ立ち上がろうとするも、上手く足が動かない。

だめだ、倒れるな。

そう念じるも、ベルナの一撃はやすやすとアルを暗闇の中へと葬り去った……。

### 第三章：【7】（後書き）

首への一撃は痛そうですねえ…^^・笑”資料集めをしていて驚きました。

次からはアゼルへの旅が始まります。

## 第四章：それぞれの旅

アルは荷物を帆船に積み終え、海と空の境界線に美しい太陽が沈んでいくのを見た。空は全体に細切れの雲が伸び、それが夕陽で赤く染まり、海鳥が鳴きながら、頭上を通り過ぎていった。思わず、この世界の宝物は、この光景だろうと思う。

「よし。荷物は全部積んだな？」

閉じてあった帆を開き終えたベルナは、マストからヒョイと顔を出して言った。

積荷リストにチェックを入れていたヘンリー・ヒューが返事をする。

「はい。団長、全て積んであります。出発しましょう」

ヘンリーが羊紙皮を丸めながら、微笑んだ。甲板で、バーニー・カルロスが仲間たちと熱い抱擁を交わしていた。

「頑張れよ！絶対、粗雑な馬鹿共を仲間にしてこいよな」

仲間の一人が、”自分の分も”と熱情をカルロスに伝える。

「ああ。もちろんだ。俺に出来ないことなどない」

カルロスは薄ら笑いを浮かべながら仲間と握手をする。

「その息だ！」

アルは巨体のモヒカン男のどこからそのような自信が湧いてくるのか不思議だったが、勇ましい顔つきに背中に背負った長い槍を見て納得する。騎士にも関わらず槍を使う者は総じて実力のある者が多い。

「アル」

呼ばれ、振り返るとそこにはエレスとクリフが居た。クリフは格別普段と変わりなく笑顔を浮かべていたが、エレスのほうは膨れっ面になっていた。

「……どうしたんですか、エレスさん」

甲板の端までにじり寄り、極力港に居るエレスと話しやすい距離でアルは言う。エレスはアルの顔をじつと見て、すぐに目を反らしまた見るという仕草を繰り返していたが、ようやく言葉がまとまったのか、その口を開いた。

「粗雑な馬鹿共は、血気盛んな人たちの集まり。くれぐれも、殺されないように」

それを聞いたアルは、自らの身を案じてくれているエレスに嬉しくなり、思わず笑みがこぼれた。

「分かっています。エレスさんも、気をつけてください」

「……ああ」

俯くエレスを見て、別に今生の別れじゃないのに、とアルは思った。しかし、ふと　もしこれが彼女と交わす最後の言葉になるとした



ら。そんな考えが頭をよぎり、慌てて首をぶんぶん横に振る。

…そんなことが、あつてたまるか。

「出航だー！早く降りろ！」

騎士団じきじきに手配した帆船の乗組員が船と港を繋いでいた縄を解くと、途端に強風が吹き帆がはためく。甲板でカルロスと握手を交わしていた黒い騎士の一人が慌てて港へと飛び降り、それを見たカルロスが豪快な笑い声をあげた。

「じゃあなー！」

どんどん港から離れていき、カルロスとアルは互いに身を乗り出すようにして手を振り続けた。ベルナは操縦士とこれからの航海の行く末を話し合っている。ヘンリーは素早くブリッジの部分によじのぼり、双眼鏡を覗いている乗組員にいろいろ尋ねている。彼らは寸分も、自分達が粗雑な馬鹿共に殺されるとも思っていないらしく、港の仲間達にはあまり未練がないのだろう。

点の様に小さくなった港の人たちを見終えた後、アルは何をしようか迷った。カルロスは甲板の上であぐらをかくように座り込み、帯剣していた剣や槍を丁寧に磨き始めた。自分の世界に入ってしまったカルロスに話しかける訳にもいかず、アルも渋々甲板の上に腰を降ろし暮れ行く空を眺めた。

「何日程でアゼルに着く？」

ベルナは地図を覗き込みながら、操縦士に尋ねた。見るところ中年ほどの小太りの操縦士は帆船の操縦には長けていて、乗組員も優れているらしく、帆船はぐんぐん速度を増した。空は夕陽が沈みきり、一気に暗くなり始めていた。

「そうですね……ここから南東に下ったところにあるバトス港を指すと、早くて3日、遅くて5日程度でしょうか。しかしあの港周辺には盗賊まがいの連中も大勢居ますが……」

それを聞いたベルナは少し警戒する素振りをみせたが、一刻も猶予がないのを思い出しすぐに了解した。

「かまわない。一番早く着く経路で頼む」

「……分かりました」

操縦士は即座にマスト・ブリッジ・甲板にいる乗組員たちにその意思を伝え、帆船を風に乗せた。

「い、おい。起きろ」

「……ん」

アルは誰かにこづかれて目を覚ました。しかし何も見えない。それもそうだろう、明かりのない夜の海では、自分の周囲を確認するだけでも精一杯だ。

するとすぐ隣で何者かの気配を感じた。思わず帯剣したばかりの

デュランダルに手を伸ばすも、すぐにそれは信頼すべき相手だと気がつく。

「ヘンリー、何してるんだ？」

ヘンリーは片手にランプを翳していたから、アルは安心して彼の元へ近寄った。だいぶ目も慣れてきて、少し後ろにカルロスが居るのも確認する。

「……アル、見るよ」

そう言われて、アルは何の事かと思った。ヘンリーが指差しているのは、そうやら空のようだった。寝起きで甲板の木の板しか見ていなかったアルは、夜空を見上げて、思わず言葉を失った。

一面の星空が、アルの頭上に広がっていた。ケルディアでみるよりも、ずっと澄み切った夜空だ。アルは宝石よりも美しい聖なる輝きに目を奪われ、しばらく何も言葉を発せられなかった。真っ暗な漆黒の空に、無数の星がきらめいている。黄色な砂がキラキラと零れおち、穢れのない光となってアルたち一行の頭上に降り注ぐ。

それはヘンリーも同じのようで、その切れ長の目を輝かせて一心に空を見上げている。

「あれ、おおかみの星座だけ」

ふと、いつの間にか甲板に出てきていたユウヤが双眼鏡に目をくっつけながら言った。それを聞いて、アルは目を見開きながらその星座を探す。

「三つ、強い光を放つ星があるだろ？あれが目印だよ。あれの南東を見ていくと　星と星を繋ぐと小さな、犬みたいな形が浮かぶ星座がある」

「あっ！」

思わず、アルは声をあげた。指示されたとおりに視線をずらしていくと、本当に犬のような形の星があったのだ。星が、人間が思うように光るはずがない、しかし　見れば見るほど、星達は様々な形を作り光を海上に落とす。なんとも不思議で　美しい光景がそこにはあった。

「……綺麗だ」

ヘンリーは掠れたような声でそう呟いた。

困難が待ち受ける旅でも……感動するようなことはある。そう思っ  
て、アルは微笑んだ。

#### 第四章・それぞれの旅（後書き）

満点の星空……夏には風流ですよね。書きながら、すいかでも食べつつ星空観察しようかな……と思いました笑”

#### 第四章：【1】（前書き）

少々流血シーンがあります。苦手な方はご遠慮ください。

#### 第四章：【1】

幸いにも、天候に恵まれアル達を乗せた帆船は最短の3日で航海を終え、目的地であるバトス港に着いた。動物の毛皮で作った寝袋や、多量の乾パン、飲み物であるチュレルを擦り込んだ液体を入れた皮袋 などなど、様々な荷物を帆船から降ろすと、ベルナは船長にお金を払った。

「いい航海だった。礼を言う」

すると船長は気後れ気味に金を布袋へ収納して、帽子のツバを摘んで一礼をした。

「いいえ…しかし、気をつけてください。ここいらの盗賊は、本当に野蛮な連中ばかりです。私どもも数年前連中に襲われまして、リノへの物資を根こそぎ奪われました」

それを聞いたベルナは、苦悶の表情を浮かべ、地面に置いていた巨大な皮袋を持ち上げた。

「そうか…私はここ数年アゼルに帰ってきていないからな。そこまで状況が悪化しているとは、思いたくないが」

船長は盗賊を警戒しているのだろう、周りを見回した後、いそいそと乗組員に指令を出し、帆船を動かし始めた。

「では、また3日後の日が暮れるほどに伺います。そのときに旦那の姿が見えない場合は」

ゆつくりと動く帆船を見ながら、ベルナはくるりと帆船に背を向け歩き始めた。

「ただちにケルディアへ戻り、ティア嬢にその事を伝える」

ベルナにつられて、アルやユウヤ、そしてヘンリーとカルロスも歩き始める。それぞれが、帆船を降りた瞬間から険しい顔つきになっていた。特にアルの顔は緊張しきり、その指はもう既に愛剣の柄に添えられている。盗賊を警戒しているのだろう。

「……もつとも、私がティア嬢を残して死ぬ訳がないがな」

ぼそりと、ベルナが自信たつぷりの顔つきでそう呟いた。

バトス港には人気ひとけがなく、退廃した町並みだった。港に止まっている船で、稼動しているのは一隻も見当たらない。全て腐敗し、真つ二つに甲板が割れているか、プカプカと浮いているだけしかない。昔は恐らく活気があったのであろう、煉瓦や石垣で造られた家々は、整備されていない為ひび割れ、風化し、崩れかけている。

「ひつでえもんだな……」

カルロスが、街の一角に放置された荷車の中の小魚を突付く黒い鳥達を見ながらぼやいた。アルはおどろおどろしい街の風景にますますデュランダルを握り締める。

「しかし、人っ子一人いないとは……少しおかしくないかい？」



喉が渴いたのか、ヘンリーが薄い四角形型の容器の仰ぎ、液体に濡れた口をぬぐいながら言った。それを聞いたユウヤは鋭い目つきで左右の家々に視線を走らせる。

「  
」

次の瞬間、突然五人の足元に複数の矢が突き刺さった。思わず、条件反射でアルは一步下がった。すると両脇に聳え立つ家々の屋根から複数の黒い影が現れた。

「これはこれは 世にも悪名高い”黒い狼”の方々ではありませんか？」

その男は太陽の光を背に受け、完璧に全身を影に覆われていた。アルは目を細めながら、男の容姿を見定めようとした。簡単な木綿で出来た服装、剥き出しになった二の腕には腕輪が嵌めてある。腰から背にかけて布をねじる様にして吊るしてある。

「悪名高いとは人聞きが悪い。貴様らは、盗賊だな？」

ベルナは剣を引き抜きながら、全反射をする太陽に目を細めた。男はくつくつと笑うと、持っていた何かを持ち上げた。アルが、それを三日月型の弓矢だと認識した瞬間、今度は多量の弓矢が両脇から飛んできた。

「っ！」

アルは慌てて地面を蹴り、塩のこびりついた民家の壁に背を押し付けた。暑さだけではない、嫌な汗が背中を伝い落ちる。他の仲間を

探すも、皆姿がなかった。

「…光の照らす内から盗賊の住処に姿を現すとは、黒い狼は随分間抜けな獲物だな」

アルは自分のすぐ上の屋根から男の声が聞こえたので、思わず足が震えた。なにせ盗賊等という連中と、今まで一度も闘ったことがない。しかも相手は、弓矢の使い手だ。どう闘えばいいのか、一切検討がつかないため、アルは生唾を飲んだ。すぐ近くで物音がしたので、アルは思わず産毛が逆立った。横を見ると、そこには痩せた男が立っていた。動きやすそうな木綿の服は所々継ぎ接ぎで、目は血走っている。男は両手に握ったナイフを舌なめずりしながら、アルに近寄った。さらに、再び後ろから砂が擦れる音がして、二人目の盗賊が迫っていた。

「……………」

アルがデュランダルを構えると、盗賊たちは嘲るように笑った。

「随分と良い剣を持つてるんだな小僧…！高く売れるぜえ」

突如男はナイフを投げ、アルが素早くそれを避けると、その際に背後に居た他の盗賊がアルの胴体目掛けて蹴りを入れた。

「カハツ…！」

間近の殴り合いになれていないアルはその一撃をもろに腹部に喰らい、逆流した胃液を吐いた。さらに盗賊はにやつきながらアルの頬を殴り、ナイフをアルの首元に押し付け、意地汚い声で囁いた。

「残念だったな小僧：もう少し楽しめるかと思っていたけどよお…案外」

アルは朦朧とする意識の中で、愛剣の力強い柄を握り締めた。

「黒い狼つてのも、弱いんだな？」

瞬間、男の悲鳴が路地に響き渡った。緩んだナイフに、アルは素早く横転がりをして距離を保つ。瘦せた盗賊の腕を、一本の弓矢が貫いていた。

「うぐ…っ…あ、誰だ!？」

男は矢の棒部分を掴み、勢いよく引っこ抜いた。鮮血が乾いた土に滴り落ちる。未だ反応が鈍いアルは、走ってきた誰かに腕を捉えられそのまま走り始めた。慌ててアルが横を向くと、そこにはヘンリーの姿があった。

「ヘンリー…!？」

「喋るな、早く走れ！」

言われ、アルは短く息を吐き深く吸い込んだ。そして自分達が走り抜けた後の道筋にヒュンヒュンと弓が突き刺さるのを尻目に、家々の連なる道を抜け広場の様な場所に出た。

「今僕達を追ってきている敵の数はせいぜい五人、大部分はベルナ团长やユウヤ、カルロスが相手をしている。頭首らしき男もだ」

「じゃあ、オレ達は五人倒せばいいんだな!？」

頷いたヘンリーは急に振り向き、背に背負っていた矢筒から素早く矢を取り出し、弓の弦につがえた。そして力の限り引き絞り、追いかけてくる盗賊めがけて放った。

「ぎっ！」

盗賊の一人の首に矢が刺さり、倒れこむのが見えた。それに自信をつけたのか、ヘンリーは次々と矢を放った。盗賊たちはばたばたと倒れ、やがてアル達を追いかけてくるものは居なくなった。

「…………ふう」

安堵のため息をつくヘンリーを見て、アルは全く出番のなかった愛剣をおおずおと鞘に収めながら尋ねた。

「ど、どうして弓矢がそんなに上手いんだ？騎士団の練習では一回も弓矢の訓練なんかはないはずだろう？」

擦れた指先をみながら、ヘンリーは首を傾げて答えた。

「さあ？僕にも分からないな…………まさか、自分に弓矢の才能があったとはね」

不敵な笑みを浮かべるヘンリーを見て、アルはつくづくこの少年が自分の仲間でよかったと思っただ。

「さあ、団長達の加勢にいこう。もしかしたら、もう決着はついてるかもね」

そう言い、再び走り出したヘンリーをアルは慌てて追いかける。それにしても……予め通知されていたとはいえ、アゼル大陸に着いてすぐ襲われるとは。治安の悪さに呆然としながら、自分達がこれからしようとしている、”アゼルの盗賊の住処に乗り込む”という無謀な行為に気が遠くなった。

## 第四章：【2】

ベルナはふうと軽いため息をつく、足元に広がる血の海を見た。カルロスの周りに三十人程の男が倒れている。皆心臓や首を一突きされ、血がじわじわと流れ出している。相変わらずの残虐性と攻撃性にベルナはまたため息をついた。未だ興奮冷めやらぬカルロスは長い槍をぶんぶん振り回し、その勢いで背中へ戻すと、顔面に付着した血液を強引にぬぐった。

「相変わらず、お前は素晴らしい槍使いだな。カルロス」

ユウヤは退屈そうに足を地面に擦りつけながら、地面に下ろしていた皮袋を担いだ。カルロスは褒められた事で頬をゆるめながら自らも皮袋を持った。

「槍のぼうが、雑魚共を一蹴できるからな。今日は久しぶりに暴れた。気持ちよかったぜ」

それを聞いたベルナは降参したように手を挙げ、向こうから走ってくる人影に目をこらした。

「団長ー！」

「ヘンリーに、アルじゃないか」

ようやく集った五人に、ベルナは一安心しながら、ふとヘンリーが担いでいる弓筒に興味を示した。

「弓筒？どこでそんなものを入れた？」

するとヘンリーはああ、と相槌をうち答えた。

「これは盗賊の一人から奪いました。なかなか丈夫で鋭いようですから、これからの旅に役立つかと」

それを聞いたベルナは満足そうに腕を組み、一枚の黄ばんだ羊紙皮を取り出した。アルは見た事のないものに食いついた。

「それ、何ですか？あと、これからどうするんですか？」

ベルナは空を仰ぎ太陽の位置を確認しながら、地図を交互に見た。

「これは先ほどの盗賊から奪ったこちら周辺の地図だ。それに、殺す前にこの近くに馬車を貸してくれる所はあるかと聞き出しておいた。どうやらここを出てすぐの森を抜けたところに、こちらじゃ大きい方の街があるらしい。そこに向かう」

説明をされ、納得したアルは改めて血まみれの盗賊たちに吐き気がした。ここまで見事に心臓を一突きにされ死んだ者は見た事がない。カルロスという男の槍の腕前が、一線級であることを確認する。アゼルへ着いてすぐに襲われ、治安の悪さを思い知った一行であったが、それがまた良い緊張感を生みだしていた。

アゼル派遣団が出発した次の日

「しんっじられない！」

エレスは騎士団の本部で駄々をこねていた。自分が選ばれなかったことが未だにくすぶっているらしく、猛威を奮う台風の様に荒れる姉を、クリフはただにこやかに見つめていた。

「何で、団長とユウヤは分かるわよ！？カルロスも元々アゼルの”赤い闘牛”出身だし、ヘンリーもアルベルトの”青い九官鳥”の団員の息子だったっていうし。でも！なんでアルが！」

「僕に言われても分かりませんよ。それに姉さんもストロング・ヒルでのアルさんとテラーの死闘を見たでしょう？アルくんはなかなかの素質ですよ」

エレスは顔を真っ赤にしてわめいていたが、それを聞き反論の道を閉ざされたのか押し黙った。姉の意外な反応に拍子抜けしたクリフはポカンとしていたが、次に来客を告げるノックがドアから聞こえたので、すぐさまドアノブに手をかける。

「どなたでしょうか？」

「私です。開けてもらえないでしょうか？」

その声が、自らの主君であるクリストファー・ティアベルのものと瞬時で気がついたクリフは慌ててドアを開けた。エレスはドアの向こうにティアベルが居た事で、自分の荒れ模様を全て聞かれていたのかと思わず顔から火が出るほど恥ずかしくなったが、今はそんな場合でないと改めて向き直った。



「貴方様がじきじきに足をお運びになるとは　一体、どうなされたのでしょうか？ティア様」

それを聞いたティアベルは、軽く一礼をした後御付の者を下げらせ自分ひとりのみエレス達の部屋に足を踏み入れた。丁寧な仕草は、やはり元王族出身であった者の気品を漂わせる。

「……折り入って、お二人に頼みがあります」

重苦しい空気を察知してか、エレスとクリフは直にティアベルの足元に跪いた。帯剣した剣が床と擦れ金属音がした。

「このたび、五人の使者をアゼルへ使わせました。……しかし、仮に粗雑な馬鹿共の協力を得られたとしても、それだけでは白の羊には抵抗どころか恐らく、一矢も報えないでしょう……」

静かな空間に、戦争を匂わせる言葉が舞い、エレス達の上に沈殿した。床についた拳を握りしめ、エレスは下唇を噛んだ。絶対に、この主人を殺させてはならないのだ。それに、自分の父親は、連中によって殺された。元・ケルディア国王の配下であった軍隊から剣の発注もくる程の名門の鍛冶屋は、国王が暗殺されると共に何者かによって火をつけられ、職人であった父も殺された。犯人は、絶対的な証拠はないが、恐らく……ルドルフ・シュバイツァーだろう。

「そのため、あなた方二人にお願いがあります」

凜とした主人の声に、思わずエレスは顔を上げた。ティアベルは、少し眉を寄せ、肩を震わせながらも、確りと命じた。

「ミリ大陸へ、行ってもらえないでしょうか？」

#### 第四章：【3】

「ミ、ミリ大陸…？」

エレスは信じがたいといった表情で主人を見据えた。ティアベルはウエストや体のラインがぴったりと浮き出る深緑のドレスを着ていた。長い睫毛に縁取られた美しいオッドアイが、一心に眼下で驚愕するエレスとクリフを見据える。

「……そう。ミリ大陸です」

いつも笑顔であるクリフでさえ、目を見開きティアベルのドレスの裾を見ている。エレスはすぐに、何故自分とクリフがアゼルへの旅に選ばれなかったのかを理解した。そう、つまり、目の前の主君は、少しでもエルフの血が流れている自分達に、ミリへの旅を命じようとしたのだ。普通の人間が行くよりも、二分の一だけエルフの血が流れている自分達の方が、恐らくエルフに近づきやすい。

「……無理難題を言っているのは、分かっています。しかし、未知の力を持つとされるエルフを味方につけることが出来れば、我々の将来は安泰なのです」

「」

エレスは覚悟を決めた。主人の命令は絶対であり、自分にとってもそのように危険かつ重要である旅に派遣されることは名誉だ。クリフもまた同じ気持ちであるようで、瞳を透き通るような水色に輝かせた。それを見たティアベルは、生真面目な表情で言った。

「確か、貴方方の母方の父君、つまり 貴方方の祖父はエルフ  
…だと聞いています」

エレスは脳裏に”黒のすみか”で細々と暮らしている母親の事を  
思った。エルフなため、耳は少し尖りこの世の者とは思えない儂げ  
で美しい容姿をしている。深い森の奥で育った為、色素の薄い、少  
々濡れた様に光る白に近いブロンドの髪。触れば吸い付く様に滑ら  
かである白磁の様な肌。流線型に流れる魅惑的なジエイブルーの瞳  
はどこか翳りがあり、ふつくらとした唇。そこまで思い出して、主  
人の質問に答えようとエレスは口を開いた。

「…はい。祖父がエルフであると母のエリスから聞いたことが  
あります。そして祖父はエルフの長であるとも」

それを聞いたティアベルは息を詰まらせる様にして一歩下がった。  
まさかエレスとクリフがそこまでエルフに近い人種であるとは思わ  
なかったのだらう。しかし、再び気を取り直したのか確りとした語  
調で告げた。

「…そうですか。ならばなお更好都合です。孫であるあなた方の  
頼みならば」

それは普通であれば至極当然のことであつた。老人が自らの孫を  
可愛がる、人間であれば誰もが体験するであろう事柄だったが、そ  
れを聞いたエレスは顔を顰めた。

「…母は、一族から追放された身です。一族の掟を破り、神聖な  
エルフが、汚らわしく脆弱な人間を好いてしまった。さらにその子  
も身籠ってしまった。それを知った祖父は、激怒し秘術を使い母を

森から追放したと」

さらにクリフが続けて言った。

「…さすがに娘だったからでしょう。母は殺されはしませんでしたが、そのときに、祖父が母に忠告をしたらしいです。”二度と戻ってきてはならない。もしこの後お前の血を継ぐ者がこの森に侵入することがあれば、我々はその者の命を奪うだろう”…と」

重苦しい空気が部屋に充満し、ティアベルは不意に目線を落とした。前髪が自然にはらりと舞い、目元を影にする。16歳の少女は、その脳みそをフル回転させその場の状況に一番ふさわしい言葉を紡ごうとした。

「…そうですか。…そのような事情があるのでしたら、あなた方を使わせることは」

「お待ちください！」

エレスは必死に声を張り上げた。部屋から退出しようとするのにエレス達に背を向けていたティアベルは、大きな叫び声に振り向いた。

「どうしたのです？」

立ち上がったエレスは、多大なる決意を秘めた青い瞳で主人を見据えた。さすがは双子、クリフも同じように主人を見据えていた。

「大丈夫です。ミリ大陸へは、我々を行かせてください」

これから言おうとして事を先に弟に言われてしまったエレスはきよ

とんとし、隣のいいとこ取りをしたクリフを怨めしそうにに睨んだ。

「……しかし、貴方は、ほぼ確実に殺されるのですよ？」

忠実な騎士たちを、わざわざ殺される為に派遣をしたくないティアベルは、彼らを引き下からせようとわざと脅迫めいたことを告げた。しかしそれを聞いたエレスは臆することなく、それどころか俄然勢いを増して叫んだ。

「かまいません。主君の為に死ぬるのなら本望です。それに、エルフの術に対抗できるのはエルフしかいません。私はあまり術を使えませんが 弟：クリフなら多少の術を使えます」

ティアベルは思わず、また目を反らした。出来るなら、彼らには絶対に行かせたくない。しかし、他に危険度の高いこの旅に使わせることが出来るような人材は居ない。仮に、エレスとクリフを派遣すると、黒い狼の幹部は一人もリノの島から居なくなってしまう。もしもその際に、白の羊の連中が責めてくることがあれば？

(いや。恐らく、それはない)

ティアベルは表情を曇らせた。白の羊は期限や条約ごとに律儀な面を見せるので、約束を破り、満月の日よりも前に責めてくる可能性は少ない。仮にそのようなことをすれば、隣国のアルベルト王国に警戒心をもたれてしまう。軽率な行動は控えるべきだ……。

様々な事を考え、そしてティアベルはひとつの結論を出した。振り返り、未だ自らを懇願する様な目つきで見る二人の騎士を見た。しっかりとした顔つきである、やはりこの二人は自分を信頼してくれているのだ。いや、しかしそれだけで 自ら命を落とすような

旅に出たいというだろうか？

「どうして、そこまでの覚悟を決められるのです？」

主人の問いに、先ほどと同じ事を返そうとしたエレスであったが、不意にそれは本音ではないと気がついた。確かにこの少女　主君を信頼しているのもある。しかしそれよりも、父を殺した”黒い狼”に復讐したいのだ。なんとしても。

「…私怨しえん、でしょうか」

それを聞いたエレスは、満足そうに口角を上げた。ようやく騎士たちの本心を聞けたのだ。私怨、それだけで理由は十分だった。

「分かりました。ミリへの旅は貴方方二人と、従者4人で組んだ派遣団へさせます。至急旅への用意をするように」

それを聞いた二人は、互いに顔を見合わせてしっかりと頷いた。

#### 第四章：【3】（後書き）

エルフですよ、エルフ。次回からはエレスたちとアルたちの旅二つの方向で書きたいと思います。しかしプロットを見るにまだまだ続くんですよ…笑”恐なるべく夏休みのうちに終わらせたいですが……（^^;）出来るだけ更新やっていきますので、ではでは。

#### 第四章：【4】

比較的浅い森を抜け、街で駄賃馬を借りた一行は文句一つも漏らすことなくその日の夜には粗雑な馬鹿共のすみかがあると言われるステイプ峠の麓にたどり着いた。あまりにも旅が順調なため、团长であるベルナでさえ拍子抜けしたほどだ。乾燥した赤茶色の地面に所々落ちた木の枝を拾いながら、アルは高く聳え立つステイプ山を見た。尖り、暮れ行く空に突き出した峰は、まるで侵入者を拒むかのような威圧感を放っている。

「……あれを、明日越えるのか……」

木のとんかちでクイを打ち込んでいたユウヤが、チラリとアルを見た。腕一杯に焚き火様の木の枝を抱えたその姿をみて、再びとんかちを動かし始める。どうやら仕事をさぼっていないか確認したただけのようだった。

「アル、すまないがこの容器に水を汲んできてくれないか？」

夕食の準備をしていたヘンリーは、そういつて箱状になった金属製の容器をアルに突き出した。

「わかった」

受け取りながら、アルはふと、水などどこにあるのかと思った。辺りを見回しても、明日入る予定の林の入り口があるだけだ。細い木々が、かさかさとした風で音をたてた。

「……………」



ばさついた土を踏みしめながら、アルはひたすら水の気配を探していた。容器はかなり大きい、湧き水などでは足りないかもしれない。林に生えた木々は白っぽくひび割れ、枯れた様だった。暑い時期にも関わらず痩せこけた林中に、アルは不安になった。こんなところで、人が生きていけるのだろうか？

ふと、アルは傾斜のついた、少しくぼ地になり枯葉が溜まっている場所に降りてみた。微かに水が流れる音と、湿った匂いがする。降り積もった枯葉の上を慎重に歩いてみて、不意に足の裏に何か硬い感触を感じた。慌ててその場所を退き、枯葉を手で掻き分けてみる。するとそこには木の板があった。明らかに人工的に丸く削つてある為、アルはすぐに何らかの”フタ”であると感づいた。それを退けてみると……そこには、かなりの透明度を誇る湧き水が溜まっていた。指先をつけてみるも、ひんやりとして気持ちが良い。思わず、アルは水溜りの中に顔を突っ込んだ。日が暮れても暑い気温の中で、すっかり体中が火照ってしまったのだ。毛穴の奥まで染みこむ様な鋭い冷たさを感じて、アルは両目を硬く瞑った。しんみりとした、冷涼な空気が顔の表面をなぞり、瞼が心地よさに震えた。

「っぶはあー！」

手で顔をぬぐいながら、アルはもう一度水溜りを覗き込んだ。そこには相変わらず底の地面まで見える凜とした水面があった。思わず嬉しくなり、頬が緩む。

(誰か知らないけど、感謝するよ)

早速容器を取り出し、水を汲もうとしたその瞬間。枯葉が激しく擦れる音がした。背筋が凍りついたかのようにアルは体中から血の気が引くのを感じた。

「誰だ!？」

子供の声が出て、素早くアルが振り返るとそこには頭に布を巻いた子供が立っていた。凄まじい形相でアルを睨み、その手にはナイフが握られている。

「ま、待てよ」

およそ子供には不相应な武器に慌てたアルは、急いで立ち上がりながら制した。子供は暫しアルを最大限に警戒する素振りを見せた後、ようやくナイフの刃先を折り腰に収めると、軽やかに飛び枯葉の絨毯の上に着地した。

「あんた、誰だよ？」

思いがけず話しかけられたので、アルはギクリとしながら答えた。

「世界を旅してるんだ……それで、水がなくなっちゃって」

粗末なバケツに水を一杯汲み終わると、子供は興味津々とはかりにアルを見た。アルは理知的で、意思の強そうな瞳に見つめられ、ますます背中に嫌な汗が流れるのを感じた。まっすぐに、何のためらいもなく自らを見据えてくる子供に、嘘をついていることが、見透

かされそうだ。

「…そうか、ならいいよ。この水飲んでも。困ってる人を助けるのは当たり前前の事だって、ゼノスさんが言ってたもんね」

「？」

子供はそういい、最後にアルをしげしげとみて、仏頂面をすると林の奥へと消えていった。空中にゆったりと舞う枯葉を見ながら、アルはしばらく呆然としていたが、はたと気がついた。全く、”黒い狼”だと気がつかれなかった…：…もしま、先ほどの子供は、粗雑な馬鹿共の一員ではなかったのかもしれない。そう思い、アルは容器を抱え再びベルナ達のキャンプへと戻った。

「あーようやく戻ってきた！」

ヘンリーは焚き火の前で、待ちくたびれたとばかりに叫んだ。

「もちろん、良い水を汲んできたんだろうね？」

無理やり水を確認しようとするヘンリーに容器を押し付け、アルは倒木に腰掛けた。隣には紅い瞳に揺れる火の粉を映し呆けているベルナがいた。

「…団長？」

アルが恐る恐る話しかけると、ベルナは目を瞬かせ、おずおずとアルの方を向いた。

「ん？」

「…考え事をなさっているときにすいません、お話したいことがあります。…先ほど、林の中に水を汲みに行ったとき、一人の子供に会いました」

それを聞いたベルナは、真剣な顔つきになった。焚き火の周りでは、巨大な鉄鍋に清潔な水を入れその中に様々な具を投入したヘンリーがじつくりとお玉で液体をかき混ぜている最中だった。ユウヤはテントの中で眠っているらしく、カルロスは切り株の上に座り、その肩に紅い鳥を乗っけながらひたすら腹が減ったと喚いている。

「…粗雑な馬鹿共の仲間だな」

ベルナは確りといった。アルは子供の眼差しを思い出した。あの芯の強そうな瞳。あれは、強い悲しみを乗り越えた者でしか持ち得ない。どこかで見た事のある眼だった。

「しかし、黒い狼の存在をしらないとは　あえて教えていないのか？」

「分かりません、かなりの小さな子供でしたから。あえてオレに触れず、仲間に報告しにいったのかもしれない」

それを聞き、ベルナはすつと耳をすました。風の音と、林の葉が擦れる音しかない。特に慌てる様子もなく、ベルナはあぐらをかくようにして足を組んだ。

「……しかし、何があるかと私達が動くことはありえない。例えその子供が、粗雑な馬鹿共であったとしても、彼らは貴族しか襲わな

いという掟を決めている。何もしない限り、我々が襲われることはない」

それを聞いて、アルはようやく強張っていた全身の力を抜いた。空を見上げてみると、薄暗く、夜に入ることを示していた。戦争前とは思えないゆったりとした穏やかな時間の流れに、アルは臉が重くなるのを感じた。項垂れる様にして、少しばかり安心してみる。

周りには、頼れる騎士達が居て。自分は彼らの仲間であって。

その様な環境に、アルの心は先ほどの湧き水の様に澄み切っていくのであった。

やがて香ばしい匂いに眼を覚ましたアルは、食事を取りながら談笑した。男五人で（むさくるしい）、静寂に包まれた夜の林の中で野宿という状況であるが、本当の仲間の居なかったアルにとって、その何の変哲もないひと時はこの上なく新鮮であった。小麦粉を小さく米粒状にしたもののうえに、皮袋に入れていた獣の肉、野菜、スパイス、林でとった山菜などをふんだんに盛り込んだ料理は、ヘンリーいわくアルベルトのふるさとの味”カレー”というものらしい。

「うめえー！」

よほど腹が空いていたのだろう、涙目になりながら、カルロスはガツガツとカレーを胃の中へかきこんでいた。それを怪訝そうに横目でみながら、ユウヤも食欲をそそる辛そうな匂いを放つカレーを口に運んでいる。ベルナがカレーに入っている得体の知れない山菜をしげしげと眺めながら言った。

「これはなんだ？」

ヘンリーは自慢の料理が好評である事に機嫌をよくしながら答えた。

「食べれる山菜です。気にしないでください」

「どわー！」

急に大声をあげたカルロスにユウヤが遂に切れた。

「うるさい！なんだってんだ！」

凄んだユウヤに、さすがのカルロスも少し怯えたような表情をしながら、持っているスプーンを見せた。ユウヤは細めた眼でスプーンの先に乗っている物体に目をこらした。

「……………」

それは、足らしきものと、ひげらしきものと。土の中に住んでいる、甲殻類の一種だった。

「……………」

固まったユウヤに、カルロスはわざとスプーンを近づけた。次の瞬間、ユウヤは剣を抜いた。

「て、てめえ…！二度と、その気持ち悪いの、俺に絶対近づけるなよ…！」

腕を切り付けられもがくカルロスに、完全に切れたユウヤが囁いた。

ヘンリーはいつの間に、と呟きながらスプーンの上の物体を地面に捨てた。その騒動を見ながら、ベルナはやれやれとばかりにスプーンを二人の方へ向けた。

「君達、明日は大事な交渉があるんだから、余計な体力を使っんじやない」

ベルナに注意され、ユウヤは渋々カルロスの上から退いたが、その後夕食中隣のカルロスを睨み続けていた。カルロスはそんなユウヤの視線を知ってか知らずか、カリリーを一口食べては能天気な笑い声をあげ続けた。

そんな騒がしい夜をすごしながら　　アルは満たされていく胃と心に自然と笑みがこぼれていた。

第四章：【4】（後書き）

ユウヤは昆虫が苦手みたいです”ねー笑” 男五人はなかなか書きにくかったですけど、こんな風に馬鹿騒ぎしてるような気がしたので書いてみました^^；  
五人は仲がいいみたいです。



#### 第四章：【5】

翌朝、まだ朝もやがかかっている林の中を、アル達は進んでいた。いつ粗雑な馬鹿共が現れるとも分からない状況下で、アルはグツと拳を握り締めた。

(……いつ出てこようとかまわない。時間の問題だ)

ようやく一番高いスティープ峠を昇りきり、後は下り坂になった。林の中はまるで人の気配がなく、逆にあらゆる生物が気配を隠しているようだった。かさついた木々や岩肌、崖、海が近いせいかほんのりと潮の匂いが漂う。アルはふと、昨日の子供を思い出していた。

おそらく、あの子供は。

皮製の靴を見ながら、自分も随分身分が上がったものと自嘲する。ほんの少し前まで、差別を受けていた身分だというのに、今は大事な交渉にも携わっている。黒い狼は自分を信用してくれているが、未だに、どこかでそれを疑う自分が居た。

「……」

子供の、険しい目つき。他人を疑い、親族以外は全く信用しない鋭い眼光。どこかで見たことがあると思ったあの目は、昔の……自分だった。

母親しか、自分を愛する者はいなかった。自分はそれだけで十分だったが、あの子供は。

歩きながら、目を閉じてみる。もしかしたら、あの子供と闘わなくてはいけなくなるかもしれない。粗雑な馬鹿共の仲間だとしたら。ベルナは何もしなければ向かってくる事はないと言った。しかし自分達は”交渉”をするではないか、”何か”をするには十分な理由だ。

「止まれ」

気がつくと、一行の頭上には弓を構える男が居た。服装からして恐らく盗賊だろう。そして、この山を統治する盗賊は。男は頭に布を巻いていた。そして布に刺繍された花の模様を見て、アルは目を見開いた。昨日の子供と同じ花の刺繍だ。

「何の用だ？許可もなしにこれより先に進む事は出来ない！」

男は弓をぎりぎり絞りながら、アル達に尋ねた。前日の盗賊共と同じなのか、そう思ったアルは失望しながら剣に手をかけた。しかしベルナはアルを制し、遙か頭上の男を見上げながら、丁寧に礼をした。

「突然の訪問、失礼する。我々は”黒い狼”からの使いのものだ。機密事項より、今は事情を話す事が出来ない。大変、無礼である事は承知の上だ。貴方方の頭に会わせて貰えないだろうか？」

それを聞いた男は、顔を歪ませ弦につがえた矢を引くのをやめた。そして素早く木の上から飛び降りると、ベルナの前に立ち塞がった。

「……分かった。ついてこい」

ふっと、自信たっぷりの笑みを浮かべたベルナは、細身の男の後を

確りとした足取りでついていった。

切り立った崖の上、背後は深い谷底という下手をしたら袋小路の状況になる危険な場所に、粗雑な馬鹿共のアジトはあった。煉瓦で出来た家々が連なり、小さな集団、ちよつとした村を作っている。それもそうだろう、彼らはここで暮らし、家族の様に深い絆で結ばれている連中だ。高台の淵で少しばかり転寝をしていた子供が、慌てて体を起こした。林の中から、仲間と五人の黒い男が現れたのだ。頭首に事を知らせようと、素足のまま駆け出すが、すぐに立ち止まった。なぜなら、すでに頭首が表に出てきていたからだ。

「ゼノスさん……」

ゼノスと呼ばれた男は、子供の目線まで自分の目線を下ろし、にっこりと微笑んだ。

「セス、お前家の中に入ってるよ」

促されるように、セスと呼ばれた子供は頭をくしゃりと撫でられた後その場を去った。それを見届けたゼノスは、立ち上がり、高台から丸見えの五人を眺めた。硬い髪質なのか、艶のある橙色の髪は逆立っている。男らしい荒削りな茶色の眉に、確りとした輪郭。その顔には小さな傷を含め無数の切り傷がある。その目は純粹な輝きを失わずに、ひたすら自身の正義を貫くゼノスの心を端的に表してい

た。

「…ベルナ・オルゲン……」

いかにも、ゲリラ戦や都市での闘いに慣れていそうな、鋼でありながらもしなやかな肉体を跳躍させ、ゼノスは高台からそのまま五人の前に降り立った。思わず、ユウヤやカルロスが武器に手を伸ばすも、ベルナは止めると目で合図をし、あくまで淡々とゼノスを見据えた。

「久しぶりだな。ゼノス・バイファル」

無礼なベルナへと即座に盗賊の男が弓矢を向けたのをゼノスは止めた。お互い、まだ武力行使をする気は毛頭ないらしい。アルはどこか、ゼノスとベルナは出で立ちが似ていると思った。真に実力のある者でしか出せない、落ち着いた振る舞い。渴いた空気が吹き抜け、二人の髪を揺らした。

「ああ、5年ぶり、くらいか？……それで、どうだ？わざわざ紅い闘牛の副団長という地位を捨ててまで入った黒い狼は」

挑発する素振りではなく、ただ単に現実を告げる口調でそう言ったゼノスに、ベルナは薄ら笑いを浮かべた。それを聞いたアルは驚いた。二人は知り合い。そして、ベルナは紅い闘牛の副団長だった男。同時に二つの情報を得て、アルはますます二人の動向を固唾を呑んで見守る。

「はは、わざわざ聞かなくても分かるだろう。居心地が悪かったら即座にアゼルへ戻ってきているさ。黒い狼の団員は皆自分の行動に信念を持っている連中ばかりだ」

リーダー同士の会話を、ただじつと見つめるしかない部下達は互いに牽制しあっていた。アルは粗雑な馬鹿共のアジトの入り口で剣や弓を掲げこちらを静止している男達を見た。どれも皆、腑抜けた表情をしている者はいない、皆生死をかけた戦いを生き抜いてきた兵ばかりだ。それを聞いたゼノスが拳を握り締め、上腕筋が隆起した。

「そうか、なら良かった。それで、何の様だ。率直に言ってもらおうか、回りくどいのは嫌いなんだ」

いきなり口調が冷たくなったのと、他人行儀になった事に、アルは思わずベルナの背中を見た。それを聞いたベルナは、なんら変わった様子はなく、静かに丸まった羊紙皮を取り出し、閉じていた紐を解いてその中身を読み上げた。

「今日、我々<sup>こんにち</sup>”黒い狼”はアゼル大陸一の夜盗集団、”粗雑な馬鹿共”に正式な軍事援助を請求する。目的はケルディア王国直屬部隊”白い羊”への対抗、及び軍事的対立だ」

そして羊紙皮をくるくると紐で結び、ゼノスの手の平へ受け渡すと、ベルナは一步下がった。アルはその場の雰囲気がとても早い速度で緊張していくのを感じた。

「回りくどいのは嫌いなんだろう？ならば簡潔に必要な要件のみを告げさせて頂いた」

その様子を見ながら、ゼノスは口をへの字に曲げてベルナを見た。

「……本気で、言っているのか？」

遠くで聞いていた粗雑な馬鹿共も、何の事かさっぱり分からないと言った風に開いた口を塞げていない。

「もちろん、本気だ」

ベルナは口角を上げ、しかし真摯な態度でゼノスを見た。その態度を見たゼノスは、口元を歪め、その目に薄ら笑いを浮かべるベルナを映した後、静かに俯いた。

「……最悪だぜ」

小さな声で呟かれたそれを、聞き逃さなかったベルナは、眉を潜めた。次にゼノスが顔を上げた瞬間、ベルナは息を呑んだ。ゼノスの目が、微かに光っていたからだ。

「実はというと俺、今の瞬間まであんたを尊敬してたんだぜ。国家という組織から離脱しわざわざ悪に染まった男だとな。反逆者だと汚名を着せられてまで、操り人形を止め、自分の意思で動く人間”になった。ずっと前から、何度も俺たちを取り締まりにきた軍隊の連中の中で、あんただけはまともだったからな。俺は、俺の理想は！あんただだったんだ……！なのに」

そのままくるとベルナ達に背を向けると、ゼノスはギリリと背後のベルナを睨んだ。

「なのに、あんたはこのざまだ。結局、国家同士の権力争いの戦いに巻き込まれて、操られてるだけじゃねえか……話にならない。昔のあんたならいざしらず、今のあんたには何を頼まれても、無理だな」

尊敬するベルナを貶され、頭に血が昇ったアルが叫ぼうとするも、それよりも先にベルナが口を開いた。

「……私は昔も今も変わっていない。自分が正しいと思う事を実行するのみだ。それで ええ、ゼノス・バイファル。本当の理由を言え。君は……怖いだけだろう？」

それを聞いたゼノスは、ピタリと歩みを止めた。そして歯を食い縛りながら徐々にベルナへと首を回す。その手に握られた羊紙皮がぐしゃりと潰れた。

「なんだと……」

怒りにその薄茶色の目が染まるのを確認したベルナは、予定道理に事が運ぶ事に薄ら笑いを止められていない。

「そうだろう？君はケルディアという国家が怖いんだ」

ゼノスは振り返り、続きを言わせないとばかりにベルナに向かって吼えた。

「何を勝手な事を！俺たちに何の利益もない同盟など ……！」

そこまで言っつて、ゼノスはハツとした。ベルナは目を見開くゼノスを見て、ほくそえんだ。

「それが君の本心だ。」利益”や”金”で物事を判断する。自らに有利な事でないとは行動しない。それと…国家と何が違うというのだ？」

ゼノスは足の指全体を広げ地面をねじり潰すかのように足首に力を入れた。くしゃくしゃになった羊紙皮をその場で投げ捨て、指をこきりと鳴らす。

「貴様：俺を挑発しているのか？」

一触即発の険悪な雰囲気、それぞれの部下も全員戦闘体制に入る。アルも愛剣の柄を目一杯に握りながら、どうしてベルナはゼノスが怒るような事をわざわざ言うのか理解できないでいた。

「挑発ではない、事実だ。粗雑な馬鹿共は善悪で物事を判断する連中だと聞いていたのだがな。それに私の今の主人は悪ではない、列記とした善だ！」

ベルナはぐんと力強く叫んだ。鼓膜を叩かれる様に、まるで自分の考えを根底から覆す様なベルナの揺さぶりに、ゼノスはぐっと堪えた。

「……黒い狼が、善だと？そんなこと」

剣の柄に指を絡ませながら、ベルナは打ち震えるゼノスを睨んだ。

「どうしてだ？君が真実を知っているわけではないだろう。どうして、自分の見たもの以外を信じられる？所詮君も、国家に操られるだけに過ぎない。他の大多数の貴族とも変わらない」

「違う！」

ゼノスはぶんと横に手を振り、鋭い百獣の王の様な、獲物を仕留めるその目でベルナを睨みつけた。さすがにアゼルの夜盗の頭首だ、



少々のゆさぶりでは崩れない。

「俺たちは、正義だ！ぬくぬくと、温室育ちの貴族の奴らと一緒にするな！」

そしてゼノスは一步踏み出し、勢いよくベルナの首根っこを掴んだ。思わず、その場の全員が臨戦態勢へ入ろうとするが、二人の様子がおかしい事に気がつく。

「なあ……俺たちが 貴族の連中と違うのは、あんたが一番知ってるはずだろう！？ベルナ！」

ゼノスは目を見開き、何度もベルナを揺さぶりながら、腹の底から声を出した。ベルナは目を細めると、自らの襟元を掴むゼノスの手の甲に自分の手の平を乗せた。

「……知っているとも。だからこそ」

そのまま手を握り締め、下ろすと、怒り狂うゼノスを諭すかのよう  
にベルナは静かに告げた。

「貴族共の卑劣さを知っている君達だからこそ、我々に協力してもらいたいのだ。……そして我らと共に真実を知れ。そして何が善悪なのかを知れ」

ベルナの言葉に、その場が静まり返った。粗雑な馬鹿共のアジトの前で様子を見ていた夜盗の一人が、ずんずんと巨体を揺らしながら近づいてきた。その肩には巨大な斧が抱えられている。

「ベルナさん そこまでにしとけよなあ？」

樽のような体をしたひげ男は、身長の高いベルナと同じぐらいの目線で睨みあった。鼻と鼻がぶつかりそうな程の距離でお互いに見合っているにも関わらず、ベルナは涼しそうに双方の目を細めた。

「久方ぶりだな、グリム。子供は生まれたか？」

まるで親しいものとの会話のようなベルナの言葉に、グリムはカット顔を赤くした。担いでいた巨大な斧を振り下ろそうと太い腕に力を入れるも、それはゼノスによって止められた。

「よせ。俺たちは夜盗だ。昼間の間は、戦わない」

力強くつかまれた二の腕を見ながら、グリムは丸っこい鼻を鳴らし、ベルナを睨みつつ下がった。ずんずんと前屈みのままアジトに戻っていく姿は、勇ましいゴリラという言葉が相応しい。

部下が定位置に戻ったのを見届け、改めてゼノスは憎悪と軽蔑の混じった眼差しをベルナに向けた。

「へっ。人を上手く言いくるめるのは昔から得意だよな、あんた」

ゼノスは準備運動とばかりに腕を回した。それを見て、ベルナは一瞬押される様に足を後方へずらした。ピンと張り詰めた糸が軋むように、その場の空気も張り詰める。

「善悪なんてものはなあ……そう簡単に語れるもんじゃねえ」

最後に首を鳴らし、ゼノスはくつと笑った。リーダー同士の話し合

いが決裂した場合、勝敗を決めるのは部下の戦いだ。アルはぐつと奥歯を噛み締めた。

「何が”悪”で、何が”善”かなんて事は、個人の問題だ。能書きで決められることじゃない！」

それが合図かのように、粗雑な馬鹿共の男達が人の波のように一気にアル達の方へなだれ込んできた。交渉が決裂したのを悟ったベルナは自らも剣を抜いた。瞬間的に、数十人の夜盗に取り囲まれ、五人の騎士は互いに背を押し付けるようにして一箇所に固まった。

「く……っ！」

今まで自分を見下していたベルナが、必死に脳を回転させどう形勢を逆転しようか考えている。その様子を心底面白そうに見ながら、ゼノスは五人に近づいた。

「ふん……紅い闘牛の時の癖が抜けてないのか？誰もが自分に従いついてくる、そう思ってたんだろう？だからたった五人で、わざわざアジトへ乗り込んできた。例え相手が自分達を殺そうとしても、何のメリットもないから大丈夫……」

そこまで言つて、ゼノスは胸糞悪いとばかりに地面に唾を吐いた。乾燥した大地に、ねばついた透明な液体が付着する。

「残念だったな……お前らをひとつとらえて起きるメリットならいくらかもあるぜ。このまま軍隊に差し出しても報奨金が貰えるはずだ。なにせ、軍部の連中は”白の羊”と密接にくっついてるって話だ。白の羊が毛嫌いしているお前らを紅い闘牛に差し出し、連中はお前らをケルディアに差し出す。無駄な血は流れず、事は万事終了って

訳だ」

それを聞いたカルロスは、いきり立った猛牛の様に槍を地面に突き刺した。思わず、全員が息を詰まらせる。モヒカン男から流れ出る殺意は凄まじいものがあった。

「黙れよ 俺たちが捕まったら、リノの島民はどうなる!? ティア様は! 無駄な血が流れないだと……ふざけんじゃねえ! ケルディアのやる事だ、皆、虐殺に決まってるだろうが!」

それを聞いたゼノスは目の下を引き攣らせながら笑った。

「何を…そんな事するかよ。あの白の羊のことだ、せいぜい捕虜

」

「てめえ!」

現状が分かっていないゼノスに、カルロスは猛り狂った。

「よせ、カルロス」

カルロスはわなわなと拳を震えさせながら、ベルナを睨んだ。目は充血し、歯はかみ合っていない。

「どうやら、仲間にはなってもらえないらしいな……こうなった以上、我々がすることは一つだ」

ベルナは剣を掲げ、真上の太陽を見上げた。

「誇り高き黒の魂、恥じる事なき名誉の死、たぎる血脈は途絶える

ことなく」

それを聞いた黒の騎士全員がハツとした様に表情を強張らせた。ア  
ルはふつつと湧き出る熱い闘志に身震いしていた。合言葉という  
という事は 。五つの黒い塊が、あっという間に大勢の人の波に  
飲み込まれた。

第四章：【6】 1

巨木の根元に、五人の男が括り付けられていた。自慢の漆黒の制服は泥まみれで、顔は殴られたため腫れている。立ち込めていた深い霧も消え、薄っすらと朝の光が出てき始めた頃、アルはようやく目を覚ました。

「…っ！」

意識が戻った途端、体中に走った鈍い痛みで顔を歪める。手首を縄で拘束されていることに気づき、啞然とする。昨日おきた出来事を思い出そうとするも、痛覚ばかりが脳にいきなかなか思考は覚醒しない。

『アル、アル』

ふと、隣から囁く声がして、アルはおぼろげな思考のまま声の方を向いた。そこには見事に顔面が腫れているヘンリーがいた。目の上は切れ、頬は所々内出血を起し青くなっている。昨日までのヘンリーの美しい顔を思い、アルは思わず吹き出した。その様子を見たヘンリーは怪訝そうに眉を潜めて言った。

『……失礼な奴だな。君って人は』

『…っ、ごめん。でも…ひどいな、その顔』

涼しげではつちり二重だったヘンリーの目元を思い出し、今の顔を見て、アルはまた控えめに噴出す。笑うと腹筋に小刻みな振動が来て、その痛みのためアルは笑うのを止めた。

『そういう君だって相当ひどいぞ』

ヘンリーに刺々しく言われ、アルは思わず息を止めた。美しいヘンリーがこの様だ。自分は一体どのような顔になっているのか……。

おぞましくなり、何度も顔を左右に振る。そのおかげで脳がどうか覚醒し、ようやく自分の今の状態を確認しようという気になった。背中に硬い感触を感じ、真上を見上げると、深緑の葉が垂れ下がりがかさかさとして揺れている。瞬時にアルは自身と仲間が木にくくりつけられていることを察知した。ベルナヤカルロス、ユウヤがちゃんと生きているのは確認したいのだが、ちょうど幹が背を固定して身動きが取れない。それに体に相当ダメージが来ているようで、少し動くたびにアルは顔を顰めた。

これから自分達はどうなるのか、やはり昨日ゼノスが言っていたように紅い闘牛に差し出されるのだろうか。アルは様々な考えを巡らせたが、突如鳴り響いた轟音によってそれは遮断された。馬の嘶きと悲鳴が響き渡る。驚いて、身を強張らせると、目の前に居た二人の見張りが小高い丘の様になっているこの場所より下の方を見下ろしながら叫んだ。

「軍部の連中か!？」

しゅる、という音と共にアルは手首の拘束がゆるまったのを感じた。すぐさま縄を解き、胴体の縄からも脱出する。勢いよく背後を振り返ると、カルロスに肩をかしてやっているベルナとユウヤが居た。

「どつやって縄を」

「そんな話は後だ！騒ぎに紛れて逃げるぞ！」

ベルナは鬼の様な形相で叫んだ。それを見て、今の状況がどれほど危険なものかアルは理解した。目の前に積み上げられていた武器の中から素早く愛剣を探り出し、帯剣すると、そのまま五人は林へ向かって走り始めた。見張りの二人が五人を見てうるたえるも、それよりも自らのアジトの方が気になるのだろう、両方とも火の手があがった煉瓦の村へ走っていった。

重症のためほとんど歩く事が出来ない巨体のカルロスを二人がかりで支えながら移動するため、速度は遅い。急な斜面を昇りながら、アルは轟々と燃え盛る粗雑な馬鹿共のアジトの方から何か土砂崩れのような音が聞いた。意図せず、そちらの方を向く。煉瓦で出来た家の屋根がずっぽりと抜け落ちている。

「……っ！」

真っ赤に燃え盛る炎は、屋根が木材で出来ていた村を一瞬で覆い尽くした。小高い位置にいるアルからは煉瓦村の全貌が全て見える。村の入り口の周辺には紅い旗を掲げた軍隊が溜まっていて、それは正反対に位置する裏口からゼノスの指示によってほとんどの住人が逃げ出している。

しかし、その中で一人だけ村の中央に取り残されている子供が居た。

あの子は。

子供は完全に火に取り囲まれ、行き場を失っているように見えた。そして頭首であるゼノスも誘導に必死で子供が取り残されている事には気がついていない。



「アル！何やってんだ！はやく来い！」

齒を食い縛りながらカルロスを支えているユウヤが、のろまな従者に苛立つように叫んだ。それを聞き流しながら、アルは必死で子供を助ける経路を探していた。あのままでは子供は焼死してしまう、自分に水を組ませてくれたあの子供が。

「アル…っ」

このまま逃げてしまえば、身の安全は保障されたも同然だ。それに自分をここまでばこにした粗雑な馬鹿共の仲間を助ける義理はどこにある？軍事同盟も結べていない。

ふと、諦めかけた自分に気がつき、アルは奥歯を噛み締めた。

そういうことじゃないだろう！義理だとか、同盟だとか　関係ないんじゃないのか？非力な子供が死にかけているんだ……

「…くそっ！」

「ゼノスさん！ゼノスさ…げほっ」

降りかかる火の粉によって腕は火傷してしまった。セスは必死に頭を腕でかばいながら、逃げようともがいていた。大文字のような業火は刻一刻と勢いを増し、自分に迫ってくる。徐々に追い詰められていく精神に、怯えながらも、必ずゼノスが助けられると信じていた。

…あのときだって。

両親に捨てられ下級盗賊達にボロ布のように扱われていた自分を助けてくれたのもゼノスだった。近くの家が凄まじい音を立てて倒壊し、周りの炎が酸素を吸い込み、巨大化する。じりじりと身を焦がすような高音に晒され、セスの子供特有のきめ細かい肌は真っ赤になっっていく。

「ゼノスさ…」

息を吸うたびに、熱気が肺に入り込み痛む。言葉を発する事も出来なくなったセスはその場でしゃがみこんだ。からからになった喉で、必死にその名を紡ぐも、すでにセスの体力は限界に達していた。霞んでいく視界の端で、セスは誰かの影がうごめくのを見た。

（ああ…やっぱり）

真っ暗になった視界だが、セスは自分が誰かに抱きとめられるのを

感じた。微笑を浮かべたまま、意識の隅っこで感謝を告げる。必ず自分を助けてくれる、正義の象徴の男の姿を。

アジトの方からは激しい熱気が伝わる。草と草が擦れる音がして、四人は獣道すらもない林の中を一気に下っていく。

「アルは、アルはどうするんです!？」

びびしと体中にあたる小枝にイラつきながら、ヘンリーは先頭のベルナに聞いた。ベルナは険しい表情でヘンリーを見ると、走る速度を強めた。

「今は紅い闘牛から逃れる事が最優先だ!」

訳が分からないヘンリーは後ろを振り返った。ひたすら林が続いている。アルが追ってくる気配はない。

「置いていくつもりですか!」

ずり落ちそうになるカルロスの肩を持ち直しながら、ユウヤが必死に叫んだ。それを聞いたベルナは苦悶の表情を浮かべ、しかし大声で返した。

「置いていくものか!アルは…アルは!」

林を抜け、開けた場所に出た。二日前、アル達が野宿をした場所だ。燃え落ちた薪が黒こげになり残っている。走り続けようとするも、突然ベルナが立ち止まるので皆足止めを食らう。

「どうした」

ユウヤが声を荒げるも、次の瞬間にはその顔には笑みが浮かんで居た。そこには、黒い制服を焦がし袖が焼け落ちてしまっているが、いたって健康そうなアルが立っていた。それを見た瞬間、ヘンリーの目から洪水のように涙が滴り落ちた。全員が無言のまま、しかし確りと意思を疎通しあう。ベルナは上手く言葉を紡げないでいたが、ようやくいつもの余裕を取り戻して言った。

「……さあ、戻るぞ」

#### 第四章：【6】 1（後書き）

ようやく自分が納得する話をかけました：自分が楽しみ、自分が納得する作品じゃないとやっぱりだめですよね^^；前のは納得できないので消去しました。

## 第四章：【6】 2

燃え落ちたアジトを見ながら、ゼノスは黙りこくっていた。腕に抱いたセスを見ながら、先ほどの少年の事を思う。

少し前、赤い鬪牛によってアジトに火をつけられたゼノスは仲間を逃がすのが精一杯な中で、置いてけぼりにされたセスの存在を忘れていた。皆を裏口から逃がし終え、セスが居ない事にようやく気づく。燃え盛る村の中には、とてもじゃないが進入できない。黒い煙が立ち昇り、むせかえるような熱気がゼノスの喉にこびりつき、思わず一步下がってしまう。

「くそ…っ！」

諦めたくはない。ゼノスがアジトに足を踏み入れる決意をした瞬間、子供を抱き寄せゼノスの方へ走ってくる人影が見えた。思わず目を見張る。その人物は、先ほど打ちのめしたはずである黒い狼の一味だったのだ。黒い制服は焼け焦げ、少年自体も少々火傷をしているようだったが、確りとした足取りで少年はゼノスへ子供を預けると、穏やかに微笑んだ。それを見たゼノスは、思わずセスを受け取った自らの腕を見ながら、崩れ落ちた。

セスが助かったことによる安心もあるが、それよりも何も、少年の器の大きさに狼狽していたのだ。普通助けないだろう、そう思い、少年を凝視する。

「な、なんで」

それを聞いた少年は、白藍色に清んだ眼差しをゼノスに向け、煤の

ついた鼻頭を指で擦りながら言った。

「なんでって言われても……」

カタカタと震える自身の腕を押さえつけながら、ゼノスは少年をにらみつけた。

「何故セスを助けた！お前は黒い狼だぞ　俺たちが昨日お前らにした事を覚えてないのか！？」

信じがたい出来事を打ち消すように、ゼノスは叫んだ。普通、自分を殴った奴らの仲間を身を挺して助けたりするはずがない。それに自分よりも年下のこの少年は、自らが出来なかったことをしでかした、その事をひけらかす訳でもなく、ただ佇んでいる。どうして、どうしてその様な事が出来るんだ。

ゼノスを言う事をあまり聞いていなかったのか、少年は小走り気味にゼノスの元から離れようとした。

「じゃあ、俺そろそろ戻らないと　」

それを見たゼノスはセスを抱き寄せ、さらにきつく怒鳴った。橙色の髪には煤がつき、凜とした目には雫が溜まっている。

「おい！」

呼び止められた少年は、汗のせいで額に張り付く前髪を指先で払いながら振り返った。

「何ですか」

「……お前、名前は？」

燃え盛るアジトが背景には似合わない会話に、少年は目をぱちくりさせながら答えた。

「アル、アル・ライトです」

それを聞いたゼノスは、アルの名前を噛み締めるように目を閉じ、次に目を開いた時にはいつもの笑みを浮かべ、立ち上がった。その腕には優しい表情で気絶しているセスが確りと抱きとめられている。

「……アル・ライト……セスを助けてくれて、ありがとう」

それを聞いたアルは、満足そうににかりと笑った。



## 第四章：【6】 2（後書き）

読者数が2500人を超えました。ありがとうございます。

#### 第四章：【7】

アル達が出発してからすぐ、エレス達は船旅に出航した。ミリ大陸は未だに位置をはつきりとは把握できていない大陸のため、食料や飲み物をこれでもかというほど船に積み込み、途中に点々とある島にも何度か寄らなければならない。危険なたびになることは、誰の目から見ても明らかだった。それでもエレスとクリフは、黒い狼の幹部である誇りと自らに対する自信のせいか、何のためらいもなく旅に出発した。黒い狼のシンボルである、牙の刺繍が施された帆が風にはためき、ぐんぐんと加速していく。勇気のある気高いその行為を、遠巻きに見る一隻の帆船があった。見たところ、どこにでも居る運び屋のようだが、何やら動きが不穏だった。青い帽子を被った乗組員の一人が、双眼鏡を覗き込みながら隣の男に話しかけた。

「黒い狼の帆船が出発しました。追いますか？」

「もちろんだ。国王からも直々に命を受けている。奴らが妙な動きをしたならば即座に追い、始末するようにと」

機械的な声で返した男は、銀色に輝く前髪が海風に揺らされるのを嫌うように目を細めた。薄い唇は血色が悪く、薄紫色になっている。肌は男性であるに関わらず真っ白で、傷一つない。何の表情もない、まるで仮面をつけているかのように無表情な男を見て、仲間であるはずの乗組員でさえおっかなさを感じる。

「分かりました、リゼル様」

リゼル・ブランク。白の羊の幹部である彼は、黒い狼の船に金髪の美女が乗っているのを確認した時点で既に追うことを決めていた。エレス・ウィアに何度も苦汁を舐めさせられている彼は、なんとしても自らの手でエレスの息の根を止めてやろうと切に思っていた。

黒い狼の帆船と一定の距離を保ちつつ、見た目は普通の帆船である白の羊の帆船も動き始めた。

紅い鬪牛のおかげでなんとか粗雑な馬鹿共の元から逃げ出したアル達は、約束の時刻に再びバトス港に戻ってきていた。人気のない廃港に佇む船を見て、少し腫れの引いた、元の綺麗な顔に戻りつつあったヘンリーは安堵のため息をついた。未だ一人で歩けないカルロスを支えながら乗船し、ベルナはひどく落ち込んだ様子でアゼル大陸のほうを見た。結局、粗雑な馬鹿共とは同盟を結ぶ事も出来ず、逆に返って嫌われた可能性もある。アルが連中の仲間を助けたらしいが、それをどうこう思う連中には思えなかった。

「…ふう」

珍しく団長がため息をついたのを見てアルは頭の上にクエスチョンマークを出した。

「どうしたんですか？」

呑気にそんな質問をするアルに、その場の全員がげんなりとした表情をする。

「普通分かるだろ？」

ユウヤは相変わらず馬鹿そうな従士に嫌気がさしたのか、少々憤怒した様子で言った。その様子を見たアルは、切れやすいユウヤの性格にむっとし、その場の甲板に座り込んでしまった。足早にベトス港を出発したのであるう、帆船はすでに動き始めていて、燃える様な夕陽が地平線に沈みかけている。

それを見ていたヘンリーは、困ったようにこめかみを掻きながら呟いた。

「全く……仲がいいんだか悪いんだか分からないな、副団長とアルは」

それを聞いたアルは勢いよく抗議した。

「悪いに決まってるだろ！」

それを聞いたユウヤはわなわなと肩を震わしながらアルに近づいた。

「な、何い　！？この野郎、従者の分際で……っ！」

それを見たアルは、縮こまるわけでもなく、半ば白けたようにソッポを向いて言った。

「別に、好きで”副団長”の従者になっただけじゃありません」

気が強い者同士が言い争いを始めると、どうにも収集がつかなくなる。日々の言い争いでそれを知っていたヘンリーが止めに入るも、完全にぶつちりと切れてしまったユウヤは、船上であるにも関わらず剣を引き抜いた。

「ぐっ……！！生意気すぎる！！そんなにつんけんすんだったら、勝負しろ！また叩きのめしてやる！」

それを聞いたアルは素早く立ち上がり、自らも愛剣を引き抜きながら言った。

「いいですよ、次はオレが勝ちますから」

嫌な思い出を思い出されたことに、アル自身もキテしまったようだ。ブリッジやらマストに待機している乗組員達が目を丸くする中で、ベルナは騒々しい部下達を見て頭痛がするのを感じた。

「ここは甲板ですよ！？万が一誰かが海に落ちでもしたら……」

ヘンリーが必死に二人の間に入り体を張って阻止しようとするも、二人の男（しかもかなり力の強い）に同時に押され細い腕は軋んだ。

「上等だ　　そんな時は濡れネズミになったアル・ライトを船の上から優雅に見下ろして、せせら笑いでやる！せいぜい命乞いでもしろよな」

大人気なくアルを挑発するユウヤを見て、ヘンリーも堪忍袋の尾が切れたのか歯を食い縛りながら怒鳴った。

「冗談じゃない、そんな事になったらどうやって」

船の上の騒動はベルナの拳骨によって制裁された。喧嘩両成敗の方式で、アルとユウヤどちらにも落ちた拳骨は、二人の頭に見事なたんこぶを作った。

「ぐあ……」

「う……」

全身が痺れるような一撃に、二人ともその場で崩れ落ちた。甲板の上で転げまわりながら悶絶するアルとユウヤを見ながら、ベルナは哀愁漂う目つきで暮れ行く夕陽を眺めた。

（アゼルで全くの成果をあげられなかったこと、ティア様になんと報告すればよいのだろうか……）

そんなベルナの様子を、心配そうに見つめるのはヘンリーのみだった。

#### 第四章：【7】（後書き）

なんか段々ユウヤとアルのキャラが崩壊していくんですが…笑”ま  
あ、書いてて楽しいからいいですよね^^；まだまだ続きます〜

## 第五章：新たな展開

三日かけてアル達はようやくリノの島へ戻ってきた。騎士団の全員が港に集まり、アル達を迎え入れたが、ベルナの表情が堅いので団員は交渉が上手くいかなかった事を理解した。誰もが気まずそうに俯き、五人が馬車に乗り込みブラック・ホーリング城へ行く姿をただただ見つめていた。

「ただいま戻りました」

ベルナは緊張した面持ちでティアベルの部屋をノックした。その後ろに続く他の四人も、自分達の主君の反応が恐ろしくて顔が強張っている。アルはティアベルからどのような返答が帰ってくるのか、そしてこれから一体何をすればいいのか等と様々な事が脳を駆け巡っていた。

(…このままで後一ヶ月もない戦争に向けて、何もしいですごせ  
るわけがない)

アルはぐっと唇を引き締めて、事の収束を待つ事にした。



「お入りなさい」

言われ、五人はしずしずとティアベルの部屋へ入った。彼女が佇んでいるテラスから見える空は薄暗く、浮かぶ月は三日月から半月になっていた。

「粗雑な馬鹿共を、仲間にはできませんでした」

跪いたベルナが、喉から引き絞るような、震えた低い声で言った。それを聞いたティアベルの肩が少し跳ね上がり、そのほっそりとした背中からははつきりと戸惑いが見て取れた。

「……」

何も返答がないことに、その場の全員が呼吸をするのも忘れ、息を呑んでいる。後ろからじつと様子を見ているアルは、部屋の空気がかつてないほどに冷たくなるのを感じた。

「そう、ですか」

ゆっくりとこちらを振り向いたティアベルを見て、アルは思わず背筋が震えた。薄暗い夜が背景で、普段ならば輝くオッドアイの両目が、絶望の色に染まっていたのだ。ベルナは主君の表情を見ると、そのまま気まずそうに俯いた。恐らく彼はこのような失敗をしたことが今までないのだろう。紅い闘牛の副団長だったらしいが、ゼノスがベルナは少々傲慢であることを呟いていた。アルは今まで自分を支えてくれていた団長の、悲しみに満ちた背中を見据え、この事態が改めて最悪であることを胸に刻み込む。

「……謝って、許されることではないのは分かっています」

ポツリ、とそう呟いたベルナを、主君であるティアベルはあくまで無言で見下ろした。ベルナは顔をあげ、ティアベルの表情を確認し、紅い瞳に狂気の念を灯した。

「ですから、私は貴方様に再び誓います」

何をするのか、周りの四人が思わずベルナを凝視する中、ベルナは腰につけた短剣を引き抜いた。そして鞘から鋭利な刃先を出すと、そのまま裾をまくり自らの右腕をむき出しにする。

「……戦場では、私の命に代えても、必ずやお守り致します」

刃先を腕に押し付け、そのまま引く。ベルナのうめき声に、思わずアルは目を細めた。鮮血が床に滴り落ち、小さなぼたり、ぼたりと染みを作る。

「な  
」

今まで無表情でベルナを見ていたティアベルは、ようやくそのオッドアイを見開き、口を何度か開閉させた。慌てたように自身のドレスの裾を摘み、ベルナの元へ駆け寄る。

「何をするのです！大事な腕を傷つけてはなりません！」

何度もナイフで傷つけられた肌からは涙のように血が流れ出し、ベルナの右腕はほぼ真っ赤になってしまった。痛みに顔をゆがめるベルナの肩を抱き、ティアベルは御付の者に布を取りにいかせた。

「…交渉一つできぬ腕ならば、貴方様への誓いで傷つけてしまった

ほうがいい……」

そう呟きながら、薄っすらと微笑むベルナを見て、ティアベルは双瞳を微かに細めた。美しい瞳が濡れた様に光り、優しい手つきでベルナの頬を撫でる。

目の前の光景を見ながら、アルは二人の間にある騎士と主人という信頼関係以外の”何か”を感じた。

そう、何か　狂おしいまでの、愛情。

「……いいのです。仕方がないことです……」

ティアベルは自らのドレスに血がつくのも気にしないで、ベルナの体をそっと抱きしめた。テラスから差し込む、清らかな月光が二人の上に降り積もった。純粹に、ベルナの行為を哀れむと共に、嬉しさを感じているのかティアベルは微笑みながら泣いていた。静かに、ベルナは震える指先をティアベルの頬へ添えた。

「……ティアベル様、私をお許してください」

それに反応するかのように、ティアベルは吐息を漏らした。長い睫毛が震え、ベルナを一心に見つめるオッドアイが細められる。

アルは思わず息を呑み、目を反らした。見てはいけないものを見てしまった気がして、心臓が妙に脈打つ。ゆったりとした、二人の甘い雰囲気を読まずに、御付の者が大袈裟に部屋へ入ってきた。それのおかげで、ようやくアルもティアベルとベルナに視線を戻す事が出来た。

「これでよろしいでしょうか！」

相当走り回ったのだろう、肩で息をしながら、御付の者は大き目の布を差し出した。

「……ええ、ありがとうございます。下がっていいわ」

それを受け取ったティアベルは、何事もなかったかのように、いつもの凜とした表情に戻り、確りと布をベルナの腕に巻き止血した。ベルナが苦しそうに歯を食い縛り、低く呻く。その様子を見ながら、ティアベルはようやくドレスが血まみれになっている事を気にする素振りをみせ、立ち上がった。

「……結果を示してください。さらない限りは、この失敗は許す事はできません」

それを聞いたベルナは、苦痛に満ちた表情を一瞬だけ緩ませ、紅く染まってきた布を押さえながら返答した。

「…分かりました」

その場に居たユウヤ・カルロス・ヘンリーは二人の様子をを特別視はしていないようで、それぞれ険しい表情をし、無言のまま宿舎に戻っていった。次の命令があれば、それぞれすぐにも名乗り出るだろう。

アルは暫し呆然とし、頭が真っ白になっていた。少しでも好意を抱いていた主君と、尊敬していた団長が、色恋の関係だったとは。

(……………)

また複雑な思考がアルの頭に割り込み、落ち着いてきていたアルの心を乱した。

## 第五章：新たな展開（後書き）

うふふ^^。今までちょっとずつ小出しにしていたつもりでしたが、今回は何故か爆発してしまいました。ベルナは設定では30歳、ティアベルは16歳。今の日本ではロリコンー！と非難を浴びせられそうですが、この時代は16歳といえど大人びています。普通に子供も生めますし。それにティアベルは黒い狼の主君なので、よりいっそう精神年齢は高くなります。しかし二人は分別があるため、人前ではあまりそういう雰囲気になることはありません。

それにしてもなかなか展開が進まない…（- - ;）  
気長に待ってもらえると幸いです。では

## 第五章：【1】

古びた宿舎の入り口に立ったアルは、ふと自分はどこに戻ればいいのかと思つた。今まではエレスの部屋に居候させてもらつていたが、見習い騎士になつた今は自分の部屋がもらえるのではないのだろうか。

足を踏み入れ、宿舎全ての鍵を管理する、巨大な鍵盤があるカウンターへ向かう。一階の曲がり角、宿舎の入り口からすぐ傍の場所にある木製のカウンターに、一人の老父が座つていた。毛糸で出来たニット帽を被り、温かそうなウールを羽織つている。アルは黙々と本を読みふけている老父に、少し遠慮しながら声をかけた。

「あの……」

アルの声に、老父は顔をあげた。皺だらけだが、少しずれた丸眼鏡の奥に見える小さな目は優しい色を帯びている。にっこりと微笑み、管理人である老父は静かに本をカウンターに置いた。

「はいはい。どうなさつたんですか」

ゆつたりとした口調に、アルはワントempo遅れながら尋ねた。

「あ、あの。…アル・ライトという名の者が住む予定の部屋はありますか？」

それを聞いた老父は、目をぱちくりさせ、おもむろに座つていたイスから立った。そして背後にある、見上げるばかりの鍵盤を蹴くちやの指で一つ一つチェックしながら、不意にアルの方を振り返つた。

「君、エレス・ウィア郷と　一緒に住んでた子？」

思わず、ぎくりと強張った表情をしたアルだが、別に気にすることはないと、わざと平坦な声を装う。

「そ、そうです」

鉄製の鍵が互いに擦れ金属的な音を立てる。背の低い老父は下の段を見終えると椅子を踏み台にして上の段を調べ始めた。流れるような指の動きは、老父が管理人としての年月が長く、熟練していることを知らせた。アルがそわそわしていると、少しの間悩むような仕草を見せていた老父が椅子の上から降りた。そして、その手を差し出す。

「はい。君がアル・ライト郷だね。エレス郷から話は聞いてますよ」  
確りとした、働き者の分厚い皮をしている老父の手の平を覗き込みながら、銅製の長い鍵を受け取る。淵には105と刻んであった。

「ありがとうございます」

自分の部屋の鍵が手に入った。その事に感激したアルは、必ずエレスに報告をしようと思った。自分がここまでこれたのは、エレスによるものが大きい。管理人に一礼をし、すぐさまエレスの部屋へ駆け上る。

「エレスさん！」

喜びのあまり、強くドアをノックしてしまったアルだが、中から返



答がないことに黙り込む。耳をすましていても、中に人が暮らしている気配はない。

(…本部かなあ?)

出鼻を挫かれ、少々落ち込み気味のアルであつたが、すぐに105号室に戻り、荷物を適当に置くと、宿舎から出た。すると、思わず誰かとぶつかってしまった。

「っ!」

ひりひりする鼻を押さえながら、アルは目の前で自らを見下ろす男を見た。相変わらず長い前髪、深緑の瞳、一目見て、その男がユウヤだと分かる特徴に、アルは吐き気がした。

「そんなに急いでどこいくんだよ、従者」

自分の胸板に突進してきたアルに、驚くような、少し薄ら笑う様な感じでユウヤは言った。それを見上げるような形になりながら、アルは握り締めていた鍵を慌ててポケットに押し込んだ。

「いいえ、別に ……何でもありません」

万が一ユウヤに、鍵一つでこんなに喜んでることがばれたらなんと言われるのか。恐らく、精神年齢が少々低いユウヤの事だ、心底面白がり、これでもかというほどアルを弄り倒すであろう。それが分かっているアルは、どうか何事もなくこの男から逃れられますようにと内心祈っていた。

「そうか……あ、お前エレスがどこにいるか知ってるか?」

思わず、アルは顔を上げて言った。

「あ、オレも知りたいんです！エレスさんがどこにいるのか……今から本部に行こうかと思って」

それを聞いたユウヤは、え、と軽く疑問の声を漏らした。そして従者が自らと同じ事をしていた事を不思議に思ったのか、指を顎にあてて考える様な仕草をした。

「何を……言つとくが、エレスは本部には居ない、俺が聞いてきたばかりだからな。宿舎にも居ないとなると……」

二人して、その場で考え込む騎士に、管理人の老父が物珍しそうな顔をして言った。

「エレス郷なら、航海に出られましたよ」

素早く顔をあげたユウヤは木製カウンターに手をつき、身を乗り出すようにして老父に迫った。

「どこの航海に行つたんだ！？」

老父は顔を近づけてくるユウヤに困りつつ、少し躊躇いながら行き先を告げた。それを聞いたアルは、衝撃を受けた。まさか……エレスが、ミリ大陸に行つたなんて！

ユウヤは、暫く身を乗り出した状態で停止していたが、ようやくゆるゆるとアルの隣へ戻った。そして深緑の瞳をぎらつかせながら、静かに呟いた。

「……従者。俺はこれからティア様のところへ行く。お前も来るか？」

上手く言葉が出せないでいたアルは、頷く事で同意の意思を表した。

第五章：【1】（後書き）

エレスを思う男二人。この二人は、普段はかなり仲が悪く犬猿の仲状態なのですが、目的が一致すると強いと思います笑”

## 第五章：【2】

ブラック・ホーリング城の南、一番日当たりの良い場所に造られた庭園にティアベルは居た。小さいながらも、所狭しと咲き誇る花々に、ティアベルは管理をする者に礼を告げる。本来ならば、彼女は元・ケルディア国王の本妻の娘、誰しもお近づきを願う身分であるが、クーデタのせいで彼女は消息が不明、リノ島以外ではもはや死んだ者扱いをされている。16歳、一番お喋りで、一番舞踏会等で注目をされる時期だ。

しかしティアベルの頭の中は、甘ったるい貴族らしくなく、戦いの事で一杯だった。繊細な髪質の、さらさらと風に流されている栗色の髪に手をやりながら、ティアベルは目の前の赤い花びらを見つめた。

「……………」

その姿を後方で見つめる者が居た。御付の者に制されながらも、強引に庭園に侵入したユウヤとアルは、今更気ましくなっていた。自分達は相当に無礼な事をしている。貴婦人の庭園に入り込み、静寂な空間を乱そうとしている。しかしユウヤは覚悟を決めたのか、そつとティアベルに近づいた。さすがに見習い騎士であるアルは踏み込むことが出来ず、遠巻きに様子を見ている。

「……………ティアベル様」

控えめな、低い声に反応したティアベルは振り替えり、それがユウヤである事を確認すると、少々残念そうにまた紅い花に目を戻した。

「何事ですか」

ユウヤは姿勢を正し、極力失礼のない様に尋ねた。

「エレス郷を、ミリへ送ったというのは真まことでしょうか？」

それを聞いたティアベルは、柔らかい花びらから指を離し、大きな瞳でユウヤをじっと見つめた。彼女の周りにはいつも穏やかな空気が流れている。

「……真まことです」

「…っ！」

それを聞いたユウヤは、拳を堅く握り締めた。目の前に居るのは自らの主君であることを自覚しているのかいないのか、その目は憎悪に染まっている。

「何故です……どうして、そのような危険な旅に エレス、郷を  
！」

ティアベルは紅い花びらに指先を伸ばし、ゆったりと囁いた。

「エレスは黒い狼の幹部ですよ？……それにクリフも付いています。彼女達以外に、他に誰がこの役目を果たせるでしょうか」

風が吹きぬけ、ユウヤの長い前髪を揺らした。瞬間、深緑の瞳が細められ、濁いた音が響き渡った。ティアベルは、今起きた事が信じられないとばかりに、目を見開いた。紅い花びらを弄っていた彼

女の手の甲は、ユウヤに叩き落とされた事によって少し腫れてしまった。

遠めで見ていたアルは、隣で息を潜めていたティアベルの御付の者が悲鳴をあげるのを聞いた。

「……」

ユウヤは、とても主君に向けていい顔ではない　嫌悪感を剥き出しにした表情で、唸るように言った。

「今すぐエレスを呼び戻します。出航の許可を」

赤くなった手の甲をさすりながら、ティアベルは視線をユウヤから外した。切なげにオッドアイを揺らすと、喉から搾り出すような、震える声で彼女は呟いた。

「　出航はエレスの意思です」

それを聞いたユウヤは、罪悪感に苛まれた表情をしたが、しかし後戻りは出来ないと、さらに詰め寄った。

「何故止められなかったのです」

すると、今度はティアベルがユウヤの頬を叩いた。再びアルは御付の者が悲鳴をあげるのを聞いた。木々が風に揺らされ、緑の葉が地面を這うように流されていく。

仕返し、なのだろうか。

痛む頬に、ユウヤはティアベルを見ていた。お互い、これ以上ないというほど張り詰めている。ティアベルは頬を高揚させ、憤怒した様子で声を荒げた。

「口を慎みなさい！貴方は私の騎士なのですよ　それに、止めなかつたど、思うなんて」

美しい緑と青の瞳が揺れ、一気に液体が目尻に溜まる。それを見たユウヤは、今更になって動揺したのかその場に跪いた。

「も、申し訳ありません！私としたことが……」

ふわふわとしたユウヤの茶髪を見下ろしながら、ティアベルは何かを考え込んでいた。大きな瞳で、じつとユウヤを観察する。やがて、自らの頭を感じた感触に、ユウヤはハツとした。

「……彼女は、彼女の誇りで行動してます」

頭をゆるゆると撫でられ、たじろいだユウヤは、無言のまま俯いた。その様子を遠めで見ながら、アルは自分も駆け寄るか否か迷っていた。整えられた芝生を、何度も靴で擦る。

ユウヤの頭を撫で終えたティアベルは、赤い花弁を流し見ながら静かに言った。

「　恐らく、彼女は貴方に感謝しないでしょう」

それを聞いたユウヤは、深緑の瞳を細めた。まるでそんな事は問題ではないとばかりに、素早く立ち上がると、少しだけ首を傾げ、嘲るように口角を上げる。



「かまいません」

遠目からでは反抗的にみえる態度だが、その瞳には、先ほどの様な敵意は宿っていないかった。むしろ、親から褒美の言葉を貰うのを待つ子供のよように、爛々と輝いている。そんなユウヤの様子を、訝しげな目つきでティアベルは見た。そうして、眉根を寄せ、困った様に宙を眺めると、ひらひらと彷徨う蝶が彼女の肩に止まった。黄色の鮮やかな羽を開閉させながら、蝶はティアベルの頬をくすぐる様に触覚を動かした。

「……同じ幹部なら、分かるでしょう？ エレスに嫌われてもいいのですか？」

その問いに、少しばかり閉口したユウヤだが、すぐにきつとした目つきでティアベルを見据えた。

「いいです。エレスの命には換えられません」

それを聞いて、今度こそティアベルはため息をついた。彼女の頭の中は幾重にも考えが張り巡らされているのだろうが、今回ばかりは仕方がないといった様子でユウヤを見る。

「……追いたいのならば追いなさい。期日までにはまだ時間がありますし、島にはベルナが居ますから、恐らく大丈夫でしょう」

それを聞いたユウヤは、思わずぐっと拳を握り、後方のアルを見た。アルは渾身の笑みを浮かべるユウヤに、自分も少し嬉しくなるのを感じた。

「ありがとうございます！それでは」

一歩下がり、深く礼をする。そして小走り気味にアルの方へ向かったユウヤを見ながら、ティアベルは摘んだ赤い花びらに顔を埋めた。甘い匂いが鼻腔に充満し、その瞳を潤ませる。

好き勝手な行動ばかりする騎士達に、内心かなり困惑していたが、ティアベルはドレスの裾をつまみあげると直に城の中へ入った。

白の羊がリノの島に来る時まで、残り15日だった。

第五章：【2】（後書き）

展開が…進まない…です（ー；；）

でも書いたほうがいいと思うシーンばかりなんで…無駄な贅肉は取った方が良いでしょうか…

ユウヤがエレスを思う気持ちを表したかったのです。

後、ネット小説ランキングを押し下さった方々ありがとうございました。嬉しいです！

## 第五章：【3】

手摺に手をやり、エレスは眼下を覗き込んだ。船体にまとわりつくように吹き出る白い泡を見ながら、ふと背後に感じた気配に眉を寄せる。

「クリフ」

いつもどおりに微笑むクリフは、そつとエレスの隣に立った。それを見たエレスは、まるで自身の縄張りに入り込んだ犬を見る猫のようになり、きつい目つきでクリフを睨んだ。今にも唸りだしそうな勢いで自らを流し見る姉に、クリフは困ったという様子で視線を宙にさまよわせた。

「……何だ？用がないなら、あまり私に近寄るな」

仲間であるクリフにさえ、吐き捨てる様にそう言ったエレスを見ながら、クリフは軽いため息をついた。ピリピリとした空気を発しているエレスを諭すように、ゆっくりと噛み締めるように忠告する。

「……そんなに、張り詰めては だめですよ」

それを聞いたエレスは、弾ける様に横のクリフを見た。

「でも！」

エレスの視線の先には、真面目に彼女を見つめる弟の姿があった。薄い青の、透き通るような瞳にじっと見つめられ、エレスは少々たじろいだ。自分に似た顔だとはいえ、やはりクリフはかなりの美形

なのだ。そんな顔に見つめられては、さすがに動揺する。

「……張り詰めすぎた風船は、破裂します」

静かに、大きくもなく小さくもない声量でクリフは言った。それを聞いたエレスは、ぐっと、何かに耐えるような表情をしたが、すぐにクリフから視線を外した。そして少々雲の量が増えてきた灰色の空を見上げながら、強張っていた肩から力を抜いた。手摺を堅く握っていた彼女の指が、少し震える。

「……ごめん。ありがとう」

赤くなった手の平を見つめながら、エレスは深い青色に変わった双瞳を不安げに揺らした。髪を上にもとめているため、剥き出しになっている彼女の白い頂を見ながら、クリフは真面目な表情で呟いた。

「……姉さんは僕が守ります」

手の平を握ったり開いたりしながら、エレスは再び険しい表情をクリフに向けた。

「……いい。自分のことは自分でする」

強風で、二人のブロンド髪が揺れる。腰の位置に感じる堅い感覚に、クリフは面倒臭そうに手摺に手をやり振り向いた。そして姉と同じように灰色になってきた空を仰ぎながら、微笑む。

「……全く、強情ですね。姉さんも」

そうして、クリフは凜とした姉の横顔を盗み見た。長い睫毛は、い

つも微かに震えている。すっきりとした顎のラインに見惚れ、次に自身の方を向いたエレスの双瞳に吸い寄せられる。

「クリフ程じゃない」

驚いた様にクリフが目を見開くと、それを見たエレスは笑った。零れる白い歯、愉快そうに歪められる表情。それらを見ながら、クリフは内心ほっとしていた。

これからミリへ行くという事に、事の他姉は敏感に反応した。あのままの精神状態でいたら、彼女はミリへ着く前に衰弱してしまうだろう。

(…そんなに、張り詰めないでください)

そう願ひ、クリフの中で姉は自分が守るといふ決意がより一層堅くなる。空はますます雲に覆われ、不意にクリフは頬に冷たい感触を感じた。思わず頬に指をやると、水滴がある。

「……………雨……………」

ぽつ、ぽつと降ってきた雨に、クリフは呆けた様に頭上を見上げた。船に乗っている全員が慌てだす。天候に恵まれないとは、ついていない。

(この様子では、ミリへの到着は遅れるな……………)

「……………さいあく」

憂鬱そうな表情でそう呟いたエレスを見ながら、クリフは背筋に何

か冷たいものを感じた。物理的なものではない、何か感覚的なものだ。ぎゅっと手摺を握り、辺りの様子を確認しようとクリフが身を乗り出したその瞬間、激しい衝撃が船を貫いた。思わず甲板上に居た数名が体勢を崩し、転がっていく。

「！」

絶句し、瞬時にクリフは隣に居たはずのエレスを見た。彼女は必死で手摺に掴まり、打ち付ける波飛沫に耐えていた。歯を食い縛りながら、足元の海水の勢いに混乱する。

「どうなって」

水滴が飛び散り、二人の顔に降りかかる。思わず反射的に目を閉じた二人は、次の瞬間には完全に船から放り出されていた。

「うわ…っ！」

「なっ！」

第二の大波がきたのだ。深い青色は悪意を持って二人を呑み込もうと迫る。白い水飛沫と共に、海に叩きつけられ、全身に走った痛みがクリフは呻いた。

ぐるぐると、渦巻きのように回転する流れに巻き込まれながら、クリフは必死で姉の姿を探した。視界が歪み、必死で唇を引き絞るも、唇の端から漏れ出した空気が気泡となり出て行く。

（姉さん…！）

轟々と耳鳴りがし、必死で海面に浮上しようとするも、上から船体が落ちてくるのを回避するので精一杯だ。何が起きたのか、状況を把握しようとする暇もなく、クリフは息苦しさで喉を押さえた。

(……っ)

がば、と口を大きく開き、酸素が一気に流れ出す。必死で足を動かすも、辺りは深い青へと変わっていく。暗い影が迫ってくる。

(……姉さん……)

霞んでいく視界と共に、クリフは意識を手放した。



## 第五章：【4】

真っ白な砂と、空よりも透き通ったジェイブルーの水が浜辺に押し寄せる。白い泡を纏った漣は、いつも一定の位置まで昇り、去っていく。延々と続く白い浜辺に、黒い物体が二つ。

「……ん　う」

頬が擦れ、微かな痛みと共にエレスは意識を取り戻した。堅い感触を確かめるように、何度も手や顔を動かすと、その度にジャリジャリと言う音がする。彼女の煌くようなブロンド髪には所々砂がついてしまっているが、降り注ぐ太陽光のおかげで美しさは失っていない。

薄っすらと目を開き、その長い睫毛にすら付着した白い砂粒を瞬きによって落とすと、エレスは焼ける様な暑さに眩暈がした。じんじんと、黒い制服を着ているおかげで焼けはしないが、その代わりに蒸される様に暑い。ゆっくりと上体を起すと、近くで倒れているクリフを見る。

「……」

外傷はないし、微かに呼吸もしている。首に指をやり、脈もあることを確認すると、エレスは白い砂浜に座り込んだ。そうして、目の前に広がる海に目を細める。

(…この様子だと、どこかの島に漂着したようだな)

振り返り、背後は鬱蒼と森が茂っているのを確認し、再び海へ視線を戻す。

「……」

ふと、エレスの隣で声がした。目覚めたクリフが、あぐら脛を押さえるようにして体を縮こまらせている。外傷はないと安心していたエレスだったが、弟のその様子を見て瞬時に血相を変えた。

「どうした……痛むのか？」

脛を押さえているクリフの手に、自分の手も重ね合わせる様にして尋ねる。急に手の甲に熱さを感じ、クリフは跳ねる様に上体を起こした。そして、隣に居るのが姉だと気がつく、ようやくいつもの笑みを浮かべ首を横に振った。

「いいえ。大丈夫です。恐らく、少し打撲しただけかと」

「そう……ならいいけど」

二人とも意識を取り戻した事で、多少の余裕が出来ていた。静かな、漣の音だけがする砂浜で、互いに視線を交わす。

「……」

唐突に、エレスが聞いた。それを聞いたクリフは、脛を揉み解しながら辺りを見回した。

「……情報が、なさすぎますね。恐らく、どこかの島……いや大陸かもしれない」

近くに落ちていた貝殻を拾い上げ、それを手の平に乗せながら、エレスは少しだけ首を傾げた。

「……これ、何の貝？見たことないけど……」

薄ピンクの、淡い色の貝殻は美しかったが、何か儂い感じもする。見たことのないモノに、クリフも不思議そうにエレスの手の平の上の貝殻を覗き込む。

「……」

しかし、見る見る間にクリフの目は見開かれた。普段ならば薄い水色の瞳が、深い青に変わっていく。薄い唇が、カタカタと震え始める。

相変わらず、手の平で貝を摘んだり転がしたりするエレスの肩を掴み、クリフは強引に自らの方へ向かせた。驚いたエレスの指から、貝殻が落ちる。

「姉さん。この貝はA shiny tellin shell  
1（桜貝）と呼ばれる貝です」

それを聞いて、エレスは眉を潜めた。途端に二人の周りの空気が変わる。ざわざわとした通り風が、背後の森から流れだす。深緑の木々の間に、暗い影が幾つも現れる。

「……何故名前を」

クリフは、森の方を見ながら、静かに言った。

「母さんが、持っていたものです。桜貝は、ある地域にしか生息しない」

そう言うと、クリフは徐に腰の剣へ手を伸ばした。それを見たエレスも、森から噴出してくる風に何かの匂いが混ざっていることに気がつき、一瞬で短剣の柄を握む。

「そう、”ミリ大陸”近辺の浜辺でしか、生息しない貝です」

二人が息を呑んだ瞬間、目にも留まらぬ速さで森から何かが飛び出した。素早く立ち上がり、剣をかまえると、二人は目の前の光景に言葉を失った。

「っ！」

激しく唸り声をあげながら、二人を取り囲んだのは数匹の獣だった。ふさふさとした白い毛、ピンと立った大きな耳、犬の様に突き出た鼻先に皺を溜めながら、鋭い眼光を放つ緋色の瞳。

囲まれ、じりじりと距離を狭めてくる獣を睨みながら、二人は囁くようにして会話をする。

『「じいじはミリなのか」』

『「恐らく」』

『「じいつらは一体…」』

『「分かりません」』

熱さ以外に、吹き出る汗にエレスは舌打ちをした。額から鼻筋へ、次に鼻筋から頬へ。ゆったりと流れでる汗を拭うこともできはしない。

獣達との距離がもう、一馬身という所まで迫った時、再び葉が擦れ合う音がした。思わず音の方向を睨んだ二人は、再び絶句する事になる。

「う、そ……」

柄を握る指が振るえ、思わず落としてしまいそうになるのを、寸でのところエレスは踏みとどまった。自分達を取り囲む獣と似ているが、それらよりもさらに一回り大きな体をした獣が、居る。

すぐにエレスは、その獣が長なのだと思った。勘であるが、間違いない、と確信する。

二人をじっと見据えながら、獣は微かに口を開いた。鋭い牙が覗き、さらに隙間から赤い舌が垂れる。押し付けあっている背中が暑い。燃えるような日差しの下で、エレスとクリフは覚悟を決めた。

『……エルフの……匂いがする』

微かに聞こえたその言葉は、空気を振るわせたわけではない。エレスとクリフは、ハツとして獣の方を見た。取り囲んでいる方ではない、一際大きな獣の方だ。

『おまえら…エルフ…?』

獣が微かに、緋色の目を歪めた瞬間。二人を囲んでいた獣が、全て同時に二人へと飛び掛った。

## 第五章：【5】

深い森の中央、より一層木々が生い茂り、深緑で覆われたその場所に、清んだ湖があった。透明、というよりも不可視に近い。覗きこめば、深いはずの底が見えてしまう。決して地表まで光の届く事がないこの森で、唯一光が差し込む場所だ。キラキラと輝く湖面を、小鳥達はじつと見据えている。

「……」

何枚にも重なった大きな岩の根っこに、エレスとクリフは倒れていた。地面を覆いつくす深緑のコケ類がクッションのようになっていたため、二人とも一向に目を覚ます心配がない。それどころか、すやすやと気持ちよさそうに眠っている。そんな二人の様子を、少し離れた位置から眺める一人の青年の姿があった。

上半身は裸体で、充満する湿気のためか微かに濡れている。彼の逞しい背中には、鳥の羽を思わす模様が彫り込まれており、しなやかな二の腕には色鮮やかな複数の腕輪が嵌めてあった。髪は青の色が抜けてしまったような薄い青色で、傷一つない顔は凜としている。美しい、綺麗という言葉よりも、妖艶、その言葉の方が似合う。

見かけはあまり人間と変わらない彼であったが、唯、瞳の奥にもう一つ瞳があり、その目は蛇の様に鋭く光っている。そして……何よりも違うのは、その尖った耳であった。

「……う」

微かに、クリフの声が聞こえた。青年は持っていた槍を二人の方へと向け、じりじりと詰め寄った。

「……」

寝ぼけ眼のまま、微かに瞳を開けたクリフは、鼻先にある槍の穂先に思わず目を見開いた。

「いつ……！」

思わず起き上がるうとするも、寸でのところで動きを止める。

( 下手に動いてしまえば、殺される )

自分の勘を信じたクリフは、ゆっくりと両手をあげた。

それを見た青年は、クリフが攻撃してこない事を不審に思ったのか、すつと穂先を下に向けた。クリフは前の前の、真っ白な肌を持つ人間を見て何か違和感を感じていた。上体は裸であるにも関わらず、ほとんど日焼けしていないのだ。

『人間ではないな。お前ら』

青年がそう告げた事に、クリフは一瞬躊躇した後、ゆっくりと頷いた。そうして、ようやく近くのエレスも意識を取り戻した事を察知する。

『……フェリスがお前らを捕らえてきた。フェリスはエルフ以外が森に進入すると八つ裂きにする』

勘ぐるような青年の視線に、クリフはぐつと堪えた。そして背後で自分の指に触れているエレスに、今はまだ起きるべきでないと言いで伝える。



自分達を襲ったあの獣がフェリスという名だという事を知り、今はただ耐えるようにしてクリフは押し黙る。

『…………お前ら　何だ？』

八重歯で唇を噛み、青年は爬虫類のような目をさらに尖らせた。クリフ達が何者なのか、分からない自分に腹を立てているのか、かなり憤怒した様子で青年は言った。途端、クリフはその場の空気が揺れるのを感じた。

(…………！？)

風は吹いていないはずなのに髪の毛が揺れ、一定の周期で吹き抜ける何かがクリフの体を圧迫する。顔の前で腕を交差させ、その隙間から青年を見たクリフは、思わず息を呑んだ。

青年の体から何かが出ているのが見えるのだ。薄い青、髪の色と同じ色の……オーラの様なものが全身に纏わり付き、凝縮し光ったかと思えば、次の瞬間には青年を中心とした円の範囲に広がる。その範囲に自分は居るため、当然何かがやってくる。

「ぐっ……！」

耐え切れず、後ろに弾かれるようにして吹っ飛んだクリフは、岩に叩きつけられた。それを見た青年は、ようやく我に返ったようで、「何か」を放出するのを止めた。確かめるように指を曲げ、次に拳を作ると、青年は辛辣に告げた。

『…………おれとした事が…………お前ら、ついてこい。長に会わせる』

ぐったりと頭垂れるクリフを支えながら、エレスは全身を駆け巡る寒気に思わず手足が震えるのを感じた。

## 第五章：【5】（後書き）

まだまだ更新していきたいのですが、生活が忙しすぎてどうも更新する時間が取れそうにありません。それにまだまだ修正したい部分もいろいろあります、月一、もしくはそれ以上の遅筆になるかと思われます。高評価を頂いている作品ですので、頑張りたいのですが、  
.....どうか、気長にお待ちください。

## 第五章：【6】

深い森の奥、灰色の岩肌の出た、崖の底のような場所にエルフの住処はあった。近くには澄みきった湖があり、様々な生物が他の大陸とは違った進化を遂げている。

フェリスは、ミリの広大な森の中でもかなり上位の力を持つ獣だ。発達した牙は鋭く、血の色に染まった緋色の目に睨まれば、大抵の生き物は萎縮し、動けなくなる。森を吹き抜けるとおり風に匂いを紛らせ、恐るべき速さで獲物を捕食する。

そんな彼らでさえも恐れる存在が、エルフだった。彼らは自らの体内に蓄積されている”気”　つまり生命の源の様な力を、具体化し、操る事ができる。物体に凝縮した気をぶつければ、物体はその圧力に耐え切れず破裂する。

逆に薄く、広く気を伸ばしてしまえば、物体を取り囲み動けなくしてしまう。様々なことに使える分、あまり頻発すると気がなくなり、エルフ自体も死んでしまう。諸刃の剣であるものが、”気”だった。

エレスとクリフは、目の前の半裸の男を見ながら、自分達が相当に危険な状況であると気づいていた。尖った耳、色素の薄い肌や髪から判断して　男は恐らくエルフだ。

クリフは、手の平に気を集めようとも思ったが、はたと気がついて止める。相手は、気を操る事に慣れている、いわば”気の達人”だ。まだあまり気を操る事になれていない自分が、下手に出してばれてしまえば。

( 命の保証は、ない )

奥歯を噛み締めながら、クリフはそつと指先から力を抜いた。隣で周囲の気配を探っているエレスを見ながら、強く脈打ち始めた心臓に震える。

熱していく頭の中で、ふと鮮麗に記憶を思い出す。

血まみれの手、殺された父親、初めて握った剣の柄の感触。

泣き叫ぶ、幼い頃のエレスと、自分。そして、父親が死んでからあからさまに精力をなくしてしまった母親。

( ……守ると決めただ )

母親が言っていたことは真実だろう。自分達がミリの森から脱走したエリスの子供だと分かれば、即八つ裂きにされる。なんとなく、自分の経験から、そう確信した。

指先に、何かが当たった。それを、微かに握ってみる。クリフの行動に驚いたエレスが、少し動揺したように隣の彼を見た。クリフは、エレスの細い指を握っていた。まるで子供が親を頼るように、恋人が恋人に甘えるように。

彼女の細い指を握りながら、クリフは決意を固めていた。この世で

一番守るべきものだ」と決めたエレスには告げられないまま、彼の中でその思いは強くなる。

” 例え自分が死のうとも、エレスだけは守ってみせる ”

その思いを知ってか知らずか、エレスは握られた指を払った。自分のことは自分です、彼女もまた、そんな思いを持っていた。

『ここだ』

ようやく、二人を連れたいルフは湿った空気が充滿している場所で立ち止まった。クリフとエレスは、着ている制服がぐっしりと重くなっているのを感じた。

草が敷かれただけの屋根、土を固めただけの壁、原始的なそれは一応家なのだろう。自然の環境を、何かで区切っただけの空間だが、その中にエルフは住んでいた。

木の実を繋げたようなものがぶらさがっている入り口をくぐると、中には一人の男が座っていた。薄茶色の草を結び、敷いている。動物の毛皮や、頭部の骨なども散らばっている。森の生き物の全てを集約したような空間に、一人。

『ウィズダム長』

目を閉じ、微動だにしない。逞しい上半身は、鍛え抜かれた美しいラインを描く。髪は少し癖のある、ウェーブがかかったブロンド色だ。直線的な眉は髪と同じ色で、長い睫毛は白磁のような頬に影を落とし、確りとした輪郭に、引き締まった口元。

人間であれば相当の美男子であろう男は、部屋に存在が三つ増えたことを気にする素振りもなく、ただ押し黙っていた。

『長、お目を。フェリスが引き裂かない奴らがいました。人間です』  
爬虫類のような目をぎらつかせ、青年はその場に跪いた。背中の中の模様が、湿気のせいか輝く。

『……何？』

それを聞いて、ゆっくりと瞼をあげたウイズダムは、エレスとクリフを見て少しだけ口角を上げた。そして、近くで頭を下げていた青年の頭に指をやった。

『下がれ、シリル』

言われたまま、シリルと呼ばれたエルフの青年はエレスとクリフを睨んだ後、出て行った。空間には、エレスとクリフ、そしてエルフの長であるウイズダムのみとなった。

ピンと　高い波長で響く高音のように、空間は張り詰めていた。  
ウイズダムは、深い蒼の瞳でクリフとエレスを一瞥し、暫し彼らを観察するようにその視線を外さなかった。

クリフは、背中に張り付くように水気を含んだ制服に苛つきながら、じっと動かなかった。今動いてしまえば、次の瞬間には生きている自信がなかった。それほどまでに、ウイズダムから放たれる気力は強かった。静かな状態でも、強い圧力をもった粒子が身体から漏れ出している。指や足先といった末端に流れる血流が、何故か敏感

に感じられた。

『……エリス』

ぼつん、とウィズダムは呟いた。瞬間、クリフの心臓が跳ね上がる。

『エリスの、子だな。お前達』

ウィズダムは、目に入るほど長い前髪をかきあげながら、ゆっくりと立ち上がった。そして、腕を曲げ、クリフの方をじっと見据える。

『帰ってきたら、どうなるか 聞かなかったのか？』



## 第五章：【7】

その場の空気が、まるで心臓が脈打つように震える。クリフは、どうみても目の前のエルフの長に勝ち目がないと知っていた。だからといって、このまま犬死をしても意味がない。

彼の頭の中で、いくつかの選択肢が浮上する。

眉根を寄せ、警戒心を剥き出しにしているクリフを見て、ウィズダムは嘲笑した。

すると、風の気流など全く感じないにも関わらず、ウィズダムのゆるやかなブロードの髪が微かに靡いた。ウィズダムを凝視していたエレスの顔色が、驚愕に染められる。

『そうか　あれからもうそんなに時間が経ったのか……』

深く暗い、まるで深海のような紺色の瞳が、二人に向けられる。エレスやクリフは、激怒したとしてもこのような色にはならない。そう、”気”の力は、本人が生まれつき持つ色の濃淡に比例する。

”気”が強ければ強いほど　感情が高ぶった時の瞳の色は、濃くなる。

そして、次の瞬間。限界まで溜まった水が、零れ落ちるように、ウィズダムの身体から気が放出された。

「……………!!」

ビリビリと、クリフは頬や手の甲、制服からでていいる部分が痺れるのを感じた。先ほど感じた、末端の血流から収縮していくような、感覚。恐らく身体は危険を察知しているのだ、動物としての本能が、そうさせる。全身の毛は逆立ち、身体の内部から吸引されているような、物理的圧力。

エレスは、体験したことのない感覚に、思わず自らを掻き抱いていた。プツプツと、鳥肌が立ち始める。この感覚が、目の前のウイズダムというエルフによって齎されているのだとしたら。

(信じられない)

唇がうち震え、彼女の瞳は、薄い青へと変わった。殴られたり、切られたりして与えられる外的痛覚ではない。内部に侵入し、末端の血液から内臓器官までも搾り取られるように、痺れの波紋は増幅していく。

どうしようもなく気持ちの悪い感覚に、エレスはついに固く目を瞑った。気を溜めることを知らない一般人に近いエレスは、”気”の圧力を体験するのは初めての事なのだ。

思考することさえままならない、指先や足先、頭から始まった痺れの波紋はついに心臓に達し、思わずエレスは息を呑んだ。まず赤く疼く心臓の表面をなぞるように、痺れが纏わりつき、当人の呼吸を止める。次に、瞬時に細胞の隙間よりその中央まで侵入し、電流を流し弾ける。

「…あ…っ！」

暗い視界がスパークしたように、エレスは足をふらつかせた。深い動揺が全身を包み、痺れが消えてしまっても不安な気持ちは残る。

ようやく深い息をついたエレスを見て、クリフは激しい憤りを感じた。そして、その衝動は表情にそのまま出た。クリフの殺気を感じたのかいないのか、ウィズダムはようやく気を放出するのを緩やかにし、呆れたような声を出した。

『何だ、そっちの女の方はほとんど純な人間じゃないか。……愚かな父親の血を色濃くついたらようだな』

顔色がどんどん悪くなっていっていくエレスを見て、クリフは舌打ちをした。

(今は、とにかく姉さんを助けないと……！)

瞬時に、腰につけた剣の鞘を握る。それを見たウィズダムは、再び気の力を強めた。

凜とした端整な顔つきが歪み、何かの牙を繋げて作ったのであろう首飾りがカタカタと振動する。一定時間、クリフとウィズダムはお互い睨みあい　そして次の瞬間、クリフは鞘から剣を抜いた。銀や鋼鉄など、鍛えられた剣の刃と鞘が擦れ、鋭利な音がする。自らに反抗する態度をみせたクリフを見て、ウィズダムは薄ら笑いを浮かべた。

「二つ、お願いがあるのですが」

まだ、いつもの微笑を絶やさないうまま、クリフは告げた。それを見たウィズダムは、不審そうに眉間に皺を寄せた。そしてそのまま、

握っていた拳を広げ、手の平に気を圧縮し始める。

「一つ目は、一対一の戦いにして欲しいのです」

それを聞いたウィズダムは、フツと表情を緩めた。

『もとよりそのつもりだ。脆弱な人間の血が混ざった貴様など、本来ならば俺は眼中にもない。しかし昔からの約束だ。』生きては返さない” 確実に俺一人でやる。安心しろ』

それを聞いて、クリフは二つ安堵したように微笑んだ。

「よかった　それで、二つ目。ですが」

今まで笑みを絶やさなっていたクリフだが、次の瞬間、その色彩をなくした。無表情に近い、虚ろな目をして、ウィズダムを眺める。それは、彼の中で最も重要な事柄を伝える合図だった。

「私を殺すのは一向に構いません……が、この人を殺すのは、止めてください」

剣の先で、エレスの腕に触れたクリフに、エレスはハッと目を見開いた。限りなく薄かった青が、再び元の深青色に戻る。低い、本気で心の底から殺意に満ちた声でそう告げたクリフに、ウィズダムは笑いを噴出した。顔を指で隠しながら、笑い声を荒げる。

『くつく…何を言うか。それでは交換条件にならないだろう　貴様が俺に負ければ、その女も死ぬ』

高ぶった精神をコントロールできないのか、ウィズダムはそのまま

開いた手の平をクリフに向けた。

しかし次の瞬間、見えない気の塊がウイズダムに当たり、そのまま彼は後ろに吹き飛んだ。

土の壁を突き破って、ウイズダムは外へ飛び出した。勢いよく地面にたたきつけられ、転がったウイズダムの身体は、すぐに停止した。ダランと、脱力した太い腕が、その衝撃の強さを物語っている。

「エレスを殺したら、貴方も死ぬ。必ず、殺す」

ヒュン、と剣先で空気を切ったクリフは、地面に転がったままのウイズダムを見て、満足そうに目を細めた。

## 第五章：【7】（後書き）

<お知らせ>

遅筆になるかも、とお伝えしましたが、本格的に休載になりそうです。

受験勉強をしなければなりません。

来年の春に、もしかしたらまた復活するかもしれません。

息抜き代わりに書くかもしれません。

全てその時々状況によりますが、更新を待つて頂いてる人が居る限りは、

頑張りたいです。ランキングからも抜けました。暫く停滞しますが、お願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7811b/>

---

Color blindness

2010年10月9日05時35分発行